

コロナを暴く!

「情報」という名のウイルス

一般社団法人 武士道 代表理事 与国秀行 著



序章 常識崩壊

人は権威に弱い生き物

貴方は、もしも「権威ある誰か」から、「このボタンを押すと目の前の人物の体に電流が流れます。しかしためらうことなく、ボタンを押してください」と依頼されたらどうしますか？「自分は絶対にそんな命令には従いません」と答えますか？それとも仕方なくボタンを押しますか？

アメリカのイェール大学の社会心理学者スタンレー・ミルグラム博士は、ユダヤ人を両親に持つことから、ナチスが行った『ホロコースト』のメカニズムを説明するために、「権威への服従実験」というものを行いました。

その実験とは、本当は電流は流れないのですが、しかしボタンを押すと電流が流れる演技をする役者をまず準備します。次に老若男女の実験対象者に来てもらいます。そして「強大な権威」を持つ人物が、その実験対象者に対して、ボタンを押すように依頼します。役者は苦痛の演技をして、絶叫し、悶絶し、金切り声を上げます。しかし権威者は実験対象者に対して、冷酷な表情を浮かべて、「迷うことはありません。ボタンを押してください」と、さらにボタンを押すように依頼します。

数百万人ものユダヤ人を殺戮した責任者と言われている人物に、アドルフ・アイヒマンという男がいました。この実験は、その男の心理を解明するための実験でした。そしてこの「権威への服従実験」によって、なんと約9割の人がボタンを押したのです。この実験から「人間がいかに権威に弱いか」ということが分かりました。

今、『WHO』は人々に「コロナパンデミック」を声高に叫び、

「マスク着用」と「ワクチン接種」を人類に呼びかけております。そして政府も、マスクもその『WHO』の指示に従って、「緊急事態宣言」を発令したり、「自粛要請」をしております。『Facebook』や『Google・YouTube』も、この『WHO』の指示に従わないユーザーのアカウントは消しにかかります。私も『YouTube』アカウントを消された一人です。

確かに『WHO』に対して、私たちは「権威」を感じます。あるいは「その配下にある」と言っても過言ではない『米国疾病予防管理センター(CDC)』、もしくは日本の『厚生労働省』にも、私たちは「権威」を感じます。さらにそれらの指示に従っている一流大学を出たお医者さんにも、やはり私たちは「権威」を感じます。そればかりか、そうした人々を次々と出演させているテレビマスコミにも、もちろん「権威」を感じてしまいます。

そしてそうした「権威」が、いつの間にか「マスクの着用」、「自粛要請」、「緊急事態宣言」といったことを「常識」にしてみました。つまり人々が抱く「権威」が「常識」を作り上げたわけですから、どうやら「権威」というものは、いつの間にか「常識」を築くようです。

人は「権威」には弱いものですが、しかし先ほどの「権威への服従実験」にもありますように、その「権威への弱さ」が、時に災いに転じることがたしかにあります。しかし科学者インシュタインは言います。「何も考えずに権威を敬うことは、真実に対する最大の迫害である」と。

今、世界には「コロナパンデミック」が襲っておりますが、私たちの「権威への弱さ」が災いに転じ、どうやら真実を迫害しているようです。

人類が知らない超権力者の存在

そしてもちろん「完全なる真実」は未だ闇の中にあり、すべてが明らかになっているわけではありませんが、しかしそれでも確かに言えることとして、「コロナ騒動は茶番である」ということです。なぜなら事実と事実を結び付けて考えていけば、「コロナ騒動は茶番に過ぎない」という結論にしか辿り着かないからです。

おそらくこんなことを聞かされたら、多くの人が「そんな話は信じられない！」と疑うどころか、むしろ怒り出すことでしよう。なぜならこれだけ新型コロナウイルスが世界中で流行し、なおかつ多くの人々が苦しんでいる以上、「地球規模の茶番など、到底、信じられない」というのは、むしろ普通の感覚だからです。

もちろん私は、「コロナウイルスは存在しない」と言っているのではありません。コロナウイルスは実際に存在しているでしょうが、この「大げさなコロナ騒動は意図的に演出されたものである」と、私は言っているわけです。

そして私は、コロナのトリックを暴きました。本書はそのコロナトリックを説明するものです。

たとえば私の友人にマジシャンがいて、その友人に、一つ手品を教えてもらったことがあります。その手品のトリックが分からなかった時は、まる手のひらのどこかから、一万円札が突然、出沒したかのようで、不思議な感覚でした。しかし一度、そのトリックを教えてもらおうと、「ああ、今ここに一万円札があるのだな」ということが分かります。しかしだからと言って、私がその手品を出来るわけではありません。

これと同様に、今回のコロナ騒動にもトリックがあります。そして一度、トリックが分かってしまうと、もう騙されなくなります。

もちろんトリックが分かったからと言って、コロナ騒動は簡単に起こせるようなものではありません。

本書は、コロナのトリックから、二度と騙されなくなるために書かれたものです。

「そんなことが果たして可能なのか？」と思うかもしれませんが、しかしどうか冷静に考えてみてください。世界的に超巨大な権力を持つている者たちが存在しているとしたら、コロナ茶番劇を演出できると思いませんか？そしてその権力者が、もしも思想的に病んでいるとしたら、コロナ茶番劇を演出することもありえませんか？

一般的に「世界で最もお金持ち」と言われているのは、『アマゾン』のジェフ・ベゾスで、彼の資産額は2000憶ドルです。あるいは『マイクロソフト』のビル・ゲイツで、彼の資産額は1000憶ドルです。これらの資産は、日本円にすると20兆円、10兆円というとても大金額になります。

しかし彼らを上回る大富豪がいます。「ロスチャイルド一族」です。彼らは国際銀行家で、実はアメリカ大統領を退任されたドナルド・トランプが会社経営で上手くいかない時には、幾度となくトランプを支援してきました。そうした過去もあってか、実はトランプ政権で商務長官を務めたウィルバー・ロスという人物は、このロスチャイルド一族の投資ファンドの責任者でした。あるいはトランプ政権で財務長官を務め、元『ゴールドマン・サックス』の元経営者であったステイーブン・ムニューシンという自称ユダヤ人の人物も、やはりロスチャイルド一族と馴染み深い人物でした。

アメリカ政権にも、自分の息のかかった人物を送り込めるほどの超巨大権力者ですから、エベリン・ド・ロスチャイルドは、イギリスのチャールズ皇太子の胸を突くこともできます。「イギリス皇太

子の胸を突く」、そんなことはビル・ゲイツどころか、アメリカ大統領でも、日本の首相でもできないことです。

ロスチャイルド一族とイギリスとの歴史は古く、たとえば『スエズ運河の一件』があります。

かつての大航海時代、マルコ・ポーロたちは、ヨーロッパからアジアに行くためには、アフリカ最南端の喜望岬を迂回してから行かねばならず、とても大変でした。そのためにコロンブスは、地球は丸いということを信じて、ヨーロッパを西に進めばアジアに辿り着くと考えて、偶然にアメリカ大陸を発見したと言われております。

しかし、もしもヨーロッパの地中海と西アジアの紅海を結ぶ運河が建設することが出来れば、人や物の行き来がずいぶんと楽になります。ですから、かつてのヨーロッパ人にとって、アジアへの最短距離を可能とする、地中海と紅海を結ぶ運河の建設は、長年の夢でした。

そして1869年、当時のエジプト政府などによって、長さ168キロという世界最長のスエズ運河が、着工から10年の歳月をかけて完成しました。喜望峰回りの半分の距離で、ヨーロッパからインドに到達できるようになったのです。

しかしエジプト政府は、借金でクビが回らなくなってしまい、泣く泣く『スエズ運河株式会社』の株を売却することにしました。この時、フランスも『スエズ運河』の株が、喉から手が出るほど欲しかったのですが、しかし戦争に敗れて、借金で購入する余裕はあり



ませんでした。そしてそれはイギリスも同様でした。

この時、イギリスの『スエズ運河』株購入にあたり、400万ポンドの資金援助してあげたのが、ライオネル・ロスチャイルドでした。エジプト政府が泣く泣く手放し、フランスも、イギリスも欲しくても購入出来ない『スエズ運河』の株購入を、イギリスの肩代わりして支払ってあげた、それがロスチャイルド一族です。

「スエズ運河を買ってあげる」、チャールズ皇太子の胸を突く」、果てしてそんなことのできる人間が、この地球上に他に存在しているのでしょうか？ちなみにもう一枚の写真は、チャールズ皇太子が、ジェイコブ・ロスチャイルドにメダルを授与しているところです。では、ロスチャイルド一族の資産はいくらなのでしょう？彼らは資産を公表しておりませんが、50兆ドルとも、100兆ドルとも言われております。日本円にすれば500兆円、一京円ですから、この金額はベゾス500人分、ビル・ゲイツは1000人分に相当します。

実はこのロスチャイルド一族こそ、石油王として名高い「ロックフェラー一族」などをも遙かに上回る資産を持つ国際銀行家であり、彼らは大英帝国の繁栄の陰でも活躍してきました。しかも明治維新以来、実はこの一族は、日本とも馴染み深いのです。

たとえば「コカ・コーラ」という単語は、「オツケー」という言葉の次に、世界で認知されている言葉ですが、『コカ・コーラ・カンパニー』の株主もロスチャイルド一族です。ですから貴方がコカ・コーラを飲む時、知らぬ間にいくらかのお金を、ロスチャイルドにプレゼントしていることになりました。

あるいは世界のワインの五大シャトーのうち、「シャトー・ラフィット」と「シャトー・ムートン」は、ロスチャイルド家のもので

す。「シャトー」とは、ブドウ畑を所有者であり、ワインの生産者を指しており、フランス語で「城」を意味しております。ですからワイン好きならば、一度くらいはロスチャイルドの名を聞いたことがあるはずなのです。

しかしこの「地球」という惑星において、何よりも大問題なのは、それほどの絶大な権力を持つ一族の名が、歴史や経済学の授業にもあるいは主流メディアにも、まったく載らないことです。イギリス王室、日本の皇室に対して、批判的なメディアは存在していませんが、ロスチャイルド一族に対しては、批判どころか名前さえ取り上げないことに、人類は違和感を覚えるべきなのです。

「有名人に成りたい」、「権力に握りたい」と浅い考えを持つ者ならば、テレビや雑誌に出たがりですが、しかしロスチャイルド一族ほどの超権力者になると、まさにその逆です。

たとえばロスチャイルド家が建てた大邸宅に、「ワデスドン・マナー」というものがあります。この宮殿のような大邸宅は、ロスチャイルド家が数多く持つ邸宅の一つに過ぎず、ここに彼らが住んでいるわけではありません。そして真実は闇の中ですが、この宮殿の上空で、2017年11月18日、ヘリコプターとセスナ機が接触し、宮殿に墜落事故を起こしました。この事故は「ファクト」です。



しかしさらに問題なのは、この事故をどの新聞やテレビも報じなかったことです。テレビや教科書に、彼らの名が一度も乗らないところこそが、逆に彼らの力の大きさが分かるのではないのでしょうか？ 「コロナ騒動は演出されたものである」という驚愕の事実を知り、この「茶番劇」を終わらせるにあたり、何よりも大切なことは、「人

類がその存在さえ知らない絶大な権力者が、実はこの地球という惑星には存在している、そして彼らは思想的にとっても病んでいる」という真実を、まず知らねばなりません。

事実と事実から真実を探る

もしかしたら本書を読み進まれる方は、こう思われるかもしれませんが。「何か陰謀論や都市伝説のようだ」と。

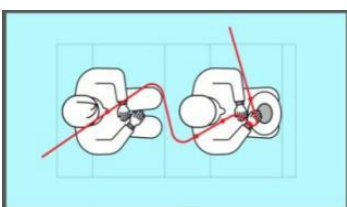
しかしどうして「陰からの謀はかりごと」が世界的には起こらない」と言い切れるでしょうか？

今、人類にとって必要なことは、すでに明らかになっている歴史的事実と事実を基に考えて、考えて、考え抜いて、さらなる「真実」を探り出していくことだと私は思います。なぜなら人類の大半が、未だに「ロスチャイルド」の名さえ知らないように、「世界の真実」というものは、未だこの惑星では闇の中にあるからです。

たとえば考えてもみてください。ケネディ大統領が暗殺されたことも、リンカーン大統領が暗殺されたことも、共に歴史的な事実です。これはまぎれもない「ファクト」です。しかしこの二人の大統領が、なぜ暗殺されたのか、その「真実」は未だに闇の中です。

そのために、「ケネディ大統領暗殺事件」について、実はアメリカ国民の大半が、政府が発表している公式見解に対して、強い疑いの思いを持ちました。なぜならケネディ大統領を撃つたとされる弾丸は、

「マジック・ブレット（魔法の銃弾）」と呼ばれ、政府の発表通りに弾道を描いてみると、弾道が曲が



つてしまうからです。普通に考えて、「マジック」ではなく、「政府の発表がおかしい」と疑問を持つものです。

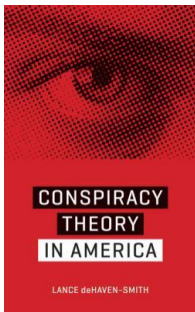
また、暗殺犯はオズワルドという人物と発表されていますが、しかし彼を犯人とするには不自然な点が多く、この情報を信用していないアメリカ人も数多くいました。しかもこの暗殺犯とされていたオズワルドは、逮捕から2日後に、ダラス警察署の中でジャック・ルビーという男に撃たれて殺されてしまいます。そのためにオズワルドが裁判に立って、ケネディ暗殺事件の真実が語られることはありませんでした。しかもオズワルドを殺したジャック・ルビーも、その後、獄死します。そのために事件は迷宮入りします。

実は「ケネディ大統領暗殺事件」から、わずか数年のうちに、事件の証人、事件と何らかの関わりがあった人たちが次々と自殺、事故、他殺によって16人も死んでいく、という前代未聞の出来事が起こりました。「ケネディ暗殺事件関係者が次々に死ぬ」、これもまぎれもなく「ファクト」です。

しかも事故によって亡くなった人たちは皆、誰も加害者のいない単独事故であるために、「本当は誰かに殺害されて、事故死に見せかけられているのでは？」という憶測まで飛び交いました。さすがにアメリカ国民も、「ケネディ大統領暗殺事件の裏には何かあるはずだ」と気づき始めたわけです。

するとどこからともなく「陰謀論」という言葉が流行り始めました。「陰謀論」

という言葉が、日常的に使われるようになったのは、実は「ケネディ大統領暗殺事件」からだっただけです。そしてこのことについて、アメリカの歴史学者ランス・デヘイヴンスミスという方は、201



3年に記した『Conspiracy Theory in America (アメリカの陰謀論)』という書物の中で、こう述べております。「米国人の多くは、陰謀論というレッテルが1967年に始められた中央情報局(CIA)のプロパガンダ計画によって侮蔑的な言葉として広められたと知ったら、ショックを受けるだろう。」と。

つまりこの『アメリカの陰謀論』という書物によれば、「陰謀論」という言葉が、アメリカの日常会話で自然に使われようになったのは、けっして偶然ではなく、CIAの工作活動によるものである、というわけです。そしてそのCIAの工作は、「ケネディ暗殺事件」に対して、人々が疑問を抱くことで行われたと、歴史学者ランス・デヘイヴンスミスは述べているわけです。

そしてこれを踏まえて考えなければならないこととして、ケネディ大統領とリンカーン大統領は暗殺されましたが、この二人は共にあることを行っていました。それは「政府紙幣を発行する」ということです。後に詳しく説明いたしますが、「二人の大統領は共に政府紙幣を発行した」、これも歴史的な事実、まぎれもなく「ファクト」です。

実は「世界の基軸通貨」とまで言われるドルを発行している『FRB』という中央銀行は、アメリカ政府の持ち物ではありません。『FRB』は、100パーセント民間の中央銀行であり、つまり株式会社なわけです。これもまぎれもない「ファクト」です。そしてこの民間銀行を経営しているのは、国際銀行家たちであり、ロスチャイルド一族でもあり、やはりこれも「正真正銘のファクト」なのです。

そしてさかのぼること1833年、アンドリュー・ジャクソン第7代米大統領は、国際銀行家たちが奪わんとしていた「通貨の発行

権」を守り抜き、当時の中央銀行『第二合衆国銀行』を閉鎖しました。するとアメリカ史上、最初の大統領暗殺未遂事件が起こります。ジャクソン大統領は、死の直前も、自身の大統領としての功績を尋ねられて、「通貨発行権を守ったこと」と述べています。

そしてジャクソン大統領が中央銀行を閉鎖したこと、その後、彼がアメリカ初の暗殺未遂に遭っていること、さらには自身の功績を「通貨発行権を守ったこと」と述べていたこと、これらもやはり「フアクト」です。

ケネディやリンカーンの暗殺の理由、もしくはアンドリュー・ジャクソンの暗殺未遂の理由は、未だに人類にとって不明ですが、しかしこうした幾つもの事実から、暗殺理由を推理することならば可能です。「銀行が絡んでいるのでは？」と。

何ら確証の無い陰謀論に振り回されることは、もちろん愚かなこととです。しかし一つのある事実と別の事実、そしてさらなる事実を結び付けて、そこから考えて、考えて、考え抜いて「真実」を探ろうとしないことも、私は愚かなことだと思います。

なぜならすでに述べましたように、未だに人類の大半が、「ロスチャイルド」の名も、『FRB』が100パーセント民間銀行であることも知らないように、「世界の真実」は未だ闇の中にあるからです。

闇を的確に見抜いて、その闇に対して正義のペンで戦わずして、どうして世に光をもたらすことができるでしょうか？

陰謀は現実存在している

断言しますが、陰謀は存在しています。

たとえば自称ユダヤ人の中で、初めてイギリス首相になった人物に、ベンジャミン・ Дизレーリという方がいました。その彼は次のように述べたそうです。「世界は舞台裏を知らない人には、想像もつかない人々によって支配されている」と。

この言葉は、イギリスの元首相が語ったとされている世界的にも有名な言葉ですが、しかし残念ながらこの言葉は、彼がいつ、どこで、誰に対して語ったのか、それは定かではありません。もしかしたらすでに「定か」になっているのかもしれませんが、しかし残念ながら、少なくとも私は、 Дизレーリがこの言葉を、いつ、どこかで、誰に語ったのか知りません。ですから Дизレーリのこの言葉は、「フアクト」とは言えません。

しかし Дизレーリが、この言葉を語ったと思える「エピソード」ならば、ご紹介することができます。

1875年11月14日の夕方、 Дизレーリは、ロスチャイルドの屋敷で、ライオネル・ロスチャイルドと夕食をしていました。その夕食の席に、召使が一通の電報を持ってやって来ました。

その電報の内容は、「エジプトが『スエズ運河』の株を売り出そうとしている」、という極秘情報でした。国際政治の極秘情報が、イギリスの首相より先に、ロスチャイルドのもとに届く、これだけでも、普通の常識からすれば驚きです。

ロスチャイルド邸にて、その極秘情報を知った Дизレーリ首相は、「よし、買おう」と言ったそうです。そして Дизレーリは、『スエズ運河』株を買収する費用の全額を、ロスチャイルドから借金することを決めました。

そして彼は翌日、イギリス政府閣僚たちと話し合い、『スエズ運河』株の購入について合意すると、すぐさま馬車をロスチャイルド

家に走らせました。

ライオネル・ロスチャイルドは、ディズレーリから「イギリス政府は明日までに400万ポンドを必要としております。よろしくお願いいたします」という伝言を聞くと、「よろしい、ご用立てしましょう」と、簡単に答えたといひます。彼らには、お金を発行する権利があるので、それほど問題ではないのでしょうか。

こうした『スエズ運河』購入の「エピソード」を見ると、ディズレーリが言ったとされる「世界は舞台裏を知らない人には、想像もつかない人々によって支配されている」という言葉が、とても真実性を帯びてきます。なぜなら確かにロスチャイルドは、イギリスよりも、フランスよりも、誰が『スエズ運河』を買うかということの決定権を持っているようにも思えるからです。

しかもこのディズレーリの言葉は、表現を変えれば、「一般人が知らない者たちが、実は裏から世界を支配している」という意味にも取れます。

そしてドルを発行している『FRB』が、100パーセント民間の銀行であること、そしてこの銀行を営んでいるのが国際銀行家であること、そしてその中心は経営者である「ロスチャイルド一族」の名さえ、世界中の人々が知らないこと、国際銀行家と対立した大統領が、これまで幾人も暗殺、暗殺未遂に遭っていることを考えると、このディズレーリが語ったとされる言葉が、恐ろしいほど真実に感じます。

そして、このディズレーリの言葉が、もし仮に真実であるならば、フランクリン・ルーズベルト元アメリカ大統領が語ったとされる言葉も、真実に感じはじめます。ルーズベルトは、こう述べたと書われています。

「世界的な事件は偶然に起こることは決してない。

そうなるように前もって仕組まれていたと、私は、あなたに賭けてもよい」

残念ながらこの言葉も、ルーズベルト大統領が、いつ、どこで、誰に對して語られたのか、それは定かではありません。ですからこの言葉も、ディズレーリの言葉と同様に、やはり「ファクト」とは言い切れません。

しかし実際に国際銀行家について考えてみると、彼らが世界を裏から動かしていることは事実です。そして彼らならば、世界的事件を仕組んで起こすことも可能です。そして次の章で詳しく説明いたしますが、実は彼らは思想的に相当、病んでいるのです。

そうしたことを考えると、このルーズベルトが語ったとされるこの言葉も、かなり真実性が増してきます。

そしてルーズベルトのこの言葉は、表現を変えれば、「世界的な大事件は陰で仕組まれている」という意味にも取れます。あるいは「陰からのはかりごと謀はかりごとは空想や絵空事ではない。世界的な陰謀は現実である」という表現にも置き換えられるでしょう。

そしてこのルーズベルトが述べたとされている言葉を、現在の「コロナ騒動」に置き換えて表現するならば、「コロナ騒動は演出された茶番である」と、そう表現することもできるのではないのでしょうか？

さあ、築き上げられた偽りの常識を覆し、真実に気がつく時がやってきました。 「コロナ騒動は茶番である」、それを論理的に、科学的に説明してご覧にいきましょう。

そして貴方がその真実に気がついていく時、「コロナ騒動」は終わりに向かい、世界は救われていくのです。

共に闇を見抜き、闇と戦い、闇に打ち勝ち、常識を逆転させて、世界に光をもたらしましょう。

一般社団法人『武士道』代表 与国秀行

編集・校正 草莽志士

第一章 誰が？

日本にもお金を貸す国際銀行家

「コロナ茶番劇」に気がつくためには、まず「誰がそんなことを？」ということを知る必要があります。そして本書のルールとして、私
が本書の中で「彼ら」と呼ぶ時には、この「コロナ茶番劇を演出している犯人」を意味しております。そして彼ら犯人を知るためには、「ロスチャイルド一族」について、もう少し詳しく知る必要があります。

実は日本も『日露戦争』の時に、このロスチャイルド一族から、多額なお金を借りた過去があります。「日露戦争」の頃、日本も、ロシアも、互いに戦争の費用に苦しんでいました。そこで当時の『日本銀行』の副総裁であった高橋是清は、日本国債をジェイコブ・シフというユダヤ人を自称している国際銀行家に引き受けてもらいました。このジェイコブ・シフという人物は、バロン・エトワール・ロスチャイルドの盟友です。一方でロスチャイルドは、ロシアにお金を貸しました。争っている両者にお金を貸すことで、戦争の勝敗

に関係なく第三者として利益を出す、それが彼らのやり方です。「戦争を最大の利益に変える」、まず彼らのこの手口を知らねばなりません。

日本は1904年から1906年にかけて、平均6.6%という高い利子で、合計6度の外債発行を行い、総額1万3千ポンドをジェイコブ・シフから借りました。これは国家予算の数倍に相当する金額です。ちなみに日本の21世紀に入ってから長期国債の金利は、わずか0.1%程度ですから、この「6.6%」という数字が、いかに高いか分かるはずで

す。日本は日露戦争に勝利しました。その後、津島壽一しゅいち財務官が、借りたお金の返済の件で、ロスチャイルド家に交渉に行く際、後に総理大臣となる、若かりし頃の福田赳夫氏が同行していました。最初は和やかに食事を取り、交渉をしていきましたが、話が「金利の話」になりました。「ロスチャイルド側に有利な戦前の金利」か、それとも「日本側に有利な戦後の金利」か、ということと交渉は平行線になりました。戦争によってインフレになり、お金の価値が変わっていたからです。

福田氏は、この出来事を『日本経済新聞』に語りました。そして当時のその載記事は、『私の履歴書』という書籍にまとめられました。この書籍の132ページにはこう書かれてあります。

津島財務官のお供をして、パリのシャンゼリゼ通りからちよつと横に入ったところにある邸宅に入っていた。高橋さんの親書を見せると「まだご健在か」と懐かしがって歓待してくれた。ところが食事を終えて用談に入った途端、ロスチャイルド氏の形相が一変した。「額面金額での返済というのは、われわれの希望にこたえるものではない」というわけで、何度かやりとりが続いた。しばらくす

ると、彼は机の上に置いてあるタイプライターのようなものに手を触れた。何か日本政府あての返事でも打つのかと思っていたところ、突然部屋の四方の壁がスーッと開き、こん棒を握りしめたプロレスラーのような男たちがどかどか入ってきて、われわれの後に立った。ロスチャイルド氏は「私は高橋さんに不満を持っているから、そのことを間違いなく伝えてもらいたい」といって、その場は決着したが、さすがに男たちが入ってきたときは驚いた。再びこの部屋を出ることが出来るかなとも思ったぐらいだ。

同様のことは、福田赳夫氏の著書『回顧九十年』にもあります。

初めは、高橋さんの親書を見せると「まだご健在か」と懐かしがって、下にも置かぬ大歓待だ。ところが、食事を終えたあと本題に入り、「額面で返済する。これが最終回答である」という高橋蔵相の指令を伝えた瞬間、ロスチャイルド氏は顔色を変えた。ロスチャイルド氏は猛烈な勢いで反論する。私はこの部屋から生きて帰れるのかな、とも思ったぐらいだ。

こうして日本はロスチャイルドとの交渉に敗れました。そのためこの借金が完済したのは、なんと82年も経過した1986年のことです。実はこの借金が、第二次世界大戦、そして敗戦に多大な影響を及ぼしました。

日本政府や日銀、FRBは株式会社

「コロナ茶番劇」について知るためには、「事実は小説より奇なり」という現実を受け入れる必要があります。たとえば「Graffer」というサイトがあります。このサイトでは「法人情報」を

検索することができます。

このサイトに、『日本銀行』と打ちこんで検索すると、『日銀』の会社法人番号や所在地などを教えてくれます。このことから円を発行している『日銀』が、普通の株式会社であることが分かります。実は円を刷っている『日本銀行』も、ドルを刷っている『FRB』も、ユーロを刷っている『ECB（欧州中央銀行）』も、これらの中央銀行というのはすべて民間の株式会社です。『日銀』は特殊法人（認可法人）という体裁を取っておりますが、しかし株式市場『ジャスダック』にコード銘柄「8301」で上場している会社であり、株主が誰でもあるのかを明らかにしていません。『日銀』の門には、ロスチャイルド家の家紋にも似た模様があることから、おそらくは『日銀』の株主には、ロスチャイルドが名を連ねていることでしょう。

では次に、この「Graffer」というサイトに会社法人番号として、「000012010019」と半角で打ちこんで、クリックしてみると、なんと「商号 内閣府」と出てきます。「商号」とは会社の名称のことです。

そして次に、「米国証券取引委員会(U.S. Securities and Exchange Commission)」と検索してみます。たとえ英語がまったく出来ずとも、このサイトに行くと、誰でもすぐにリサーチする箇所が見つかりますので、そこに「JAPAN」と打ちこんでみます。

すると「米国証券取引委員会」に登録されている、「JAPAN」と名が付く会社がたくさん出てきます。しかしそれらの会社の中に、何ともシンプルな名前の会社があります。まさに会社名「JA



PAN」です。

CIKナンバー (Central Index Key) というものがあり、これは「米国証券取引委員会」から個々の会社に与えられている番号のことですが、その「JAPAN」という会社のCIKナンバーは「000837056」です。

そしてこの「JAPAN」というシンプルな名前の会社をクリックしてみると、2003年から現在只今も、この会社が「米国証券取引委員会」に登録されている会社であることが分かります。この会社の内容として、「FOREIGN GOVERNMENTS」と書かれており、これは「外国政府」を意味しています。つまり日本の政府は2003年から現在も、株式会社であったわけです。

会社とは公の利益のために存在するものではなく、一部の誰かの利益のために存在しているものです。どうやら日本政府は、会社になつていたようです。どうりで日本において、生きづらい時代が続いているわけです。円を発行している『日本銀行』は明治維新後に設立された時から、そして日本政府は2003年から株式会社であったわけです。

では、『日銀』や『FRB』や『ECB』といった中央銀行の上に君臨して、世界中のお金の蛇口を握っているのが誰かと言えば、スイスのバーゼルにある『BIS (国際決済銀行)』です。では、この『BIS』も、ホームページで調べて、国際電話をかけてみれば分かりますが、スイス政府や国連などともまったく関係のない巨大な株式会社であり、これを経営しているのも、やはりロスチャイルド家なわけです。

ちなみに『日銀』が設立されたのは明治維新の頃ですが、『日銀』が『BIS』の傘下に入れられて、日本が金融侵略されていく

のは、先の米国との敗戦、そして80年代、のバブルと90年代のバブル崩壊後のことです。

数円、もしくは数セントの紙キレを、一万円札や100ドル札に変えることのできる力、それが「通貨発行権」なのですが、なんとその「絶大な権力」が、実は日本政府や米政府にはないわけです。そして『日銀』など中央銀行の上に、「中央銀行の中央銀行」として『BIS』が君臨しており、この国際銀行こそが世界の通貨の量をコントロールしていたわけです。

そして教科書やテレビでは、その名が絶対に語られることのないロスチャイルド一族こそが、この世界銀行を営んでいるわけです。1790年、マイヤー・アムシェル・ロスチャイルドはこう言ったそうです。「私に一国の通貨の『発行権』と『管理権』を与えよ。そうすれば誰が法律を作ろうと、そんなことはどうでも良い」と。ちなみに地球のダイヤモンドの9割を独占支配している『デ・ビアス』もロスチャイルド一族のものでありますから、現在、この地球上のダイヤモンドは、ロスチャイルド一族が独占しているわけです。あるいは『リオ・ティント』というウランと金をほぼ独占している企業も、やはりロスチャイルド一族のもので、ウランは原子力発電所の燃料です。また世界第二位の石油会社大手の『ロイヤル・ダッチ・シェル』もロスチャイルド一族のものであります。うした世界の裏側、闇を見ていかなないと、演出されている「コロナの茶番劇」は見えてこないのです。

ユダヤを見なければ真実は見えぬ

では、彼ら国際銀行家の思想、哲学は一体いかなるものなのでしょう

ようか？「通貨発行権」を持つことで、絶大な権力を握っている彼らが、「人々の幸せ」を考え、「人種の繁栄」を望んでいるならば、何も問題はありませんが、では、彼らは何者で、彼らの思想は一体どんなものなのでしょうか？

「ロスチャイルド」と検索して、『ウィキペディア』を調べてみると、「18世紀後半にフランクフルトのゲットー（ユダヤ人隔離居住区）出身のマイアー・アムシェル・ロートシルトが銀行家として成功し宮廷ユダヤ人となった」とあります。たしかにシェイクスピアの『ヴェニスの商人』にもありますように、キリスト教徒たちから迫害を受けてきた一部のユダヤ教徒たちは、「金貸し」という金融業で生計を立てる者が多くおり、そして王様に取り入り、貴族になり、政治家になる者もいた、と言われております。

『ヴェニスの商人』では、ユダヤ人シャイロックが、キリスト教徒のアントーニオにお金を貸し、もしも返済できなければ、肉1ポンドを差し出さねばならない約束をします。しかしお宝を積んだ船が遭難して、アントーニオは無一文となり、証文どおりに彼は、シャイロックに肉1ポンドを差し出さなければなりません。周囲のキリスト教徒たちが、寄つてたかつてシャイロックに慈悲を説き、愚かな行為をしようとするのを止めますが、しかしシャイロックは、自分を迫害し続けてきたキリスト教徒を憎み、クリスチャンのアントーニオに「約束どおりに肉を切り取らせろ」と言います。しかし彼ら国際銀行家はユダヤ人ではありません。

なぜならユダヤ教徒の『聖書』には、「借りる者は貸す者の奴隷となる」とあり、正当なるユダヤ教徒は、実は金貸しという「銀行業」そのものを禁止しているからです。

ですからユダヤ人は加害者ではなく、あくまでも被害者です。し

かしこの「コロナ騒ぎ」の犯人が、「ユダヤ人」とまったく無関係であるかと言えば、そうでもありません。

たとえば『タイムズ紙』が、まだ今のような「フェイクニュース」を行っていない頃、編集長を務めていた人物に、ヘンリー・ウィットカム・ステイードという方がいましたが、その彼がジャーナリストとして、こう述べていたそうです。「学者も、政治家も、エコノミストも、ユダヤ問題を通過せぬ限り、ひとかどのものとはいえない」と。

今、世界には約1500万人のユダヤ人がいます。これは世界人口約77億人のうち、わずか0.2%でしかありません。1%にも満たないわずかなこの数字は、統計学的に考えれば数字としては扱われません。しかしたつたわずか0.2%しかないユダヤ人たちが、ノーベル賞の受賞率では約20%、数学のフィールズ賞では約30%、チェスの世界チャンピオンでは約50%と、脅威的な数字を見せます。彼らユダヤ人は、経済学ではマルクス、精神医学ではフロイト、映画ハリウッドではスピルバーグ、物理学ではアインシュタイン、ネットでは『Google』のラリー・ページや『Facebook』のマーク・ザッカーバーグなど、実に様々な分野において活躍しております。

あるいはビジネスの世界では、『シティ・バンク』、『J・Pモルガン・チェース銀行』、『クレディ・スイス銀行』、『ロスチャイルド銀行』、証券会社の『ゴールドマン・サックス』、『モルガン・スタンレー』、『メリルリンチ』、保険業界の『プルデンシャル生命保険』、『GMキャピタル』、『ロイズ保険』、マスコミ業界では、『ニューヨークタイムズ』、『ワシントンポスト』、『CBSテレビ』、『NBCテレビ』、『ロイター』、『ウォール・ス

トリート・ジャーナル』、その他にも石油の『エクソンモービル』、『ロイヤル・ダッチ・シェル』、食品の『ネスレ』、電機の『フィリップス』、情報通信の『IBM』、航空機メーカーの『ボーイング』とこれらの世界的企業はどれもユダヤ系です。

ちなみにキリスト教のイエスも、あるいはキリスト教の初期の頃に集まってきたイエスの弟子たちも皆、ユダヤ人でした。

これを考えても、「わずか0.2%しかないユダヤ人であつても、けつして無視することができない」という意味がご理解いただけるはずです。

ですからユダヤ人は、あくまでも加害者ではなく被害者ですが、しかし「ユダヤ」を考えずして、アメリカも、世界も、そしてコ罗纳の茶番劇も何も見えてはこないのです。

仮面を剥がされたタルムード

では、「ユダヤ人」とは、誰のことを指しているのでしょうか？これが何とも複雑なのです。ユダヤ人とは、「ユダヤ教を信じる者か、あるいはユダヤ人を親に持つ者」とされています。

つまりユダヤ人の定義には二つあるわけです。一つは宗教的な意味でのユダヤ人であり、ユダヤ教を信仰している人たちです。もう一つは民族的な意味でのユダヤ人であり、親をユダヤ人に持つ人たちです。

しかしロスチャイルドなどのような者たちは、宗教的にも、民族的にもユダヤ人ではないのです。

ユダヤ教というのは、今から約三千二百年前に、モーセという方

が、エジプトで奴隷にされていたユダヤ人を解放して、そして放浪の旅の中で説かれた教えのことです。長い放浪の旅の後、ユダヤ人たちは現在のイスラエルに辿り着きました。

そしてユダヤ教徒の中からイエスが現れて、キリスト教を説きました。

ですからキリスト教徒は、自分たちの教えを『新約』と呼び、ユダヤ教のことを『旧約』と呼ぶのです。この「約」というのは、「神との契約」という意味です。

そしてこのユダヤ教、キリスト教の流れを受けて、イスラム教という宗教が興ります。そのためにこの三つの宗教は「兄弟宗教」と呼ばれているわけです。

しかし紀元前6世紀頃、新バビロニア王国のネブカドネザル2世によつて、ユダヤ人たちは捕えられて、バビロニアの首都バビロンへと連れ去られてしまいました。実はこの時より、一部のユダヤ人たちは、正統なユダヤ教の教えを捨てて、代わりにバビロニアの宗教、思想、商法を獲得しました。

そして彼らは、そのバビロニアの思想を口伝で受け継ぎ、約千年後の5世紀末に、その口伝の教えを、18冊の書物として完成させました。それが『バビロニア・タルムード』です。そしてこの彼らの独自の教えが、はつきり言つて何とも悪魔的なのです。

それを証明する人物がマルチン・ルターという方です。16世紀になると、キリスト教の宗教改革者のマルチン・ルターという方が現れて、彼はキリスト教カトリック教会と対決して、「プロテスタント」という宗派を作りました。

ルターはそのカトリックとの戦いの中で、『新約聖書』をドイツ語に翻訳しようと、ヘブライ語を勉強し直しました。その際、彼は

『タルムード』を紐解いてみました。するとルターは絶句したので、なぜなら正統なユダヤの教えでは、「偽つてはならない、盗んではならない、殺してはならない」と教えられているというのに、『タルムード』には、次のように記されていたからです。

我々は『タルムード』が、モーゼの律法書に対して絶対的優越性を有することを認むるものなり。『タルムード』の決定は、生ける神の言葉である。

『汝殺すなかれ』との掟は、『イスラエル人を殺すなかれ』、との意なり。ゴイ（非ユダヤ人）、ノアの子等、異教徒はイスラエル人にあらず。ゴイが、ゴイもしくはユダヤ人を殺した場合は責めを負わねばならぬが、ユダヤ人がゴイを殺すも責めは負わず。

つまりユダヤ教という宗教は、モーゼから始まったというのに、そのモーゼの教えの上に、『タルムード』というまったく別の、しかも悪意が込められたバビロニアの教えを置いてしまった者たちがいたわけです。そのために『タルムード』は『バビロニア・タルムード』と呼ばれております。

このように一部のユダヤ人たちは、ユダヤ教を捨てて、正統なユダヤ人ではなくなってしまうわけです。

そして実は彼らは民族的にも、ユダヤ人でなかったのです。7世紀から10世紀にかけて、ロシアのウクライナあたりで栄えた遊牧国家に「ハザール」という国がありました。

この「ハザール」に8世紀半ば、イスラム軍が侵攻してきて、イスラム教への改宗を迫りました。しかし「ハザール」の隣はキリスト教の大国、東ローマ帝国がありました。

イスラム教に改宗すればキリスト教国家と対立することとなり、キリスト教に改宗すればイスラム教国家と対立することとなり、悩

んだ末に「ハザール」は、キリスト教とイスラム教の元になっていたユダヤ教を国教としました。

それ以降、国民全員がユダヤ教徒になりました。こうして「ユダヤ教を信じる」ということで、白人種系ユダヤ人「アシケナージ」が誕生しました。このことについては、アシケナージ・ユダヤ人のアーサー・ケストラーやシロモー・サンドが書かれた『ユダヤ人とは誰か』や『ユダヤ人の起源』に詳しく記されております。

しかしすでに述べたように民族的な意味におけるユダヤ人は、モーゼと共にエジプトを果たしてきた民であり、こちらのユダヤ人たちは有色人種です。イスラエルという国がある地域は、西アジアに位置しており、その土地に住む人々というのは、褐色がかった肌をした有色人種なのです。

民族的な意味における、こちらのユダヤ人のことを「スファラディ」と言います。しかしロスチャイルドも、マーク・ザッカーバーグも、アインシュタインも、アンネ・フランクも、スピルバーグも、デーブ・スペクターも、カール・マルクスも、皆が皆、有名な白人であり、つまり「アシケナージ」です。

そして「アシケナージ」は、民族的にはユダヤ人ではないために、もしもこの「アシケナージ」の人々が、モーゼの教えを捨てて、『タルムード』を取るならば、彼らは民族的にも、宗教的にもユダヤ人ではなくなるわけです。

だからユダヤ人は加害者ではなく、被害者なのです。

そしてこの『タルムード』には、「ユダヤ人のみが人間であり、ユダヤ人以外はゴイであり、ゴイには偽るべきであり、盗むべきであり、殺すべきである」と、「積極的に悪を成せ」という驚くべきことが書かれていました。「ゴイ」とは「家畜」という意味です。

複数形になると「ゴイム」と言います。

300冊以上の小冊子を書いたドイツの英雄マルチン・ルターですが、彼は人生最後の小冊子、『ユダヤ人と彼らの嘘』を書くことで、彼は『タルムード』の「悪魔性」を暴きました。

しかし誤解を招かないように何度も述べますが、ユダヤ人は被害者です。なぜならユダヤ人を自称する者たちが、ユダヤ教徒の素振りをして、ユダヤ教徒を利用して、ユダヤ人に罪をなすりつけて来たからです。こうしたことを踏まえて、ルター人生最後の小冊子の一文を、ここでご紹介いたします。



「私はもうこれ以上、ユダヤ人のことも、ユダヤ人に反対することも書かないと決心していました。」

しかしこの哀れで邪悪な連中が、いつまでも我々キリスト教徒に打ち勝とうとすることを止めないので、ユダヤ人の企てによってもたらされる被害に備えて、私もユダヤ人に抗議する人々の隊列に加わることを決意しました。ゆえに私はこの小冊子の出版を認め、そしてキリスト教徒たちにユダヤ人に対する防備を固めるよう警告いたします。く中略く

『少々、私は言いすぎではないか』と思う人がいるかもしれませんが、しかし言いすぎどころか、私はあまりにもわずかしか言っていないのです。というのは、彼らがいかに我々ゴイム（家畜たち）を、彼らの著作のなかで蔑み呪い、そして自分たちの学校や礼拝の場で、我々に災いが降りかかることをどれほど望んでいるか、私はよく理解しているからです。彼らは、高利貸しによって我々の金をかすめ盗り、可能な場所ではどこでも、我々をあらゆる種類の策略にかけるのです。」

戦いのルターは、彼ら国際銀行家が、いかに高利貸しによって我々から盗み、あらゆる策略にかけているかを警告しております。それではここで、非ユダヤ人を家畜と考える『タルムード』の一部を、抜粋してみたいと思います。

「ユダヤ王は真の世界の法王、世界にまたがる教会の総大司教となる。

世界はただイスラエル人の為のみに創造されたるなり、流神者（非ユダヤ人）の血を流す者は神に生け贄を捧ぐるに等しきなり。すべての民を喰い尽くし、すべての民より掠奪することは、彼らすべてが我らの権力下に置かれる時に始まるべし。」

まさに驚きの内容であり、ユダヤ人を自称する者たちの思想的な間違いがよく分かります。マルチン・ルターは、『ユダヤ人と彼らの嘘』の中で、次のように述べています。

「もし彼ら（ユダヤ人）が我々全員を殺戮する事ができるなら、彼らは喜んでそうするでしょう。」

事実、彼らの多く、特に外科医と医者であるとか称している者達は、キリスト教徒を殺害しているのです。彼らは一時間、あるいは1カ月で死をもたらす毒を人々に与え、どのように薬を扱ったらよいのか熟達しているのです」

ユダヤを自称する者たちと、彼らの悪魔がかつた家畜思想である『タルムード』、この謎を紐解かない限り、コロナ騒動の謎も解けません。なぜなら「コロナは茶番だ」といくら声高に叫んだところで、「誰が？何の目的のために？」という感想にしかならないからです。『タルムード』を説明しない限り、「そんな悪いことをする人が、世の中に存在しているわけがない。たとえそんな悪い人がい

たとしたら断罪されているはずだ」、そういった感想にしかならぬのです。

そしてこの地球において何よりも問題なのは、この『タルムード』の思想を持つ者たちが、巨大な権力を持つているために、この『タルムード』について、世界中のどの一流大学でも教えられていないことです。『タルムード』には、こうも記されております。

「ゴイが我らの書物には、『何かゴイを害することが書いてあるのではないか?』と聞いてきたら、偽りの誓いを立てなければならぬ。そして『そのようなことは誓って書いてない』と言わなければならない。

タルムードを学ぶゴイ、それを助けるユダヤ人はことごとく生かしておいてはならない」と。

「マラーノ」と「ポグロム」

今から二千年前、ローマ帝国圧政の中、ユダヤ人たちの中からイエスが生まれます。そしてイエスは愛の教えを説いて、キリスト教を興しました。ユダヤ人だけの宗教を、万人のものにしようとするわけです。キリスト教はユダヤ教から生まれたわけです。

しかしそのイエスをユダヤ人たちは、十字架にかけて殺してしまっています。

そしてイエスから愛を学んだキリスト教徒たちでしたが、まるでイエスが十字架にかけられたことを復讐するがごとく、キリスト教徒たちは、ユダヤ教徒たちに迫害を加えて、強制的にキリスト教に改宗させたりしてきました。

キリスト教に改宗した素振りを見せつつも、しかしその実、ユダ

ヤ教を信仰し続けるユダヤ教徒もおりました。そうした「隠れユダヤ教徒」は「マラーノ」と呼ばれました。「マラーノ」とは「豚」という意味です。

「マラーノ」なのか、それとも本当にキリスト教に改宗したのか、それを見極めるために、キリスト教徒たちは豚の生ハムを食べさせたりもしました。なぜならユダヤ教徒は、豚肉を食べないからです。

こうしてユダヤ教徒は、キリスト教徒からずっと迫害を受けてきたわけです。つまり『タルムード』を信じる偽ユダヤが、イエスのことを娼婦の子と蔑み、自分たち以外の人間を「ゴイ・家畜」と見下す一方で、キリスト教徒も、ユダヤ教徒を強制的に改宗させたり、あるいは激しい迫害を続けて、しかも隠れユダヤ教徒に対しては「マラーノ・豚」と蔑んできたわけです。

しかし何度も何度も言いますが、ユダヤ人は加害者ではなく被害者であり、あくまでも問題は、「ユダヤ人を自称する者たち」なのです。ただし迫害の悲しき歴史が、『タルムード』を生み出してきた可能性については、私たち人類は考えるべきでしょう。

シェイクスピアの『ヴェニス商人』の中で、金貸しユダヤ人として描かれるシャイロックが、有名なセリフを述べます。

「ユダヤ人には目がないか? 手がないのか? 内臓や体つき、感覚、感情、情熱、食べ物が違うか? 刃物で傷つかないか? 同じ病気にかからず、同じ薬で治らないか? 同じ季節の暑さ寒さがキリスト教徒と違うか? 針で刺しても血が出ないか?

くすぐっても笑わないか? 毒を盛っても死なないか? 迫害されても復讐しないのか? それだってあんたたちと同じだ。ユダヤ人に迫害されたらどうする? 復讐か? 我々だって迫害されたら同じことさ。キリスト教徒を見習い復讐する。お前たちの仕打ちを真似し

てやる。どれだけ苦労をしてもお手本より上手にやるぞ」

それまで慈悲をシャイロックに説いて、愚かな行為を止めるように説得してきたキリスト教徒たちは、シャイロックのこの言葉を聞いて何も言い返せません。

まぎれもなく迫害と復讐が連鎖しているわけです。

そして彼らはユダヤ人でありませんが、ユダヤ人を自称してために、ユダヤ人の迫害の歴史を認識しておくことも重要です。なぜならユダヤ人迫害の歴史が、私たちを「家畜」と見なす『タルムード』を生みだし、「自称ユダヤ人」である彼らを築き上げた可能性は捨て切れないからです。

「ボグロム」というロシア語があります。これは「破壊する、暴力的に破壊する」というネガティブな意味を持っています。

そしてこの言葉は、ロシア帝国の中で、一般の市民がユダヤ人に対して行う暴力的な攻撃を意味しています。つまりナチスが行った「ホロコースト」のように、政府が国家的に行う「ユダヤ人虐殺」ではなく、生活に困窮した一般市民が、その不満の矛先をユダヤ人に向けて行う、殺害、掠奪、強姦といった破壊的暴力行為、それが「ボグロム」なわけです。

実はこの「ボグロム」は、19世紀前半から20世紀の前半まで、つまりロシア革命が起ころ頃まで、ロシア国内では頻繁に起こり、一度の「ボグロム」で何千人というユダヤ人が殺害されてきました。しかも「ボグロム」の実行者は、政府や警察に奨励されることさえあったのです。

「コロナ騒動」は彼らによって演出されているものですが、もしかしたらこの騒動は、迫害を受けてきた者たちの復讐心が元になっているのかもしれない。

誰がホロコーストを支援したのか

初代マイヤー・アムシエル・ロスチャイルドが、普通の正統なユダヤ教徒であつたら、何の問題もなかったのですが、しかし何とも厄介なことに、マイヤー・アムシエル・ロスチャイルドは、『タルムード』の教えを忠実に守った人物でした。

彼は、どれほどの富や名声を得ても、ライフ・スタイルをまったく変えなかったそうです。小成功を人に見せびらかしたりすることなく、あくまでも秘密主義に徹することこそが、真なる大成功・目的達成には必要不可欠だと考えていました。そのために彼は、息子たちにもそうあるべきだと説いていたそうです。ですから息子たちも、たとえ超大富豪に成ろうとも、多くの場合、衣類は擦り切れるまで着古したそうです。

そして『タルムード』の教えにもあるように、彼は常に「自分たちは選ばれた民である」という信念を持ち続け、機会があるたびに、彼はこの信念を堂々と人々に披露したそうです。そしてマイヤー・アムシエル・ロスチャイルドは、臨終のベッドで、『タルムード』を読み、息子たちに対して、常に結束して事に当たり、決して独断的な行動を行わずに目的を達成させるよう、厳かな誓いを強いたと言われています。

しかしすでに述べたように『タルムード』は、「世界はただイスラエル人の為のみ創造されたるなり、流神者（非ユダヤ人）の血を流す者は神に生け贄を捧ぐるに等しきなり」などという家畜思想で貫かれています。

そして「ユダヤ人」ということを考えると、長きにわたる迫害の歴史、そしてその迫害の歴史の中でも、ナチス・ドイツが行った「ホロコースト」を思い出す人は多いことでしょう。では、「ホロコー

スト」とは、いかなる意味があるのでしょうか？実は「神に捧げる焼かれた生け贄」という意味です。

さて、「生け贄」という恐ろしい言葉が出てきました。しかし実は、この「ホロコースト」という言葉は、『聖書』の言葉であり、正統なユダヤ教徒の言葉でもあるのです。

『旧約聖書』の『創世記』には、次のような話があります。ユダヤ人の祖とされるアブラハムには、なかなか子どもが生まれず、不妊症で苦しんでいた妻サラと、その間に老いてから授かった愛する一人息子イサクがいました。しかし神は、アブラハムに息子を生け贄に捧げるように命じます。アブラハムはその試練を素直に受け入れて、息子イサクを神への生け贄に捧げようとしていました。するとギリギリのところ、天使がアブラハムを止めに入りました。この話は「イサクの燔祭」として世界的にも有名な話です。



この「燔祭」という聞き慣れない言葉を英語に訳すと、なんと「ホロコースト」となるのです。なぜナチスのユダヤ人迫害を「ホロコースト・燔祭」と呼ぶのか、謎は深まるばかりですが、さらにナチス・ドイツには多くの謎があります。

まず、ただの弱小集団でしかなかった「ナチ」という政党が、あつという間にドイツの政権を奪取したわけですが、果たしてその資金は、どこの誰から出たのでしょうか？また当時のドイツは、第一次世界大戦に破れ、巨額の賠償責任を負わされ、経済破綻していたにもかかわらず、なぜ政権を取ったナチスは、強力な軍事国家を築き上げることができたのでしょうか？

実のところ、『ユダヤ財閥がヒトラーを育てた』という書物もある

るくらいで、「ユダヤ人へのホロコースト」を行つたナチス・ドイツに対して、ユダヤ人を自称しているロスチャイルド、もしくはウォーバーグ財閥が資金援助していた、という話は消えませんが、

そしてあまり知られてはいないことですが、2003年の10月に、とんでもない内容のアメリカ政府公文書が、機密解除となりました。それは「ブッシュ一族とナチスの親密な関係」が、明確に記された米政府公文書です。

ブッシュ家と言えば、親子揃ってアメリカ大統領になった一族ですが、パパ・ブッシュの父であり、ブッシュ・ジュニアの祖父にあたるブレスコット・ブッシュは、第二次世界大戦の開戦前の1926年から、開戦中の1942年まで、ナチスが軍事を拡張し、戦争体制の財政基盤を築くビジネスパートナーであったことが、公式文書で明るみになっています。

この機密解除された公式文書によれば、ブッシュたちは、ドイツの産業資本家フリッツ・ティッセンと資金提携を結び、なおかつその事実を隠そうとしていました。ティッセンとは、鉄鋼石炭王であり、ナチスを支えた巨大財閥ですが、そのティッセン財閥を陰で支えていたのは、実際はアメリカのブッシュ一族とハリマン財閥だったというのです。

自分たち以外の人間を「家畜」と考え、戦争する両国に金を出す彼らの思考を読み解いていく時、ユダヤ人と自称しながらも、ユダヤ人迫害を行うナチスを支援する可能性は、彼らならば十分に考えられます。

なぜならナチス・ドイツの「ユダヤ人迫害」が引き金となって、ユダヤ国家イスラエルが1948年に建国されるからです。しかし



イスラエル建国は、1897年にスイスのバーゼルで行われた「第1回シオニスト会議」から、すでに決定していたことでした。そしてこの会議とイスラエル建国を支援していたのは、まぎれもなくロスチャイルド一族だったのです。

また第一次世界大戦の戦費に苦しんでいたイギリスは、やはりロスチャイルド一族からお金を借りており、このロスチャイルドからの借金をキツカケに、イギリスは1917年に「バルフォア宣言」というものを行います。「バルフォア宣言」とは、イギリスの外務大臣アーサー・バルフォアが、ライオネル・ウオルター・ロスチャイルドに書簡を送り、その中でイギリスの外務大臣が、イスラエルを建国することを約束した宣言のことです。

そしてその後、第二次世界大戦中にナチスよって「ホロコースト」が行われることで、世界中からユダヤ人に同情が集まり、戦後の1948年にイスラエルは建国されました。つまり1897年の「シオニスト会議」で「イスラエル建国」を企画し、1917年の「バルフォア宣言」で「イスラエル建国」を約束させ、1941年から45年まで続く「ホロコースト」が「イスラエル建国」を最終決定させたわけです。こうした一連の流れを見ると、ロスチャイルド一族が、直接か、間接かは問わず、ナチス・ドイツに資金援助した可能性は十分に考えられます。

さて、「コロナは茶番」という真実に迫っていくためにも、この「地球」という惑星において、絶大な権力を誇るロスチャイルド一族が、実は正統なユダヤ教徒ではなく、わざわざユダヤ人を自称していること、そして彼らの思想が、かなり悪魔がかった家畜思想であることを踏まえて、彼らの中心的な仕事である「国際銀行家」という職業を見ていかねばなりません。

銀行は軍隊より危険である

第3代アメリカ大統領トーマス・ジェファソンはこう述べていました。「銀行は軍隊よりも危険である。もしも民間銀行に通貨発行を奪われたら、我々の子孫はホームレスになるまで銀行に利益を吸い上げられてしまうだろう」と。

実際に世界で最も豊かであるはずのアメリカでは、車で生活する家族、子どものホームレスもあり、そして日本でも、国民の約半分が預貯金ゼロの状態になってしまいました。

「自動車王」と呼ばれたヘンリー・フォードという方も、こう述べていました。「この国（米）の人々の銀行や金融への不理解はもうたくさんだ。もし金融の仕組みを理解したら、明日の朝までに革命が起こるだろう」と。

アメリカでは6人もの大統領が、暗殺未遂および暗殺に遭っているわけですが、その6人の共通点は「銀行と対決した」ということです。

歴史の教科書には、歴代のアメリカ大統領たちが何人も暗殺、あるいは暗殺未遂に遭ってきたことが書かれています。しかしどの歴史書にも、国際銀行家について何も書かれていないように、その暗殺理由については何も書かれてはいません。

同志社大学の元教授・山口薫さんは、「世界のトップ10に入る」と言われているカリフォルニア大学バークレー校で、ノーベル経済学者のジェラルド・ドブルー、ジョージ・アーサー・アカロフといった、世界に名だたる経済学者たちから、経済学を学んでこられま



した。まさに彼は最先端の経済学を学んでこられた人物なわけですが、しかしその彼が、自身の著書『公共貨幣』の中で、次のように述べています。

「現在の経済学では中央銀行については何も教わることはなく、また現在の貨幣制度というものは、我々が教えて頂いた経済学とはまったく異なり、中央銀行が無からお金を創り出している。」

世界一流の経済学を学ばれた同志社大学の元教授が、「学んできた経済学と実際の経済はまったく異なっている」と述べている、これは驚愕の事実です。

実は東大だろうが、オックスフォード大学だろうが、ケンブリッジ大学だろうが、カリフォルニア大学だろうが、世界中のどこの一流大学だろうとも、経済学の授業において、「ロスチャイルド一族」の名前と共に、「中央銀行」と「通貨発行権」というこの大問題はスルーされてきました。そして山口薫氏がこの経済のタブーについて切り込むと、彼は同志社大学を解雇されてしまったのです。

このように、実は経済学そのものに大きな問題がありました。

オックスフォード大学大学院、東京大学大学院にて経済学を専攻し、今現在はイギリスのサウサンプトン大学にて教授を務められている経済学者に、リチャード・ヴェルナーという方がいます。彼は著書『虚構の終焉』の冒頭で、次のように驚くべきことを述べています。「経済学はフィクションであり、人々から宗教のように信じられているが、まさに邪神崇拝であった。」と。

私たちは経済学という邪神崇拝を、気づかぬうちに行っていたのかもしれない。

どのようなにして銀行は誕生したか

では、ロスチャイルド一族をはじめとする国際銀行家は、どのように中央銀行を設立し、世界各国の「通貨発行権」を手に入れたのでしょうか？

かつて人間は、「物々交換」を行っていました。しかしこれとても厄介です。なぜなら常に自分が交換したい物と、相手が交換したい物のバランスが上手く取れるとは限らないからです。

そこで「物品貨幣」と言つて、貝や石など、いろいろな物が、現在のお金の役割を果たしました。しかし貝や石は、使っているうちに、次第にすり減っていきます。それらは、いつの間にかポロポロになってしまふわけです。

その悩みを解消するかのように、「金属貨幣」が誕生し、金、銀、銅などがお金として使われました。つまり金貨や銀貨が、人々の間で使用されたわけです。

では、お金というものは、金貨や銀貨から、どのようにして「紙」へと変化したのでしょうか？そして、どのように銀行は誕生したのでしょうか？

「ユダヤ人」と呼ばれる人たちは、常にキリスト教から迫害を受けて、時には追放され、追い出されることもありました。そのためユダヤ人たちは、土地や建物といった不動産を持たず、なおかつ公務員にもなれず、商売で生計を立てる人が大勢いました。

その中でも、「金貸し」になる人もいました。そのために彼らは金庫を持ち、多くの人たちから金貨を預かり、その代わりに、紙に印した「預かり証」を発行して渡しました。

するとこの「金貨の預かり証」が、いつしか商人たちの間で、金貨の代わりにやり取りされるようになりました。つまり紙キレが、

「金貨と同等の価値」と見なされていったのです。

すると「金貸し」を営む者たちの中に、賢い者が現れて、その「金貨の預かり証」をたくさん発行して、利子付きで人々に貸し始める者が現れ初めました。もちろんその「預かり証」は、金貨と交換できるので、しかもその「紙切れ」を持って、皆が一斉に金貨と交換しに来たら、その「金貸し業を営む者」は倒産です。なぜなら金貸しは、実際には存在していない金貨の分の「預かり証」を発行しているからです。これを「取り付け騒ぎ」と言って、実は今ある銀行も、皆が一斉に預けているお金を引き出しに行ったら倒産します。

しかしお金持ちや商人たちは、その「金貸し」を信頼しており、すから、安心して金貨を預けたままにして、「金貨の預かり証」で商売の取り引きをしました。実はこれが「紙幣」の誕生なのです。

こうして「単なる金貸し金庫屋」は、金貨を預かる代わりに、「預かり証」を発行することで、「銀行」という業務へと発展していったわけです。

しかしどうせ誰かにお金を貸して、その利子でお金儲けをするならば、普通の人を相手にしたり、商人を相手にするのではなく、「日露戦争」の時のように、王様や国家を相手にお金を貸したほうが、はるかに多額を貸し付けて、利子で儲けが得られます。こうして彼らは、中世のヨーロッパにおいて、王様が戦争する度に、多額を貸し付けて、利子で儲けて資産を増やしていきました。なおかつ武器の売買で儲けることもありました。

これは歴史の授業では教えられないことのない、しかし絶対に教えるべき歴史であると、そのように言えるでしょう。

イングランド銀行の設立

銀行家に、さらなる飛躍の時が訪れます。1694年、イギリス国王ウィリアム3世は、戦争に明け暮れていたために、戦争の費用を貸してくれる人を探していました。そこにスコットランド人のウィリアム・パターソンという人物が現れて、国王にお金を貸す約束をしました。

彼がイギリス国王に対して、お金を貸す条件として出したのは、次のことでした。

「『イングランド銀行』の設立を認めること。

そしてこの銀行が金貨120万ポンドを元手に、240万ポンドの紙幣を発行すること。その半分の120万ポンドの紙幣を王様に貸し出す代わりに、残りの120万ポンドでもって返済すること」ということでした。何としても戦争に勝ちたい国王ウィリアム3世は、その意味をよく理解しないまま、その条件を飲んでしまいました。

こうして1694年、『イングランド銀行』という中央銀行が、ついにイギリスに誕生しました。『イングランド銀行』という名前から、まるで政府銀行のような印象を受けますが、結局はこの銀行も株式会社でした。しかもパターソンは、120万ポンド分の金貨を用意することを国王に約束していましたが、実際に彼が用意したのは、30分の1以下のたったの3万6千ポンドに過ぎませんでした。

こうして「単なる金貸し業」を営むウィリアム・パターソンは、イギリス王ウィリアム3世から「銀行券の発行権」を得て、中央銀行として株式会社を設立したわけです。『イングランド銀行』とは、日本で言えば中央銀行の『日銀』であり、お金を発行、印刷、そし

て管理しているところです。

実際の中央銀行としては、1668年に設立されたスウェーデンの『リクスバンク』のほうが古いのですが、しかしこの『イングランド銀行』をモデルにして、世界各国の中央銀行が設立されていきました。

ナポレオンに勝利した銀行家

そして『イングランド銀行』設立から百数十年後の1815年、ナポレオン率いるフランスが、イギリス率いる連合軍と戦っていました。『ワテルローの戦い』です。

この時にも、軍事費に乏しかったイギリスは、強敵ナポレオンを破るために国債を発行して、戦争費用を捻出していました。つまりまたもやイギリスは、投資家たちにお金を借りて、ナポレオン・フランスと戦ったわけです。

しかし、もしもイギリスが戦争に敗れば、その国債は紙クズと化してしまい、投資家たちがイギリスに貸した金が返ってこなくなる可能性があります。そのために当時の投資家たちは、イギリスとフランスの戦争の行方をじっと見守っていました。

そんなある日、ネイサン・ロスチャイルドが、青ざめた顔をして、イギリスの国債を売り始めました。彼は初代マイヤー・アムシェル・ロスチャイルドの三男です。ロスチャイルド一族は、ヨーロッパ各国に5人の息子たちを派遣して、『ロスチャイルド商会』を営み、彼らは武器売買で儲ける「死の商人」として、あるいは「金貸し」として、すでに莫大な富を得ていました。

そして電話もネットもない当時から、「ロスチャイルド家は早馬、

伝書鳩、高速船などによる情報伝達網を持っている」と、人々から信じられていました。なぜなら彼らは、「情報こそが物を言う」ということを熟知していたからです。

そのためにネイサン・ロスチャイルドが青ざめた顔をして、イギリス国債を売り始めると、彼のその姿を見た投資家たちは、当然、「イギリスが負け、フランスが勝つたのだ」と思い込みました。

こうしたことから投資家たちは、我先にと競って、次々とイギリス国債を売り始めました。

これによってイギリス国債は大暴落して、まさに「紙クズ」と化しました。しかしその裏で、ネイサン・ロスチャイルドは、秘密裏に代理人を使って、その「紙クズ」同然となったそのイギリス国債を買いまくっていました。なぜなら本当はイギリスがフランスに勝利していたからです。

この日を境に、多くの投資家と名門貴族が破産しました。これに対してロスチャイルド家は、すでに莫大な財を築いていたにも関わらず、当時としては天文学的数字とも言える莫大な利益を得ました。その金額は、現在のお金の価値にすると、数百兆円にもなるそうです。ロスチャイルド家の財産は、2500倍にまで膨れ上がりました。

こうしたことから欧米には、「ワテルローの戦いにナポレオン・フランスが破れ、イギリス連合国が勝利したが、しかし実際に勝ったのはロスチャイルド家だった」という有名な言葉があるわけです。

そして天文学的な富を得たロスチャイルド一族は、その莫大な財力を背景に、すでに設立されていた『イングランド銀行』を、自分たちの支配下におくことに成功しました。

そしてロスチャイルド家による金融侵略の魔の手は緩むことはなく、彼らは、政治家へは賄賂を贈り、上手く戦争を利用して、様々な国々にお金を貸し出すことで、戦争の度に資産を増やしていきました。その結果、なんとわずか数十年の間に、彼らは次々とヨーロッパ諸国の中央銀行を、自分たちの支配下に置くことに成功していたのです。

そのために1800年代後半には、ほぼヨーロッパ中の中央銀行が、彼らの支配下、あるいは彼らの影響下に置かれていました。

ちなみに『イングランド銀行』は、1946年に政府によって国有化され、民間の株式会社から政府の中央銀行となりました。しかしたとえ『イングランド銀行』が、政府の中央銀行となってもすでに時は遅く、実際にはロスチャイルド一族が『イングランド銀行』に対して絶大な力を持つております。また、ロスチャイルド一族が、ヨーロッパ各国の中央銀行を支配下に置いていった、ということも述べましたが、ユーロを発行している『ECB』も、実は国際銀行家が経営する株式会社です。

「ワテレルローの戦い」で莫大な富を得たネイサン・ロスチャイルドは、父親と同じように、1815年、次のように述べたそうです。

「大英帝国の王座に座って、日の没すること無き帝国を統治する傀儡など、誰でも構わない。大英帝国の貨幣供給を掌握する者が、大英帝国を支配するのだ。そして大英帝国の貨幣供給を掌握しているのは、この私だ」と。

そしてこのネイサンの息子がライオネル・ロスチャイルドであり、ディズレーリがイギリス首相の時に、『スエズ運河』株の購入金である400万ポンドを肩代わりするわけです。

これだけ絶大な権力を持つ一族の名を、人類の大半が知らないところこそが、人類にとつての脅威と言えるのではないのでしょうか？

米国の秘された金融史

かつてのアメリカでは、各銀行がそれぞれ独自の「信用」で「通貨」を発行していました。そのために、実は「統一された通貨」も、「中央銀行」というものも存在しておりませんでした。そうしたことからアメリカでは、国際銀行家たちが中央銀行を設立して、「通貨発行権」を奪うか、それとも政府が、彼らに中央銀行を作らせずに、「通貨発行権」を守り切るか、という激しい経済戦争が繰り広げられてきました。

しかしアメリカ建国から、わずか十五年後の1791年には法案が通つてしまい、中央銀行の『第一合衆国銀行』が創設されています。この時、米国は「通貨発行権」を奪われてしまいました。なぜならこの中央銀行の株式は、80%も民間が持ち、アメリカ政府は、わずか20%しか株式を持っていなかったからです。

しかし幸いなことに、この中央銀行は二十年ごとに更新するかどうかを、議会で決めることになっていました。そして創設から二十年後の1811年、議会において1票差で拒否されて、この中央銀行は閉鎖されることになりました。するとその翌年の1812年、国際銀行家たちは当時の大英帝国に働きかけて、「英米戦争」を勃発させました。

国際銀行家というのは、イギリスに働きかけて、1840年に「アヘン戦争」を仕掛けた者たちでもあります。ですから「英米戦争」の背景には、実はアメリカの『第一合衆国銀行』が、1票差で閉鎖

されたことに理由があったと言えるでしょう。

そして戦争には、莫大なお金がかかるために、アメリカ政府はこの米英戦争によって、借金で首が回らなくなりました。そのために、ついに1816年、アメリカ政府は『第二合衆国銀行』を認めてしまいません。建国からわずか三十年、経済戦争におけるアメリカの二度目の金融的な敗戦でした。

こうして再びアメリカは、国際銀行家たちに「通貨発行権」を奪われて、またもや二十年ごとに、中央銀行を更新する制度が始まりました。

しかし1833年、第7代大統領アンドリュー・ジャクソンは、政府の借金をゼロにすることで、この『第二合衆国銀行』の更新を断り、国際銀行家たちから「通貨発行権」を取り戻しました。すると冒頭でも述べましたように、アメリカ史上、最初の大統領暗殺未遂事件が起こります。ジャクソン大統領は死の直前も、自身の大統領としての功績を尋ねられて、「通貨発行権を守ったこと」と述べています。

アンドリュー・ジャクソンは言いました。

「銀行は私を殺したいだろうが、私こそ銀行を殺す。お前たちは腹黒い盗人の巣窟だ。私たちはお前たちを一掃する。永遠なる神の力によって、お前たちを必ず一掃する」

それから時は流れ、1861年にアメリカの大地は、北と南に別れて、「南北戦争」が起こります。すると国際銀行家たちは、財政危機の中にいる第16代大統領エイブラハム・リンカーンに対して、借金の話を持ちかけました。それは「24〜36%」というメチャクチャ高い利子での融資計画でした。

この融資計画を聞いたリンカーンは啞然として、そして毅然とド

アを指さして、国際銀行家たちに部屋から立ち去るように命じたそうです。戦費に乏しいリンカーンは困りましたが、しかし彼は法貨条例 (Legal Tender Act of 1863) を制定して、アメリカの建国から約百年、初めて財務省から「グリーンバックス」という「政府紙幣」を発行させました。そして彼は次のように述べたのです。

「政府は自分で必要な費用をまかない、一般国民の消費に必要なすべての通貨を流通させるべきである。通貨を創造して発行する特典は、政府のたった一つの特権であるばかりでなく、政府の最大の建設的な機会なのである。」

この金融システムを取り入れることによって、納税者(国民)は計り知れないほどの金額の利子を節約することができ。それでこそお金が人間の主人ではなくなり、人間が人間らしい生活を送るために、お金が人間の召使になってくれるのである」

リンカーン大統領は戦争費用を銀行から借りることなく「政府紙幣」を発行したこともあって、見事に南北戦争を勝利に導きました。そして彼は、その後も、この「政府紙幣」の通貨システムを、永続的にアメリカで存続させることを表明しました。すると彼は暗殺され、「政府紙幣」の発行も中止されてしまいました。

この南北戦争の時、国際銀行家たちは南部を支援していましたが、つまり日露戦争の時と同様に、国際銀行家たちは南北両方に借金をもちかけていたわけです。

それから約50年後の1913年に中央銀行の『FRB』が創設されて、アメリカ政府は「通貨発行権」を完全に銀行家たちに奪われてしまいました。当時の第28代アメリカ大統領ウッドロー・ウ



イルソンは晩年、こう発言していたそうです。

「私はうっかり自分の国を滅ぼしてしまいました。大きな産業国家は、その国自身のクレジットシステムによって管理されています。（民間中央銀行FRBが設立されたことによって）私たちのクレジットシステムは一点に集結しました。したがって国家の成長と私たちのすべての活動は、ほんのわずかな人たちの手の中に有ります。（通貨発行権が奪われたことで）私たちは文明開化した世界において、支配された政治となり、ほとんど完全に管理された最悪の統治国家に陥ってしまったのです」

1913年、民間の中央銀行『FRB』が設立され、ドルが発行されることによって、アメリカ合衆国は、国際銀行家たちによって経済侵略されてしまいました。しかし勇氣ある大統領がいました。ジョン・F・ケネディです。「通貨発行権」を奪われてから約50年後の1963年6月4日、ケネディ大統領は、国際銀行家たちから「通貨発行権」を取り戻して、アメリカの金融システムを再建しようとしてきました。彼は「大統領令11110」を発令して、5ドルの「政府紙幣」を発行したのです。するとその約5ヶ月後、彼もリンカーンと同様に、ダラスにて暗殺に遭いました。そしてケネディが発行した5ドルの「政府紙幣」も回収されてしまいました。

冒頭でも述べましたように、リンカーンとケネディの暗殺の理由、もしくはジャクソンの暗殺未遂の理由は、未だに不明です。しかし彼らが共に、「政府紙幣」を発行していたり、『第二合衆国銀行』を閉鎖したりして、国際銀行家と対決していたことは、まぎれもなく事実です。



そして冒頭でも述べましたように、陰謀論に振り回されることは愚かなことですが、しかし事実と事実を結び付けて、真実を探し求めようとしないうちにも、また愚かと言えるでしょう。なぜならこの「政府紙幣」と「通貨発行権」の問題は、私たち人類の生命と財産に大きく関わる問題であるからです。そして事実と事実から真実を探し求めることこそが、「コロナ茶番騒動」とも、大きく関係しているからです。

侵略されてしまった米国

「いつの間にか日本政府は株式会社であった」、これは日本人にとって深刻な問題ですが、しかしそれはアメリカも同じであり、これは人類にとって大変な問題です。なぜならすでにアメリカも、1776年にイギリスから独立して、建国されたアメリカ共和国 (The Republic of the United States of America) ではないからです。

たとえばモンタナ州のローカル新聞『Missoulian』も、2015年10月に伝えていることですが、1871年から、株式会社としての『コロンビア特別区』、いわゆる『ワシントンD.C.』が創設されました。つまり日本政府も2003年から株式会社化しているように、どうやらアメリカも、1871年の時点で、詐欺まがいの手法によって設立された『THE UNITED STATES OF AMERICA』という民間の株式会社だったようです。この辺の話は事実確認が不透明で今後研究が必要ですが、重要なポイントは1871年より、アメリカの表記が小文字から大文字表記に変わっているところです。

この「株式会社アメリカ」は、アメリカ合衆国連邦から独立した

地位を与えられているそうです。アメリカという国はもともと、1776年にイギリスから独立し、建国されましたが、建国からわずか15年後の1791年には『第一合衆国銀行』が設立され、1811年にこの銀行が閉鎖されると、翌年の1812年の「米英戦争」で財政難に陥りました。そしてその後、1862年にリンカーン大統領が、「南北戦争」に勝利して、さらには財政難を立て直すために「政府紙幣」を発行して暗殺されてしまったことは、すでに述べましたが、その九年後の1871年、すでにアメリカ共和国とは別の法制度を持つ「ワシントンD.C.」（ワシントン・コロンビア特別区）という、たった一辺10マイル（約16キロ）の100平方マイルの小さな特区に、新たな政府を形成する法案を、どうやら可決させてしまったようです。

それまでの「アメリカ共和国」が、個人の権利を強く主張している、英国の「コモン・ロー」という法体系であったのに対して、この新たなコロンビア特別区では、国王や独裁者の権利のほうを優先させた法体系（海事法）が適用されました。たとえばアメリカの「独立宣言」の憲法には、こう記されております。

「われわれは、自明の真理として、すべての人は平等に造られ、創造主によって一定の譲ることができない権利を賦与されており、その権利には生存、自由、そして幸福の追求が含まれていることを信じる。これらの権利を確保するために、人は政府を組織し、その正当な権力は統治される者の同意に基づいている。そして、どのような形態の政府であれ、これらの目的を破壊するようになるときには、政府を改革し、あるいは廃止し、新しい政府を組織して、人民にとってその安全と幸福をもたらす可能性が最も高いと思われる方法で、その政府の基礎を設立して、その権力を組織することは、人民

の権利である。もちろん長年にわたって樹立されてきた政府を、軽々しい一時的な理由によって、改造すべきではないことは、思慮分別が示す通りである。」

つまりアメリカの憲法では、「すべての人間が平等であり、米国民には幸福を追求する権利があり、もしも政府がこうした権利を侵すのならば、国民には政府を創り変える権利があるが、しかし軽々しく憲法や政府を変えてはならない」と書かれているわけです。しかし1871年、アメリカ共和国の憲法は、何とも軽々しく修正され、密かに加筆され、以下の文言が加えられてしまいました。

「法律によって認可されたアメリカの公的債務の有効性は、暴動または反乱を抑制するためのサービスに対して、年金および報奨金の支払いのために発生した債務を含めて、疑問視されないものとする。」

【公的債務条項修正第14条 セクション4】

つまり「アメリカ政府が、暴動や反乱を抑えるためにする借金に対して、国民は疑問を抱いてはならない」という文言が、密かに米憲法に追加されていたわけです。国家が借金を背負った場合、借金返済に必要なお金は、大半の場合が、国民の税金に頼るものです。ですからこの文言は、表現を変えれば「国家が借金を背負って、そのために増税することに対して、国民は疑問を抱くな」という意味にも取れます。

そして米政府が借金をして、返済するのは大半が『FRB』です。すなわち1871年、アメリカでは、国際銀行家に対して、いかなる借金をすることを正当化する文言が、密かに憲法に追加されたわけです。こうしてアメリカ国民とその財産は、「ワシントンD.C.」を通じて、国際銀行家に握られ、そしてアメリカ国民の自由も徐々に奪われていきました。

修正された米国憲法

1871年に、アメリカは会社化し、そして1913年には、民間中央銀行の『FRB』が設立されます。

この時、アメリカ政府の借金は、わずか1億ドルでしたが、ウィルソン大統領が退任する8年後には、アメリカ政府の借金は800倍に増えて、800億ドルにまで増えていました。

そしてそれから約百年の月日が経過すると、アメリカ政府の借金は二千倍にまで増えて、2億ドル(2千兆円)にまで膨れ上がりました。※これは公式の借金で、非公式にはもっと借金があると言われています。

そして1929年10月24日、ニューヨーク証券取引所で株価が大暴落して、「世界恐慌」となり、アメリカの借金・財政難はさらに深刻化します。その結果、1936年、経済政策(ニューディール)の一環で、国民一人一人に「ソーシャル・セキュリティ・ナンバー」というものが割り当てられ、アメリカ国民の不幸が本格化していきました。なぜならアメリカ国民は、生まれた瞬間から1人当たり、莫大な借金を税金として背負わされる、奴隷状態に置かれてしまったからです。

その一方で国際銀行家たちは、手に入れたお金の力、権力を最大の武器にして、自分たちの仕事を、よりやり易くするために、大手の新聞社、ラジオ局、テレビ局、ハリウッド・映画会社、さらには教科書会社などまで、重要な情報の発信源のすべての株式を買い占めていきました。しかもさらに彼らは、自分たちが支払う寄付金、あるいは政府が出す助成金を巧みに使うことで、大学の資金源まで握ることに成功していきます。

こうして彼らは、自分たちに都合の良い学問だけを行わせて、経

済学から歴史、医学などの教育そのものを歪めてきました。歴史から経済学まで、学問が歪められてしまったから、世界の大半の人々が、「ロスチャイルド」の名を知らないわけです。マスコミを抑えられて、医学まで歪められてしまったから、「コロナ茶番騒動」が終わらないのです。

そして彼らは、米国民および世界中の人々を、見事に洗脳してきたわけです。だからこそ山口薫元教授のように、「中央銀行が無からお金を創り出していた」と真実を語ると、同志社大学を解雇されてしまうわけです。

たとえば画像にもありますように、アメリカ大統領が公式な記者会見や演説を行う場面では、その壇上には、必ず金で縁取られたアメリカ国旗が掲げられ、旗の竿にはローマ帝国の国章であった鷲の飾りがあります。この旗はワシントンD.C.という特別区の旗だそうです。すなわちこちらの旗を使用する時は、「その場所がワシントンD.C.の法の下に置かれている」ということを意味しているそうです。ホントかウソか、こうした詐欺的なトリックを使って、米国民および世界中の人々の目を欺くことで、アメリカという国は長年にわたって骨抜きにされ、そしていつしか多くのアメリカ国民たちが、苦しい生活へと追い詰められてきたわけです。



中国発「武漢ウイルス」と米国

今、世界を騒がせている「コロナ」は、「中国武漢発」と言われ

ております。そしてノーベル賞受賞者のリュック・モンタニエ氏は、新型コロナウイルスについて、次のように発言しています。「新型コロナウイルスは中国の研究所で人為的につくられ事故で流出した」と。

また、このモンタニエ氏とタッグを組んでいる数学者のジャン・クロード・ペレズ氏によれば、「新型コロナウイルスは時計職人が行うような精密なもので、自然に存在することはあり得ない」と述べています。

二人の発言を裏付けるかのように、実際に中国の武漢には、『武漢ウイルス研究所』があります。今回の新型コロナウイルスは、コウモリからヒトに感染したことになっていますが、この武漢のウイルス研究所では、コウモリを使って新型コロナウイルスに関する研究を行ってきました。ちなみに今回の新型コロナウイルスは、「コウモリからヒトに感染した」ということになっています。

そして『アメリカ国立アレルギー・感染症研究所(NIAID)』の所長に、アンソニー・ファウチ博士という人物がおります。彼は3年前から今回の「パンデミック」を予言していました。アンソニー・ファウチは3年前に、「サプライズ・アウトブレイクが起きる、トランプ政権の間にパンデミックが必ず起きる」などと断言していたのです。

しかもなぜかこのアンソニー・ファウチは、危険な生物兵器の研究を中国に託しており、『武漢ウイルス研究所』に対して、ウイルスの研究費として資金援助までしていました。これはオバマ政権の頃のことになります。オバマ大統領はアメリカ国内のウイルス研究は中止させたにも関わらず、なぜか2014年から2019年にかけて、5年にも渡って毎年370万ドル(約4億円)の援助を中

国のウイルス研究所に対して行っていたのです。

しかし「アメリカ国民が支払った税金で、中国の武漢ウイルス研究所を支援する」という行為は、アメリカの法律にある、「国家反逆罪」にはあたらないのでしょうか？

「表向きには仲の悪い米中が、実はオバマ政権の頃には、密かに裏で米国が中国のウイルス研究を支援していたなんて信じられない」と、そう思うかもしれません。しかし実際に、ハーバード大学の化学生物学者を務めるチャールズ・リーバー博士は、2011年から『武漢理工大学(WUT)』の「戦略科学者」となり、その対価として月給5万ドル(約550万円)と、さらに生活費として上限15万8000ドル(約1700万円)が与えられていました。しかも彼は、研究所の費用としても150万ドル(1億7000万円)もお金が支給されていたのです。

中国には「千人計画」というものがあります。この計画では、中国の大学の威信を高めるために、世界最高レベルの優秀な人材を世界中から招致しております。そしてこのリーバー博士も、この「千人計画」に参加しており、武漢理工大学に名を連ねていたわけです。しかし彼はアメリカ政府に対して、虚偽の報告を行っていたために、2020年1月に逮捕されています。

中国の武漢にある生物兵器研究所から新型コロナウイルスが流出した可能性がある、しかもこのウイルスを「人工的なものである」と指摘している科学者たちがいる、さらになぜか米国のオバマ政権が、5年にも渡ってその研究所を支援していた、なおかつすでに米国ではそうした研究所や大学と関わりがあった教授たちが逮捕されている、そして何よりも『NIAID』の所長、アンソニー・ファウチ氏は、「サプライズ・アウトブレイクが起きる、トランプ政

権でパンデミックが必ず起こる」ということを予言していた、誰がどう見ても今回のコロナパンデミックは明らかに「おかしい」のです。

ルーズベルト大統領が、いつ、どこで、誰に対して語られたのか、それは定かではありませんが、彼が語ったとされる言葉を、どうか思い出してください。「世界的な事件は偶然に起こることは決してない。そうなるように前もって仕組まれていたと、私は、あなたに賭けてもよい」と。改めて述べますが、「コロナ騒動」は演出された茶番です。

思想的に病むシナ大陸

トランプ大統領が退任する直前に、国務長官を務めていたポンペオ氏は、中国共産党がウイグル自治区で行っている「大弾圧」について、「ジェノサイド（大量虐殺）」と認定しております。また中国政府がチベット、ウイグル、内モンゴルにおいて行っている虐殺行為について、世界中から批判の声が高まっております。

しかし当然のことながら日本も、中国から様々な文化を学んできましたから、シナ大陸そのものに問題があるわけではありません。なぜならアメリカが国際銀行家に金融侵略されたがごとく、実はシナ大陸も中国共産党によって、暴力侵略されてしまっていたからです。では、なぜ中国共産党が問題なのか？それはユダヤ人を自称している国際銀行家たちが、『タルムード』思想に洗脳されているように、中国共産党を作っている根本思想に、やはり問題があるからです。

かつてユダヤを語るカール・マルクスという人物は、次のように

考えていました。

「労働者は資本家（会社・経営者）によって搾取されている。だから労働者たちは立ち上がり、力を駆使してでも資本家を倒し、平等な理想社会を築かなければならない。」

そして個人で財産を持つこと、私有財産を否定して、共同で生産手段を持つ理想社会を築かなければならない。

霊も神も存在せず、物質のみがただ存在しているに過ぎない」

この共産思想に基づいて、世界で最も広大な土地を持つソ連と、世界で最も多くの人口を持つ中国が建国されました。その他にも東ドイツやルーマニア、カンボジアなどが、この思想に染まりました。

しかしこれらの共産国家は、どこもかしこも「平等」は欠片も存在せず、あるのは、ただ「貧困」ばかりで、ほんのごく一部の特権階級だけが、超贅沢な暮らしを満喫しました。「平等」を目指す共産思想なのに、完全に矛盾しており、「完全な超格差社会」が出来上がってしまったわけです。

当然ながら、飢えに苦しむ国民たちは、政府を批判しました。しかし共産思想は、「暴力も手段」と考えているために、政府に歯向かった国民は、ことごとく強制収容所に入れられ、あるいは殺戮、粛清されました。こうして共産国家では、政府に対する批判ができないように、「言論の自由」も完全に奪われてしまいました。

共産思想によって国を建てたら、暴力によって、世界から1億にもおよぶ人間が地上から消えてしまったのです。

こうしたことから、やがて人々は共産思想に嫌気がさして、共産国家の長であったソ連は崩壊し、ベルリンの壁も倒れて、東ドイツと西ドイツは一つになりました。これをキツカケに、その他の共産国家も、次々に倒れていきました。

しかし中国共産党は、今なお存続するばかりか、その侵略の刃をアジアやアフリカ、そして欧米にも向けております。もちろん中国が共産思想で成功したのではなく、「平等」と「自由」もあるわけではありません。中国で贅沢な暮らしができるのは、中共と関わりのある、ごく一部の特権階級だけで、やはり「超格差社会」が出来上がっております。

中国共産党と国際銀行家の関係

では、ロスチャイルドと中国は、どのような関係なのでしょう
か？

ロスチャイルドと中国共産党の関係を探るためには、まず彼らがユダヤ人を自称しながらも、ユダヤ人・ホロコーストを行ったナチス・ドイツを密かに支援して育て上げてきた歴史と、その彼らの思考を考える必要があります。また、マイヤー・アムシェル・ロスチャイルドが「私に一国の通貨の『発行権』と『管理権』を与えよ。そうすれば誰が法律を作ろうと、そんなことはどうでも良い」と述べていたことも、今一度、思い出す必要があります。どうやら彼らは、暴力的な独裁国家とは相性が良いようです。

ですからロスチャイルド一族は、日本に高額な利子でお金を貸したり、リンカーンにも高額な利子で借金計画を持ちかけたり、幾多の大統領暗殺にも関わったと言われておりますが、その一方で彼らは、中国共産党とは非常に仲が良く、北京、上海、香港にオフィスを構えています。彼らは中国の『青島銀行』の2.4%の株式を保有し、また、山東省に中国との合弁会社『DBR-CITIC Wine Estate (中国・山東省)』を設立しています。

ロスチャイルドの中国部門担当の代表者はユーリーピンという女性で、彼女は中国の元国家主席の江沢民の子と結婚しています。彼女は中国の自動車会社『吉利汽車（ジーリー）』が『フォード』から『ボルボ』を買収する際にも、中国政府に働きかけたりしてきました。

またこれまでロスチャイルド家は財務アドバイザーとして、世界中で活躍する中国企業を幾つも支援してきました。たとえば2007年以降、ロスチャイルドグループは、中国のIT企業『アリババ』の独占的な財務アドバイザーを務めています。デビッド・ロスチャイルドは、2015年に、中国企業『中国化工集団』が、世界第5位のタイヤメーカー『ピレリ』を全面買収する際にも協力しています。あるいは中国企業『上海光明食品集団』が、イギリスのシリアル製造企業『ウィータビックス社』を買収する際にも、ロスチャイルドは惜しみなく協力しています。中国企業『ハイアールグループ』が、『GE』から家電部門を買収する際にも、ロスチャイルドが貢献してきました。つまり中国共産党企業による海外買収のほぼすべてのケースの背後には、実は必ずこのロスチャイルド一族が潜んでいたわけです。

この写真の人物は、左側がジェイコブ・ロスチャイルド、右側がデイヴィッド・ロックフェラーですが、ウソかホントか、アメリカにはこんなことわざがあるそうです。「民主党はモルガン家のもの、共和党はロックフェラー家のもの、そしてモルガン財団もロックフェラー財団



も、すべてロスチャイルド家のもの」。『ロックフェラー』、誰もが「石油王」として、一度はその名を聞いたことがあるかもしれま

せん。

しかしロックフェラーが「石油王」になっていくその背後にも、実はロスチャイルドが関係しておりました。ロスチャイルドと共に、「ゲットー（ユダヤ人強制居住区）」で生活していた歴史を持ち、日露戦争の時には、莫大なお金を日本に貸した『クーン・ローブ商会』のジェイコブ・シフ、彼の一族こそまさにロスチャイルド家のアメリカ代理人です。

なぜならシフが経営する『クーン・ローブ商会』が、実は石油王ロックフェラー、鉄鋼王カーネギーの後援者となり、これまでアメリカの巨大財閥を支援し、そして育て上げたからです。

そして何とも厄介なことに、このロックフェラーの思想も、やはり『タルムード』に共通するものがあります。なぜなら『大紀元エポックタイムズ』の調べによれば、1973年8月10日、デイヴィッド・ロックフェラーは『ニューヨークタイムズ紙』に、中国共産党を設立した毛沢東の「文化大革命」を大絶賛する記事を次のように書いているからです。「文化大革命の代価はどうであれ、彼ら（中共）は明らかに成功である。彼らは毛沢東率いる高効率な政府を作った。中国で行われた歴史的にも重要な社会主義の実験は成功した」

実は国際銀行家たちにとって、ジェノサイドさえ行う独裁国家中国こそ、望む未来の世界の姿なのです。実際にデイヴィッド・ロックフェラーは、自身の著『ロックフェラーの回顧録 下巻』の中で、明確にこう述べております。

「なかには、わたしたちがアメリカの国益に反する秘密結社に属していると信じる者さえいる。そういう手合いの説明によると、一族とわたしは「国際主義者」であり、世界中の仲間たちとともに、よ

り統合的でグローバルな政治経済構造を、言うなれば、ひとつの世界を構築しようとたくらんでいるという。もし、それが罪であるならば、わたしは有罪であり、それを誇りに思う。」

国際銀行家と中国共産党は、思想的に相性が良く、彼らこそがこのコロナ茶番劇を勃発させた者たちであり、また演出している者たちです。ちなみにロスチャイルドがコカ・コーラの株主であることはお伝えしましたが、ロックフェラーはペプシ・コーラです。

同じ思想を持つ者たち

「なぜ国際銀行家と中国共産党は相性が良く、そして親しくするのか？」と、そのように疑問を抱くかもしれません。それは「共産思想」の生みの親であるカール・マルクスが、ユダヤ人を自称していたように、人々を「家畜」と見なす『タルムード思想』と、「人間は物質の塊である」と考える『共産思想』というのは、実はとても思想的に相性が良いからです。

もう少し詳しく述べるとするならば、実は『タルムード思想』と『共産思想』は同じ未来を望んでいるのです。「通貨の発行権」まで持つ彼らは、すでに金銭欲や物質欲は十分に満たしております。なおかつ国家や大統領さえ動かす彼らは、地位欲や名誉欲を満たすことは望んでおりません。そんな彼らに残された欲望とは、それはさらなる権力欲か、あるいは支配欲くらいのもんです。

そんな彼らにとって、独裁国家中国こそ理想の姿なのです。

冷静に考えてみて、習近平を始めとするこれまでの中国の国家首

席たちが、「平等な理想社会」を望んでいると思えますか？

彼らの思想は、「平等」を目指す共産思想というより、むしろ人々

が家畜のように暮らす『タルムード思想』だとは思いませんか？

歴代の中国の独裁的指導者たちは、膨大な国民を管理、監視するためだけに、『共産思想』を利用していると考えたほうが、むしろ自然ではないでしょうか？

共産思想を生み出した、カール・マルクスはユダヤ人を自称しておりますが、しかし「実はバリニツシユ・レヴィー」という自称ユダヤ人が、マルクスに共産思想の発注を行い、そのためにマルクスは共産思想をまとめた」、という説も根強くあります。

すでに述べましたように、日露戦争の際に、日本とロシアの両国にお金を貸し出したのも、自称ユダヤ人のロスチャイルドとジェイコブ・シフであり、ロシアはこの日露戦争で日本と戦い、疲弊したために「ロシア革命」を抑えきることができなくなり、「ソ連」という人類最初の共産国家が誕生しました。

このソ連の最高指導者レーニンも、実は熱烈なユダヤ民族主義者であり、ユダヤ人を自称しており、ロシア革命で活躍したトロツキも自称ユダヤ人であり、彼らが組織している『ボルシェヴィキ』に参加した者たちの大半も自称ユダヤ人でした。そればかりか、ヒトラーのようにユダヤ人迫害を行ったスターリンにまでも、実は根強くユダヤ人説があります。

こう考えてくると、「ロシア革命」というものは、その背後で、かなりの自称ユダヤ人たちが暗躍しているのです。これらの話を裏付けるように、元ウクライナ大使の馬淵睦夫氏も、『知ってはいけない現代史の正体』という書籍の中で、次のように述べておられます。

1917年 ロシア革命

通説 …「労働者・兵士が自治組織ソヴェエトを構成して革

命を推進した」

歴史の真相…「亡命ユダヤ人が主導したユダヤ人を開放するための革命だった」

つまり学校の歴史教育では、「共産主義の労働者たちが、平等を求めて『ロシア革命』を起こすことで、共産国家ソ連は誕生した」と習うわけですが、しかしソ連誕生の「ロシア共産革命」とは、実のところ「ユダヤ革命」であつたと馬淵睦夫氏は述べているわけです。

そしてソ連誕生に続いて、世界のいろいろな国が共産化していくわけですが、すでに述べましたように、「平等」を求めながらも、どの国にも「平等」は欠片もありませんでした。なぜならほんのごく一部の特権階級だけが並外れた贅沢して、人々を支配する「超格差社会」が出来上がってしまったからです。

そして『タルムード』の思想をご覧になれば分かりますように、「一部の特権階級がいて、人々が奴隷や家畜のように生きる支配的社会」こそ、国際銀行家が望んでいる社会なわけです。その証拠に、アメリカや現在の日本がそうであるように、資本主義国家も『タルムード思想』に汚染されていくと、共産主義と同じような社会となつていっております。

つまりユダヤ人を自称する者たちによる、ユダヤ人を自称する者たちのための、ユダヤ人を自称する者たちのためのタルムード思想のもう一つの側面、それが共産思想なわけです。「タルムード家畜思想と共産思想は実は同じ思想である」、この驚くべきことについては、実はユダヤ人を名乗るモルデカイ・モーセという人物が書いたとされている『日本人に謝りたい』という書籍でも述べられています。共産思想もまた姿を変えた「家畜思想」だったので。

タルムード思想とは、ユダヤ人を自称する者たちが、人々のことをゴイ（家畜）と考えて、ゴイには何らの財産を持たせず、「言論の自由」も与えず、もしも刃向うならば虐殺する支配者側の思想です。その一方で共産思想とは、暮らして苦しむ労働者たちがこの思想に惹かれて、自らの手で私有財産を廃止し、その結果、支配者たちに独裁政治を行わせてしまう思想です。

つまりタルムード思想と共産思想は、一つと同じ思想を、支配者側から観るか、それとも支配される大衆側から観るか、その違いでしかなかったわけです。だからこの共産思想が、戦後の日本および世界では流行ってきたわけです。

本小冊子の現段階では、なかなか「国際銀行家と中国共産党が共同でコロナ茶番劇を勃発させて、そして演出している」という話は、まだにわかには信じ難いかも知れません。しかし本書を読み進めていけば必ずご理解できると思います。が、「コロナ茶番劇」の犯人は、アメリカやヨーロッパ、そしてシナ大陸を、金融的に、あるいは暴力的に侵略している者たちであり、なおかつ彼らは現在、日本をも侵略しております。

また、本章では、ロスチャイルドや国際銀行家については、あえて断片的にしか語りませんでした。なぜなら彼らのことを語り尽くせば、荒唐無稽にも感じて、本書を閉じたくなるからです。ですから彼らの姿については、本書を進めながら、少しずつ明らかにしていきたいと思えます。

第二章 どのような方法で？

WGIPで誇りを奪った

「コロナは茶番である」ということを説明するにあたり、「第一章」では「誰が？」ということの一部を説明いたしました。この犯人は国際銀行家であり、中国共産党であり、そして彼らは共に狂った思想を持っております。

本来ならば、次の「第二章」では、「何の目的で？」ということの説明するのが本筋でしょう。しかしあえてそれは現段階では後回しにします。なぜならば、もしもこの時点で、「彼らの目的」を語れば、それこそ「信じられない！」とただ驚くばかりで、本書を閉じたくなるからです。ですから「第二章」では、あえて「どのような方法で？」ということを語ります。

そして彼らが「コロナ騒動」を演出するにあたり、最も利用されているのが「政治」であり、「教育」であり、そして「マスコミ」や「ネット」です。

アメリカという国は、国際銀行家勢力によつて金融的にも、憲法や法的にも侵略されてしまったわけですが、そのアメリカとの戦争に日本は敗れました。この敗戦が、私たち日本国民にとってどれだけ恐ろしいことなのか、それが想像できるでしょうか？

次の発言は映像で残っているので、ネットでご覧になることもできますが、「ユダヤ人」を自称している元米大統領補佐官ズビグネフ・ブレジンスキーは、驚くべきことを述べました。

「大衆は今、政治に目覚め始めており、これは今までなかったことであり、これまでの時代は大衆を誘導することは簡単だったが、政治に大衆が目覚めた今は、大衆を誘導するよりも、虐殺するほうが

簡単である」

「誘導より虐殺が簡単」、それが現在の彼らの考えです。しかしどのような方法で、私たちが誘導され、そして私たちが虐殺されているか、その具体的な方法を理解しなければなりません。そしてその具体的な方法を知るためには、まず敗戦まで歴史を遡る必要があります。

1941年12月8日より日米戦争が始まり、これによって第二次世界大戦が激化し、激闘の末、1945年7月26日に、日本は「ポツダム宣言」を受諾しました。これによって日本軍は降伏し、武装解除を行いました。しかし日本国の「国体護持」は約束され、あくまでも「有条件降伏」だったのです。

そして9月2日には軍艦ミズーリ号の上にて、降伏調印式が行われました。翌日の『ワシントンポスト』は「ペリー（黒船来航）以来の目的を達成」と書いています。この言葉からも分かるように、「日本侵略」は、彼らにとって念願の夢だったのです。

これより後、日本は約7年に渡って、GHQの占領下に置かれました。GHQとは連合国軍のことです。しかしこのGHQは米国の傀儡組織であり、その米国もまた国際銀行家の傀儡でありますから、つまりGHQも国際銀行家の強い影響下にあったわけです。

すなわち彼らは、米国・GHQを通して、間接的に日本を7年に渡って占領下に置いたわけです。しかし実際は、「単なる占領期間」などではなく、「徹底した改造期間」であり、日本が今後とも変わら果てていくことを見据えて、ようやくGHQは去っていった、という見方が適切でしょう。彼らは、私たちが誘導し、虐殺するにあたり、まず政治を支配下に置きました。

しかしなぜ、日本と米国は戦争することになったのでしょうか？

かつてセオドア・ルーズベルト大統領はこう言いました。「我々はどうな戦争であれ、大抵は大歓迎だ。この国には戦争が必要だと考えている」と。

彼らは、自分たちがアジアやアフリカを植民地にして、利益を略奪することを少しでも正当なものにするために、実に手の込んだ「人種差別論」を繰り広げました。アメリカのアルバート・ビベリツジ上院議員は言います。「我々は世界を支配すべき人種なのだ。だから世界の文化文明を担うべく、神に託された人種としての使命がある。我々はその使命を放棄しない。神は我々を選んだのだ。我々は野蛮でもうろくした人々（有色人種）を治めるために、政治の達人として創られたのである」。この理論は『マニフェスト・ドイステイニー』と呼ばれ、アメリカの首都・ワシントンで、熱狂的に受け入れられました。

欧米列強諸国は、白人優位の人種差別意識によって、約500年もの長きに渡って、アフリカの黒人たちを奴隷にし、アジア諸国に対しては殺戮と略奪を繰り返してきました。たとえばオーストラリア・タスマニア島の先住民4000人は、ハンティング、つまり遊び感覚で絶滅させられてしまったのです。

そうした中で、世界で唯一、その白人たちの人種差別に対して、国家として立ち上がった国がありました。それが日本です。

しかしそれが白人たちにも、さらにはユダヤ人を自称する者たちにも許せませんでした。その頃日本はロスチャイルドから借りた日露戦争の時の借金返済に追われておりましたが、そこへ追い討ちをかけるようにして、ユダヤ人を自称する当時のフランクリン・ルーズベルト米大統領が日本に対する輸入封鎖を行いました。

彼らは「ABC包囲網」というものを作り、日本に対する輸入

を禁止したのです。Aはアメリカ、Bはブリテイッシュ、つまりイギリス、Cはチャイナの中国、Dは英語でオランダを意味するダッチのことです。こうして日本は戦争しなければ、このままでは飢え死にってしまう、というギリギリのところまで追いつめられていきました。

実は日本にとって先の大戦とは、欧米列強諸国からアジア諸国を植民地から解放して、白人優位の人種差別を打ち砕くとともに、日本の正当な自衛権の行使としてなされたものでした。ですから日本政府の力が今一歩及ばず、日本は戦時国際法違反の原爆を使用した米国に敗れたもの、当時の日本人は、アジアの同胞を解放し、祖国を防衛するために戦ったのです。

しかし敗戦後に始まった『東京裁判』によって、占領軍GHQは、「加害者」と「被害者」を見事に入れ替えました。そして国際銀行家と相性の良い中国共産党も、この『東京裁判』に乗っかって、「南京大虐殺」という政治的宣伝活動を行いました。

たしかに窮地に追い詰められて、戦争に引きずり込まれた当時の日本は、ソ連という強大な敵の前に、「敵の敵は味方」という考えから、ドイツと手を組んでしまいました。そのためにユダヤ人に対して、「ホロコースト」を行ったナチスと当時の日本が、同じレベルと誤解されてしまうこともあります。

しかし日本は、ナチス・ドイツから「ユダヤ人迫害」に協力するように要請されても、きちんとそれを断っております。なぜなら他の民族、他の人種、他の国籍、他の宗教に対して差別しないのが、日本建国の精神だからです。

初代神武天皇は、「八紘をおおいて宇と為さん」と述べられました。これは全世界、全宇宙を一つの家として、生きとし生ける者を兄弟同胞と考える精神です。そしてこの言葉は、しばしば「八紘一

宇」という言葉に要約されることもあります。しかしGHQによって、この言葉を使うことが禁じられました。

ですからたとえ戦争中と言えども、日本人はユダヤ人に対しても、中国人に対しても差別することなく、「一視同仁」に見ることに、最後まで努めたのです。「一視同仁」とは、自分と他人を同じに見ることに努め、すべてを平等に見ることに努め、つまりは差別無く、えこひいきせず、だれかれ区別することなく、また身分や出身、敵や味方などにも関わらず、どんな人に対しても平等に慈み、なおかつ動物に対しても慈愛の心を持つことです。

かつて日本人の心の中には、侍精神があり、「一視同仁」に生きとし生けるものを見ることに努めていたのですから、「南京大虐殺」など絶対にはりえないのです。個人レベルで間違いを犯すものがないとしても、軍隊レベルで間違いを犯すことなどありえないわけですから。

ですから日本は、大虐殺など行っておらず、むしろ大虐殺を行ったのは、原爆投下を行った米国でした。にもかかわらず日本が、大虐殺を行ったことにされたのです。すなわち『東京裁判』とは、敗戦国と戦勝国の間で、「正義」と「悪」を入れ替えるために行われた詐欺裁判だったわけです。にもかかわらず、戦後の共産思想に染まった日本人たちも、頑なに『東京裁判』を信じ切りました。

では、何のために彼らは、「正義」と「悪」を入れ替えたのでしょうか？

それはもちろん米国によって行われた原爆投下という大虐殺を、正当化することも目的にありました。しかしその他にも、日本人を誘導し、虐殺し易くするために、日本人から「日本人としての誇り」を奪い取るためでもありました。

なぜなら「日本人としての誇り」を失えば、日本人が日本のこと

を考えなくなり、日本のことを知らなくなり、日本や世界で何が起きているのかも分からなくなるために、日本人を誘導し、虐殺し易くなるからです。だから彼らは、日本人に自虐的な偽の歴史観を叩き込んで、「日本はダメな悪い国」と本気で思わせたのです。

その「日本人としての誇り」を奪い取るために行われた工作のことを、「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」、略称「WGIP」と言います。すでにこの「WGIP」に関する文書も見つかっております。

そしてGHQは、わざわざ置き土産として、共産主義の教育者たちの労働組合『日本教職員組合』、通称『日教組』をあえて置いてきました。

日本がGHQに占領されている7年間、日本国民は国歌を歌うことも、国旗を掲揚することも、組織として集団であつたり、集会を開くことも規制がかけられていました。しかしGHQは、あえて『日教組』の組織結成だけは認めました。そして戦後、この『日教組』は、『日本共産党』と共に活動してきましたし、ソ連を始めとする世界の共産国家とも連携を取ってきました。

こうした一部の共産主義の日本人たちが、「WGIP」という工作活動に加担したわけです。そのために日本人に自虐的な歴史観を植え付ける、ということがこれまで行われてきました。その結果、今も日本の教育は、「日本人としての誇り」を奪うものになってしまっているわけです。

パネルDジャパンで目を外に

そして「WGIP」と共に行われてきたのが、米国立公文書館がすでに公表した機密文書「パネルDジャパン」です。「パネルDジャパン」とは、テレビ、ラジオなどを使い、アメリカの文学やホ

ームドラマ、西部劇などを流すことで、「アメリカこそ民主主義の正義の大国であり、素晴らしい国である」という洗脳工作のことで

す。

ここで一度考えてみてください。もしもある国の国民が、教育では偽の自虐的な歴史を教わり、その一方で、家に帰ってテレビを見たり、映画に出かければ外国ばかり称賛されたら、果たしてその国の人々の心はどうなるでしょうか？その国の人々の関心は祖国に向くでしょうか？そして祖国や政治に関心が無ければ、「政治の裏側」や「コロナ茶番劇」に気づかないのは、当然と言えば当然ではないでしょうか？

私たちを「家畜」と見なす彼らが、私たちから搾取するためには、私たちを眠らせ続ける必要があります。そして私たちを眠らせ続けるためには、教育やマスコミを使って、「政治的に無関心」にさせる必要があります。

私たちを「政治的無関心」にさせるためには、私たち日本人から「日本人としての誇り」を奪い取らなければなりません。最終的に「日本人としての誇り」を奪い取り、「日本はダメな悪い国、外国は素晴らしい国々」と心の底から思い込ませるために、「東京裁判」と「WGIP」と共に、「パネルDジャパン」が行われたわけです。

つまり彼らは、政治的力を使い、教育を使い、一部の日本の共産主義者を使い、なおかつマスコミも多用してきたわけです。

イングランドの名門サッカークラブで長年監督を務められ、『名古屋グランパス』の監督としても活躍されたアーセン・ベンゲル氏は、私たち日本人に対して、次のように述べています。

「日本ほど素晴らしい国は、世界中のどこにもないだろう。」

これは私の確信であり事実だ。問題は、日本の素晴らしさ・突出したレベルの高さについて、日本人自身がまったくわかっていない事だ。おかしな話だが、日本人は本気で、日本はダメな国と思っ

いる。

最初は冗談で言っているのかと思ったが、本気とわかって心底驚いた記憶がある。信じられるかい？

こんな理想的な素晴らしい国を築いたというのに誇ることにすらしない。本当に奇妙な人達だ。しかし我々欧州の人間から見ると、日本の現実には奇跡にしか思えないのである。」

私たち日本人が、アーセン・ベンゲル氏から見て、「奇妙な人たち」に見えてしまうその理由は、「WGIP」と「パネルDジャパン」という洗脳工作が行われてきたからです。

「MKウルトラ」という洗脳は事実

国際銀行家や中国共産党が、日本人を眠らせるために行っていること、それはまさに「洗脳」とも言えます。

たとえば中国共産党が多くの人々に対して、暴力を振るい、殺戮を行い、そして「洗脳」を行っていることは有名な話です。なぜなら中国政府は、「教育」では「かつて日本人は南京大虐殺を行った愚かな民」と嘘の歴史を教え込む一方で、「マスコミ」や「ネット」において、「中国国民が民主化のために立ち上がった天安門事件」を報じたり、語ることを禁じているからです。

その他にも中共は、「政治権力」を最大眼に駆使して、ウイグル自治区において、ウイグル人を何百万人も収容所に閉じ込めて、暴力と電気ショックを用いて洗脳しております。もちろん中国政府はこの収容所について、「過激思想を再教育するための施設」と世界に説明しています。この暴力的な洗脳施設は、どうやらチベットなどにもあるようです。

しかし人々に対して洗脳を行っているのは、何も中国共産党だけではありません。実は国際銀行家に侵略された米国も、実は同じように暴力と電気ショックを使って、洗脳を行ってきたのです。

ロスチャイルド家やウォーバーグ家がナチスを支援していた可能性、あるいはブツシュユ家やハリマン財閥がティッセン財閥を通じてナチスを実際に支援していたことについてはすでに述べましたが、実は金融侵略されたアメリカが、ナチスとの怪しい関係であったことは歴史的事実です。なぜならアメリカは、すでに第二次大戦中から、ナチス・ドイツの優秀な科学者たちを戦争犯罪に問うことはなく、密かにアメリカに亡命させていたからです。

つまりこういうことです。彼らは、原爆投下という自分たちの罪については何も反省することなく、日本人が「南京大虐殺」を行ったことに対して、多くの日本人を戦犯として処刑しましたが、しかしその一方で彼らは、「ホロコースト」に関わったナチスの優秀な科学者たちを何も戦犯に問うことなく、密かに亡命させて、働かせていたわけです。このナチスから優秀な科学者をアメリカに亡命させる作戦のことを、「ペーパークリップ作戦」と言い、すでにこの作戦も歴史的事実です。

つまり「ナチスの持つ悪魔性」が、アメリカに見事に引き継がれたわけです。そのアメリカの悪魔性の決定的な証拠の一つに、「MKウルトラ計画」というものがあります。

ドナルド・ユーン・キャメロン博士という人物は、「世界精神医学会」の会長も務めていました。そして彼は「人間の脳にLSDの投与や電気ショックを与えて白紙の状態、無意識の状態にして、その状態の中で命令を下げば、人間をマインド・コントロールできる、つまり人々を洗脳できる」と考えました。そしてこのドナルド・

ユーイン・キャメロン博士を中心に、アメリカとカナダの両国のあいだで、「暴力と電気ショックを使った洗脳実験」、「恐ろしいインド・コントロール実験」が繰り返されました。

この恐ろしい実験の名を「MKウルトラ計画」と言います。「MKウルトラ計画」は、CIAが極秘に実施していた非人道的な洗脳実験のコードネームで、1950年代初頭から少なくとも1960年代末まで、被験者にはまったく内緒で行われました。1973年、当時のCIA長官リチャード・ヘルムズという人物が関連文書の破棄を命じたものの、辛うじて残されていた数枚の文書が、1975年にアメリカ連邦議会で初公開され、そして世間を騒がせました。

ですから「アメリカとカナダの両国でMKウルトラ計画という洗脳実験が行われていた」ということも、すでに公然たる歴史的事実なわけです。

しかもこの「MKウルトラ計画」と密接に関わっていたのが、実はハリウッドでした。本小冊子ではページの都合上、詳しくは述べられませんが、実はハリウッドには巧妙で狡猾な洗脳工作がたくさん組み込まれており、彼らは大衆を洗脳するにあたり、ハリウッドを巧みに利用してきたのです。だからかつて『ビートルズ』のジョン・レノンも、そのことに気づいて、こう言ったのです。

「社会は狂人によって動かされている。キチガイじみた目的を実現するために。」

僕はこのことに16歳とか、12歳とかずっと幼い頃に気づいたんだ。

だから自分の人生を通じて、このことを違った方法で表現してきた。僕が表現していることはいつも同じことだった。でも、今日は言葉にして示そう。『僕たちは偏執狂者たちによって、偏執狂者の

目的を成就するために支配されている』とね。

イギリス政府、アメリカ政府、ロシア政府（ソ連）、中国政府が実際にやろうとしていること、その方法や目的を紙の上に書く事が出来るならば、彼らが何を行なっているか僕はぜひ知りたい。

彼らはみんな気違いなんだ。でも、それを表現すると、僕は気違い扱いされてきつと消されてしまうだろう。

これこそが気違いじみた現実なんだ」

彼らの「マスコミ思想」は家畜思想

彼らは、政治的な力を使い、教育を使い、マスコミを使い、共産主義者をも使って、私たちを誘導しようとするわけですが、その中でも私たちを誘導するにあたり、マスコミがかなり大きな役割を果たしていると言えるでしょう。

すでに述べましたように、戦前の日本では普通に新聞でも「ロスチャイルド」の名前が載っていました。しかし戦後の日本では、マスコミは「ロスチャイルド」の名を語らなくなりました。それはなぜでしょうか？

その秘密を探る必要があります。そしてその謎を探り、彼らの洗脳計画を知るためには、彼らの「マスコミ思想」を学ぶ必要があります。

たとえばかつてアメリカに、ウォルター・リップマンというユダヤ移民三世がいました。この人物はジャーナリズムで最も権威あると言われている『ピューリッツァー賞』を、2回も受賞されて「ジャーナリズムの鑑」とまで称されていました。

しかし彼は、自身の著書『世論』の中で、我々大衆のことを「大

きな獣」とも、「困惑した群れ」とも評していました。彼は書籍の中で次のように述べています。

「大衆（マス）に対して、自分たちが民主的な権力を行使している
と幻想を抱かせなければならぬ。この幻想はエリート層によって
支配されている大衆の同意（意見・世論）を、作り出すことによっ
て形成されなければならない。」

つまり、アメリカの「ジャーナリストの鑑」と称された人物が、
「民主的な権力は幻想であり、大衆には幻想を抱かせておかなけれ
ばならない」と述べていたわけです。

また「プロパガンダの専門家」に、エドワード・バーネイズとい
うユダヤ系アメリカ人がいました。この人物も「広報の父」と呼ば
れ、広報活動とプロパガンダの専門家であり、『ライフ誌』では、
「20世紀最も影響力のあるアメリカ人100人」にも選ばれてお
ります。

彼は『プロパガンダ』という自身の書籍の中で、我々大衆につい
て、「不合理な本能に従って動く群れ」と表現して、ウォルター・
リップマンと同じように、こう述べておりました。

「世の中の一般大衆（マス）がどのような習慣を持ち、どのような
意見を持つべきかといった事柄を、相手にそれと意識されずに知性
的にコントロール（誘導）することは、民主主義を前提とする社会
にとって非常に重要である。」

この仕組みを大衆の目に見えないカタチでコントロール（誘導）
することのできる人々こそが、『目に見えない統治機構』を構成し、
真の支配者として君臨している。」

『世論』という書物を書き、「ジャーナリストの鑑」と称された
ウォルター・リップマンにしても、『プロパガンダ』という書物を

書き、「広報の父」と称されたエドワード・バーネイズにしても、
共にユダヤ人を自称しております。そして彼らの言葉の中には、や
はり『タルムード』の「家畜思想」を連想させるものがあります。
ちなみにユダヤの正統な教え『旧約聖書』には、「汝、偽ること
なかれ」とあります。しかし『タルムード』には、はつきりと「ゴ
イムには常に偽りを伝え続けよ」と記されております。すなわち彼
らからすれば、「獣たちに本当のことなど何も教えなくて良い」と
いうわけです。

そして実際に、「ジャーナリストの鑑」とか、「広報の父」と呼
ばれた自称ユダヤ人たちが、「支配されている大衆の意見、世論を
作り出す」とか、「知性的にコントロール（誘導）することが非常
に重要である」と述べているわけです。

たったこれだけの事実を見ても、新聞に「ロスチャイルド」の名
前が載らなくなった理由が、良く分かります。

彼らは通信社からマスコミを握る

共産党思想に洗脳された中国政府は、人々に暴力と電気ショック
を使った「洗脳」を行っているわけですが、しかし国際銀行家にも
密かに、「MKウルトラ」という「洗脳計画」があり、やはり暴力
と電気ショックを行ってきました。そして彼らが持つ「マスコミ思
想」は、明らかに『タルムード』思想に酷似しております。

では、彼らはマスコミを使って、具体的にどのようなカタチで、
私たちに対して、「洗脳」を行っているのでしょうか？この秘密を
知ることによって、「コロナの茶番劇」が見えてくるのです。

そしてその秘密を知るためには、やはり「通信社」というものを

押さえる必要があります。

通信社とは「情報の根源」にあたるものです。この通信社の記者が、取材を行い、様々な情報を基に記事を執筆し、そして新聞・テレビ・ラジオといった各メディアに配信します。もちろん新聞社やテレビ局にも、通信社と同様に記者がおりますが、しかしそれでも「効率的に情報を得るため」に、新聞やテレビは通信社に頼って記事を書き、ニュースを流すのです。だから通信社は情報の根源なのです。

1815年の『ワテルローの戦い』で、ネイサン・ロスチャイルドが「情報を誰よりも早く入手した」ことから、彼らがナポレオンに勝ち、イギリスにも勝利して、『イングランド銀行』を手中に収めたように、彼らは「情報」というものの価値を知り尽くしております。

「家畜に真実を教える必要はないが、しかし情報は金である」、実はそれが彼らの思想なのです。

中国共産党が暴力を背景に13億もの国民に情報封鎖しているように、実は国際銀行家も莫大な富を背景に情報封鎖を行っているわけです。

そしてその「情報封鎖」を行う手段として、彼らは「世界の大手通信社」を独占支配しております。といっても大手通信社は、ほんの数社しか存在しておりません。ですから莫大な富を持つ彼らからすると、「情報の根源」を抑えて、私たちを誘導し、コントロールすることは、実はそれほど困難なことではなさそうです。

ユダヤ人を自称しているロスチャイルドの支援のもとに、同じく「ユダヤ人」を自称しているフランス人のシャルル・ルイ・アヴァスという人物によって、1835年に『アヴァス通信社』が設立さ

れました。『ワテルローの戦い』から二十年後のことです。この『アヴァス通信社』が、今なお存続している世界最古の大手通信社『AFP通信』の基になります。

ロスチャイルド一族の狡猾なところは、こういふところにあります。つまり「誰かを支援して何かをさせる」ということです。すでに述べましたように、ジェイコブ・シフの『クーン・ローブ商会』を通じて、ロックフェラー一族を石油王、巨大財閥へとの上上げたように、彼らは誰かに何かをさせて大儲けさせながら、自分たちの勢力へと取り込むのです。

つまり彼らの手口は、国と国とは争わせ、戦争が起これば両国にお金を貸し、ナチスや中国のような独裁国家は陰から支援して、そして誰かにビジネスをさせて巨大にし、自分たちの勢力へと取り込んでいくやり方、それが彼らなのです。ですから世界的なグローバル企業というのは、すでに大半が彼らの仲間になってしまっております。

ロスチャイルドの支援によって誕生した『アヴァス通信社（現AFP）』の従業員であり、なおかつ「ユダヤ人」を自称しているポール・ジュリアス・ロイターという人物によって、1851年にイギリスで『ロイター通信』が設立されました。現在は『トムソン・ロイター』と名前を変えています。

そして複数の新聞社が1846年に、『AP通信社』を立ち上げましたが、その後、この通信社は石油王ロックフェラーの手に落ちます。

金融ニュース世界一の『ロイター』、一般ニュースで世界一の『AAP』、最古にして老舗の『AFP』、実はこの3社の通信社だけで、世界のニュースの9割を独占している、と言われております。これ

に続いて『UPI』を入れて、「世界の四大通信社」と呼ぶこともありませんが、この『UPI』という通信社も、もちろん自称ユダヤ人が関わっております。

日本の大手新聞は『日経』、『読売』、『毎日』、『産経』、『朝日』の五紙ですが、これらの新聞は、20ページから40ページ程度で、その中で国際政治を取り扱っているのは、どの新聞もわずか2ページから4ページ程度です。しかしさらに最悪なことに、どの新聞も載せている国際政治の情報はほとんど同じで、なおかつ同じ順番でニュースを載せていることも少なくありません。

なぜそんなことになってしまふのか？簡単なことです。日本のこれらの大手新聞社に、国際政治の情報を提供している『AP』や『ロイター』といった通信社が、そもそも「ユダヤ人」を自称する者たちが経営しているからです。

「情報の根源」である通信社が、彼らの手に握られているだけでも、私たちが「真実」を知ることが困難であるというのに、そればかりか実は大手新聞社そのものが、彼らの手に握られてしまっております。

これを考えると、ますます「家畜思想」を持つ彼らが、私たちがコントロールすることが簡単になってしまいます。

たとえばアメリカで権威ある大手新聞『ニューヨークタイムズ』を所有するサルツバーガー家は、やはり「ユダヤ人」を自称しています。

『ワシントンポスト』も、「ユダヤ人」を自称するユージン・メイヤーにより買収され、後に娘のキャサリン・グラハムに受け継がれました。彼女は2001年に亡くなりましたが、『ニューズウィーク』の所有者でもあり、「メディアの女王」とまで呼ばれていま

した。

実はアメリカの大手新聞というのは、すべて彼らが所有しております。

しかも新聞や雑誌などの功績に贈られる「ピュリッツァー賞」までも、その原型を築き上げたのは、やはりヨセフ・ピュリッツァーという「ユダヤ人」を自称する者です。

私たちは、「情報の根源」である通信社を彼らに握られ、大手マスコミまで握られることによって、真実を隠蔽され、情報封鎖されて、そしていつの間にか誘導されていたのです。

プレスコードは生きている

では、彼らはどのようにして、マスコミを使って、私たちに日本人に対して、真実を隠蔽しているのでしょうか？

終戦から約一か月後の1945年9月19日に、GHQによって「プレスコード」が發布されました。5700人も日本人が雇われ、新聞、ラジオへの検閲が始まったのです。

「プレスコード」が敷かれ、検閲が始まったことで、『朝日新聞』は、2日間の業務停止命令を受けました。なぜなら『朝日新聞』は、1945年9月15日と17日付の2つの記事の中で、アメリカが行った原爆投下を批判したり、アメリカ兵による婦女暴行事件を書いたからです。

実はマッカーサーが厚木に降り立った1945年8月30日から、日本各地において、米兵による強姦事件が発生しました。正確な数字は不明ですが、占領初期のたった一カ月の間に、少なくとも未遂を含んだ強姦事件が37件、その他の不法行為は945件を数

えました。

この『朝日新聞』の営業停止から、日本のマスコミは真実を語れなくなりました。「言論の自由」が失われた瞬間でした。

なぜなら「事後検閲」であったために、新聞や書籍を発行した後にも、もしもGHQから「その記事はNOだ！」と言われたら、営業停止となると共に、紙代、印刷代、輸送代などによって、新聞社会側に莫大な損害になるからです。そのために日本のマスコミは、GHQに怯えながら、ビクビクしながら、戦々恐々としながら報道しなければなりません。これを機に、マスコミとして真実を伝える勇気が、日本のマスコミの間から完全に削がれてしまったのです。

GHQによる7年の占領期間中に傷害を負った者は3012人、殺人事件は2536件、少なくとも3万件以上の強姦事件が発生されたとされています。しかし「プレスコード」が敷かれているために、これらの占領軍による犯罪行為を、新聞、テレビやラジオは語ることはできません。こうして軍事的な強制力によって「言論統制」が行われ、日本から「言論の自由」が消えたわけです。

では、GHQ占領軍が1952年に日本から去ることで、日本には「言論の自由」が戻ったのでしょうか？

現在の日本のマスコミには、真実を伝える勇気が取り戻されたのでしょうか？

とんでもないことです。なぜならGHQ占領軍は、在日米軍というカタチで、そのまま日本に在留したからです。

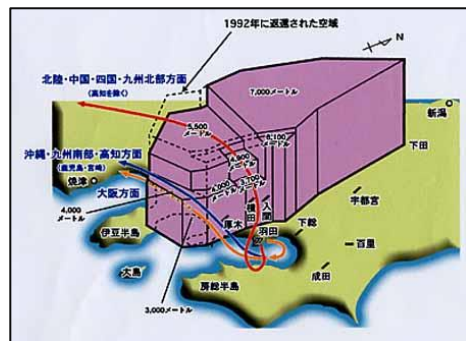
「日本人としての誇り」を奪い取られた多くの日本人が気がついていないことですが、他国の軍隊が駐留する国家というものには、「自分たちで国を経営する主たる権利」というものがありません。すなわち日本は「主権国家」ではないのです。

たとえば先の敗戦より、実は日本の首都東京の上空は、日本の領土であって、日本の領土ではありません。これを「横田空域」と言います。「横田空域」とは、在日米軍は駐留する横田基地が航空管制を行っている空域のことで、1都8県にも広がり、最高高度7000メートルに達する巨大な空間のことです。日本の航空機は「横田空域」を絶対に通過できないわけではないのですが、通過するためには米軍の許可が必要で、なおかつ便ごとに許可が必要であることから、とても厄介であります。そうしたことから成田や羽田を離着陸する民間機は、この「横田空域」を常に迂回しております。

こうした日本政府ではなく、米軍に管制権がある空域が、日本全国には8カ所、沖縄には20カ所存在しております。首都圏の上空が、外国軍に支配されている状況は異常です。

いや、空だけではなく、土にも似た部分があります。世界は残念ながら、未だに核兵器をはじめとする軍事力に基づいて動いており、日本は防衛力を在日米軍に頼り切っている状態にあります。

思想的に間違っている中国共産党から日本を守るには、思想的に間違っている国際銀行家に侵略された米国の軍隊に頼らなければ、日本は存続できないわけです。もちろん中国人にも良い人はおり、米兵一人一人にも良い人はおり、自衛隊も頑張ってはおりますが、しかし確かに日本人は、米兵に護ってもらっている状態なわけです。そして1952年4月28日に発効した『日米安保条約』を結ぶ際に、アメリカのジョン・フォスター・ダレス国務省顧問は、次の



ことを最大目的として述べました。

「我々が望む兵力を、（日本国内の）望む場所に、望む期間だけ駐留させる権利を確保すること」（1951年1月26日）

こうしたことが『日米安保』の最大目的であったことから、日本に米軍が駐留するにあたり、「全土基地方式」というものが取られました。「全土基地方式」とは、米国は日本の好きな場所に、米軍基地、あるいは演習区域を置くことができるシステムのことです。つまりGHQ占領中に日本全国に置いた米軍基地を、そのまま使い続けられるようになるばかりか、好きな場所に移設することまで米国側に権利が与えられてしまったのです。

ですから実はほとんどの日本の「主権」はアメリカにあり、そのアメリカもまた彼らに蹂躪されております。だからこそ先の敗戦は日本人にとつて恐ろしいことであつたのです。

すなわち「プレスコード」は今も生きており、その結果、日本のマスコミというのは、どこもかしこも「法律を破る会社」になつてしまいました。なぜなら日本の「放送法」第四条には、次のようにあるからです。

二 政治的に公平であること。
三 報道は事実をまげないですること。
四 意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること

単純に言つて、現在の日本のテレビ新聞は、自民党といった権力にすり寄つているために、政治的には何ら公平ではなく、特にコロナ問題では完全に事実をねじ曲げて報道しており、なおかつ現在、日本国民を苦しめているコロナ問題において、多くの科学者、有識者たちから、様々な異なる意見が述べられているというのに、それらの意見は完全に無視して、片方の意見だけを報道しております。

それはつまり日本のマスコミは、「放送法」に違反している、ということなのです。

使われた日本人たち

在日米軍の在留が、なぜ日本から「言論の自由」を奪い、マスコミを犯罪会社へと変えてしまうのか？

これを考えなければなりません。

世界が未だに核兵器および軍事力に基づいて動く中で、日本は在日米軍に守ってもらつている状況にあります。そのために「日米合同委員会」というものが毎月、東京都港区にある「ニュー山王ホテル」という所で1回、さらに外務省が設定した場所で1回、毎月合計2回、開催されております。

実は日本の最高権力は、先の敗戦以来、この「日米合同委員会」にあつたのです。なぜならこの会議で決められたことを、日本政府が覆すことはできないからです。

つまり「先の大戦で、日本が米国に敗れた」ということは、米国が1871年に株式会社化したかのごとく、日本の政治権力が、国際銀行家たちに奪われてしまったことを意味していたわけです。

ですから戦後の日本の「政治家」と「マスコミ」は、常に米国の顔色を伺いながら、なおかつ米国に付度そんたくを続けてきました。

先の大戦で日本が敗れ、東條英機が戦犯として処刑された翌日の1948年12月24日のクリスマス・イブに、戦後の『自民党』を率いていく岸信介、日本のテレビ界を牽引していく『日本テレビ』の正力松太郎、戦後の右翼大物の児玉誉士夫が、CIAの工作員として釈放されました。

「自民党の岸信介がCIA工作員であつた」、これは変えること

のできない歴史的事実です。なぜならこのことについて、すでにアメリカが公式文書で認めているからです。それは日テレの正力松太郎も同様であり、児玉誉士夫にいたっては、「自分はCIAのエージェントだ」と、人によく話していたそうです。

たとえば2000年にアメリカでは、「日本帝国政府開示法」という法律が制定されました。この法律によって、第二次世界大戦における日本の戦争犯罪に関する未公開文書が開示されるようになりました。そして早稲田大学の有馬哲夫教授はアメリカに渡り、474ページにも及ぶファイルを入手しました。

そのファイルの中には、元警察官僚で大物政治家でもあり、『日テレ』を設立した正力松太郎がCIAと協力して、日本中に原発を建ててきたことが明らかになりました。実は今、日本中に原発があるのは、日本人の意志によって建設されたのではなく、CIAから正力松太郎への指示であり、その指示通りに『日本テレビ』が「核エネルギーの平和活用」という宣伝を行って、日本国内に「原発世論」を築き上げたからなのです。

実はかつての日本人は、広島と長崎への原爆投下、「第五福竜丸被ばく事件」などによって「核嫌い」になっていました。「第五福竜丸被ばく事件」とは、アメリカが行った水爆実験でマグロ漁船が巻き込まれ、22名の日本人が被ばく、死亡した事件です。こうしたことから日本人が「核嫌い」になっていたにも関わらず、彼らは正力松太郎を巧みに使って、見事に日本国民を誘導することに成功したわけです。

まさに「ジャーナリストの鑑」と称されたウォルター・リップマンの言葉を思い出します。「大衆（マス）に対して、自分たちが民主的な権力を行使していると幻想を抱かせなければならない。この

幻想はエリート層によって支配されている大衆の同意（意見・世論）を、作り出すことによって形成されなければならない。」

ちなみに原発の燃料であるウランは、ロスチャイルドが完全に抑えております。こうして考えてみると、正力松太郎と『日本テレビ』は、日本人のために原発を建てたのではなく、ロスチャイルドのために建てた、という見方もできます。

このように彼らは、日本の共産主義者たちを使って、「WGIP」に協力させるのみならず、その他にも、戦後の政治を取り仕切る自民党の岸信介、テレビの重鎮である正力松太郎、右翼の大物の児玉誉士夫、こうした日本人をも巧みに利用して、見事なまでに日本人を誘導してきたわけです。

ちなみに日本の通信社として『共同通信社』が1945年11月1日に設立され、『時事通信社』も、やはり同じく1945年11月1日に設立されました。「日本にも通信社があるならば、ここを情報源として新聞やテレビに真実が伝わり、日本のマスコミも真実を報道してくれるのでは？」、そのような淡い期待を持つ方もいるかもしれません。

しかしこれらの占領期間中と同時に設立された通信社は、『AFP』、『ロイター』、『AP』、『UPI』といった四大通信社と業務提携し、世界の大手通信社から情報をもたらしている状態です。私の目からすると、占領期間中に、同じ日に設立されたこれらの通信社は、「日本にも真実を伝える通信社がある」と、日本人に錯覚させるために存在している、単なるダミー会社にしか思えません。なぜなら日本の現状は、テレビや新聞がまったく真実を報じず、誘導のみを行っているからです。

日本政府の正体

戦後の日本の政治を作ってきたのは、まぎれもなく自民党であり、そしてその中でも「米国寄り日本」を作ってきたのが自民党の「清和会」というグループです。

ザツとでかまいませんので、どうか清和会のメンバーをご覧になってください。岸信介、佐藤栄作、福田赳夫、中曾根康弘、森喜朗、三塚博、塩川正十郎、小泉純一郎、竹中平蔵、尾身幸次、安倍晋太郎、安倍晋三、福田康夫、麻生太郎、中川秀直、町村信孝など・・・元A級戦犯からノーベル平和賞受賞者まで、実に様々な人が名を連ねています。

この自民・清和会の中で逮捕されたり、辞職に追い込まれたりした政治家は一人もなく、むしろ佐藤栄作にいたってはノーベル平和賞をもらい、またその息子たちも皆が皆、自民党の幹部になっています。

その一方で、この清和会と対立する立場にあり、米国追従隷属の日本ではなく、日本が独自路線を行くことを望み、それと共に「少し中国寄り」とも批判を受ける自民党「経世会」のメンバーを、ザツとでかまいませんのでご覧になってください。田中角栄、竹下登、金丸信、中村喜四郎、小淵恵三、鈴木宗男、橋本龍太郎、小沢一郎、二階俊博などです。

この経世会のメンバーは皆が皆、ロッキード事件、リクルート事件、佐川急便献金、ゼネコン汚職などによって、東京地検特捜部から逮捕されており、失脚させられており、小淵元首相にいたっては謎の急死を遂げており、彼の娘さんも失脚しております。小淵元首相の急死の後、清和会の森政権が誕生し、85代、86代内閣総理大臣を務め、さらにその後は、やはり同じく清和会の小泉首相が8

7代、88代、89代と内閣総理大臣を務めました。

このように「自民党」と一言で言っても、様々な派閥があり、様々な人がおり、けっして一枚岩ではなかったのです。

そしてすでに述べましたように、ロスチャイルドは戦争の際には、両国にお金を貸して儲ける、そんな頭脳の持ち主です。

たとえばサッカーの試合で、AチームとBチームのどちらかを所有していれば、試合に影響を与えることはできません。しかし片方のチームだけ持っていたところで、それでは試合そのものを支配することはできません。しかしもしも両チームを所有することができれば、試合そのものを支配することができます。観客がどれだけ熱狂しようが、観客が盛り下がろうが、そんなことには関係なく、試合を所有し、支配することができ、それが彼らの思考回路です。それが「通貨の発行権と管理権さえあれば、誰が大統領や総理大臣になり、どんな法律を作ろうが構わない」というロスチャイルドの思想です。

これと同様に、『自民党』と『日教組・日本共産党』が、「右だ、左だ」と綱引きを続けて、国民が一喜一憂しているその間に、日本はますます彼らによって歪められてきたわけです。ですから自民党・経世会でも二階俊博のように、親中を突き抜けて荒国レベルまでいくと、彼らからすれば活用し易く、かえって安泰なのかもしれません。あくまでも我々は「家畜」ではなく「人間」ですが、しかし確かに自民党議員たちの中には、名誉欲や金銭欲と引き換えに、まるで「家畜」を追い回すシープドッグ、犬として働いてきた者たちがいるわけです。

彼らと暴力団の怪しい関係

結局、日本は先の大戦に敗れて、国際銀行家に侵略されることよって、金融植民地にされてしまったわけです。その証拠を三つあげましょう。

現在の日本では、数年おきに消費税が上がっていますが、実は政府は『経団連』や『経済同友会』の意向を受けて、消費税は16%、25%と、さらなる増税を行おうとしています。消費税を上げる代わりに、企業が支払う法人税を下げれば、中小企業が潰れて大企業だけが一人勝ちするからです。コロナでお金をばらまいていますから、「消費税が20%、30%にあがる」という話もあります。

しかし国会で議論している税金は、タテマエ予算の「一般会計」ばかりです。「一般会計」とは、国民が支払う税金、つまり税収が約50兆円、政府の借金（赤字国債）が約50兆円です。しかしその背後にあるホンモノ予算「特別会計」については、まったく議論されていません。

その額は「一般会計」が約100兆円であるのに対して、「特別会計」は約400兆円です。ですから実にその額は4倍です。「一般会計」と「特別会計」は複雑に、相互に行ったり来たり、繰り入れ代えられているために、日本の国家予算の純計額は、実は約240兆円なのです。

2001年、国会の予算委員会において、民主党の石井紘基議員が、当時の宮澤喜一財務大臣に、「特別会計がいくらになっっているかご存知ですか？」と訊ねると、宮澤大臣は「二度調べて〜」と、ただ慌てて語るだけで、何も答えられませんでした。

日本の本当の国会予算である「特別会計」は、複雑怪奇になっているために、一般の議員はおろか、財務大臣でも全体を把握するこ

とが困難なわけです。

そこで石井紘基議員は、憲法で認められている国会議員が持つ権利、「国政調査権」というものを使って、「特別会計」を徹底的に調べあげました。そして2002年、石井議員は「特別会計」がどうなっているか、どこでどのような使われ方をしているのか、それを国会で明らかにしようと思いました。彼は周囲の人々に、「これで日本がひっくり返る」と話していたそうです。すると国会で「特別会計」を明らかにするその三日前に、彼は刺されて殺されてしまいました。

彼を殺したのは、「右翼」を標榜する在日朝鮮人の暴力団員である尹白水です。その犯人は、刑務所の中でテレビの取材を受けて、「4500万円をもらって殺害を頼まれた」と明確に答えておりま

す。

米国のジャーナリストのデヴィッド・カプラン、アレック・デュブロという2人は、1986年に、日本のヤクザと右翼をテーマにした『Yakuza』という本を出版しました。その書籍の中で、彼らは次のような驚くべきことを述べています。

「戦後、GHQ占領軍は、地主制度、財閥、軍部と共に、ヤクザも解体すべきであった。

しかしGHQ占領軍はそれをせずに、ヤクザの社会的な存在を容認すると共に、さらにヤクザが不法に勢力を拡大しようとするその動きを黙認したり助長したりもしてきた。

つまり戦後のヤクザはアメリカによって生まれた。これが本書を書く動機であった。これを証明する証拠や資料は、米国立公文書館の機密解除文書から得た」

信じがたいことは重々、承知しておりますが、米国のジャーナ

リストが「戦後の暴力団はアメリカによって生まれ、育てられてきた。その証拠は米国立公文書館の機密解除文書にある」と述べているわけです。

たしかにGHQは、日本の軍部から、財閥から、地主から、右翼団体、文化にいたるまで、何から何まで破壊し尽くしましたが、なぜか暴力団についてだけは黙認いたしました。

そして日本の心ある政治家が、日本の本当の税金・特別会計の真実について、国会で語ろうとすると、右翼を標榜する暴力団員に殺害されてしまうわけです。

そして実際に石井紘基を殺害した暴力団員が、「殺害を頼まれた」とはつきり述べているわけです。

ですからこれらの話を総合して考えてみると、米国のジャーナリストの「戦後のヤクザはアメリカによって生まれた」という言葉の意味がよく分かります。

日本は金融植民地

なぜ石井紘基議員は殺害されなければならなかったのでしょうか？それは、特別会計はどこに消えているか、それを探ることで見えてくるでしょう。なぜなら「特別会計を盗んでいる者たちが、お金を払ってヒットマンを雇った」と考えるのが普通だからです。

石井紘基元議員の娘さんの石井ターニャさんは、ダンボール数十個にもおよぶ父の遺品である書類の山を徹底的に調べて、殺された父が何を調べ、何にたどり着き、国会で何を語ろうとしていたのか、それをまとめあげました。

そして私が個人的に親しくさせていただいているジャーナリス

トで、経済誌『フォーブス』の元太平洋支局長のベンジャミン・フルフォード氏は、その石井ターニャさんを取材しました。

ベンジャミンによれば、それは単純に言って、「究極の無駄遣いによって海外に消えている」と言います。つまりベンジャミンのたとえを使うならば、ワンルームの狭い窮屈な家に住みながらも、必要の無い高級な液晶テレビを4台も、5台も無駄に購入しているようなもので、その買い付け先は、すべて国際銀行家の支援を受けている海外のグローバル企業だそうです。

あるいは日本政府は、米国債も大量に買い支えております。「一般会計」で購入した米国債は約150兆円程度ですが、「特別会計」でも米国債を購入し続けているのに、その累計額を日本政府は発表しておりません。これまで石原慎太郎や亀井静香といった政治家たちが、「日本が保有する米国債の累計額は300兆円を超えている」と書いたり、述べたりしてきましたが、やはりその可能性も捨て切れません。

実際に2012年12月26日に、自民党安倍政権が誕生しましたが、年が明けた2013年1月13日には金融ニュースサイトの『ブルームバーグ』が、「安倍政権が米国債を50兆円購入」と報道しております。50兆円という金額は、「一般会計」の税収とほぼ同額です。それだけの米国債の購入は、やはり「特別会計」でなければ不可能でしょう。

しかし彼らの犬と成り果てた政府も、そしてマスコミも、「特別会計」を議論することも、「石井紘基事件の真相」もきちんと報道することもなく、「国家の借金は一千兆円、国民一人当たりの負担は一千万円」などと言って、国民を騙くらかして、増税を行い続けてきました。まさに誘導そのものです。

なぜならば本当は、日本に「国家の借金」など1円も存在していないからです。

すでにご紹介いたしましたように、彼らの思想『タルムード』にはこうあります。「すべての民を喰い尽くし、すべての民より掠奪することは、彼らすべてが我らの権力下に置かれる時に始まるべし」と。つまり日本の政府とマスコミは、私たちを「家畜」と見なしている彼らの犬として、私たちから掠奪する任務を遂行しているに過ぎなかったわけです。

ですから実は、日本は増税する必要などまったくありません。

なぜなら政府やマスコミが、「借金」と呼んでいるものは、実は「国家の借金」ではなく、「政府の借金」だからです。そして「政府の借金」というのは、実はその大半が、国民の資産なのです。

たとえばギリシャやブラジルは、たしかに「国家の借金」であるために財政破綻しました。しかし日本の場合には「政府の借金」であるために、日本政府にお金を貸しているのは、『日銀』や『みずほ』や『東京三菱UFJ』などの金融機関に他なりません。そして『みずほ』や『東京三菱UFJ』といった金融機関にお金を貸しているのは、他ならない私たち国民なのです。

私たち国民は、そういった市中銀行にお金を預けておりますが、預金というのは実は銀行に貸しているのです。そしてお金を借りた銀行は、政府が発行する国債を買い、その利子で利益を出しているわけです。

「国家の借金」と「政府の借金」の違いを家庭にたとえるならば、ギリシャやブラジルの場合は、外の消費者金融からお金を借りたために財政破綻しましたが、日本の場合は、お父さんがお母さんからお小遣いを前借りしているようなものなのです。だから日本は財政

破綻もしないし、本当は増税の必要など、まったく無いのです。

「特別会計を議論せず、この莫大な税金がどこかに消えている」、「消費税の増税などまったく必要ないのに、国民を騙くらかして増税を行い続けている」、「国民の代表として選ばれた政治家が、特別会計の真相を国会で語ろうとするとヒットマンに殺されてしまう」、これらが国際銀行家によって、日本が金融侵略されてしまった動かざる証拠と言えるでしょう。

結局、日本は先の大戦に敗れて以来、国際銀行家の金融植民地なわけであり、私も、これを読まれている貴方も金融植民地に生きていくのです。

報道の自由無き国家へ

先の敗戦から数十年が経過し、90年代に入ると、家畜思想を持つ国際銀行家たちは、日本に対して、さらなる内政干渉を行い始めました。それが「年次改革要望書」です。

つまり彼らは、世界最大のアメリカの軍事力を盾と餌に、「日本をこのように変えろ!」と、次々と命令を下してきたわけです。

その一つが、日本国民の郵便貯金を狙った「郵政民営化」です。郵政が民営化されたことで、郵便局のサービスが向上した面も少しはあるでしょうが、しかし日本郵政と外資系保険会社が提携することで、日本国民が貯蓄していた360兆円にもなる郵便貯金が、実は海外に流れていきました。まさに彼らが望んでいる「掠奪」です。

あるいは「年次改革要望書」によって、「独占禁止法」も改悪されて、「持株会社」が解禁になりました。「持株会社」とは、他の株式会社を支配することが目的で、その会社の株式を保有する会社のことです。「ホールディングカンパニー」(Holding)保持・保

有)とも言いますが、この「独占禁止法」の改悪によって、日本中に「〇〇ホールディング」という名の会社が増えました。そしてこの改悪によって、「会社は株主のもの」という国際銀行家式の考え方が、次第に日本にも沁みついていったのです。

そして「年次改革要望書」による内政干渉によって、ついに「会社法」までもが改悪させられ、「三角合併」が解禁されてしまいました。「三角合併」とは、国境をまたいでの買収であり、「M&A(企業の合併と買収)」の手法のことです。

実は「三角合併」は2006年5月1日に解禁される予定でしたが、日本の大手企業が外資に次々に買収される危険性が高すぎたために、1年間先送りとなったのです。ですから「三角合併」は、予定の一年後の2007年5月1日に解禁されました。しかしその直前の4月27日、金融ニュース『ブルームバーグ』は、こう報じていました。「(これで)日本は世界で一番株式を使った買収がしやすい国になる」と。

2007年5月1日から、日本が買収し易い国になると、外国資本によって、日本の多くの企業が次々と買収されていきました。すると国際銀行家たちは、かつて米国で行ったように、大手新聞社、ラジオ局、テレビ局、映画会社、さらには教科書会社などまで、重要な情報の発信源の株式を買い占めていきました。

日本の大手新聞五紙はもちろん、これらの新聞と提携関係にある『日本テレビ』、『TBS』、『フジテレビ』、『テレビ朝日』、『テレビ東京』、さらには世界最大の広告代理店『電通』も、国際銀行家勢力か、あるいは中国共産党に株式購入されていきました。

世界の情報は『ロイター』などの大手通信社に頼り、GHQが去った後にも、「プレスコード」は生き続けましたが、株式の購入というカタチで日本における「言論の自由」はますます失われていきました。

公共放送の『NHK』は民法とは異なり、受信料金を国民から半ば強引に徴収しておりますから、せめてこの放送局くらいは真実を報道してもらいたいものです。

しかし残念ながら「オリンピック」や「ワールドカップ」の放映などの様々なやりとりの中で、NHKも彼らの手の中に落ちていきました。そのためにいつしかこのNHKこそが、国際銀行家や中国共産党の出先機関として、偏向報道、「フェイクニュース」を繰り返すようになってしまったのです。

こうしていつしか日本は、「報道の自由度ランキング」が韓国よりも、米国よりも低い世界66位となりました。

日本に「報道の自由」が無い理由として、『国境なき記者団』は「マスコミの編集部門が、経済的利益を優先させている巨大なグループの方針に左右され続けている」としています。つまり日本のマスコミたちが、「真実を伝える」ということに対して恐怖しているわけです。

その気持ちも分からなくありません。なぜなら世界では、「パナマ文書」が問題になった時に、記者が爆殺されたり、逮捕されているからです。

このように私たち日本人は「激しいプレスコード」の中で生きております。それは「真実の無い中で、嘘で塗り固められた情報の中で生きている」、そう言っても過言ではないかもしれませぬ。

そして真実を伝えないマスコミと、「日本人として誇り」を奪われ、政治的に無関心にさせられている日本国民が見事に組み合わせることによって、「コロナが茶番である」という真実も、なかなか伝わらない状況にあるわけです。

彼らはネットも支配する

「激しいプレスコードが今も生きている」と知らされても、それでも「ネットがあるのだから、真実はすぐに広まるのでは？」と疑問を感じる人もいるかもしれません。

しかしロスチャイルドが、シャルル・ルイ・アヴァスを支援して、『アヴァス通信社(現AFP)』を設立させ、巨大にし、そしてこの通信社から『ロイター』が生まれてきた歴史を、どうか思い出し、教えてください。あくまでも彼らの手口は、「誰かを支援して、そのビジネスを巨大化させ、そして自分たちの勢力へと取り込んでいく」というやり方なのです。そうやって彼らは、ロックフェラーを支援して「石油王」にすると共に、自分たちの勢力へと取り込んできました。

ですから「ネットがあるから簡単に真実は広まる」と考えるのも早計なのです。なぜならまずお伝えしなければならないこととして、『Google』、『Amazon』、『Facebook』、『Apple』の4社の頭文字を取ったいわゆる『GAFA(ガーファ)』、さらには『Microsoft』を加えた『GAFA M(ガーファム)』は、すでに彼らの手の中にあります。

『Facebook』のマーク・ザッカーバーグがユダヤ人を自称していることは有名な話ですが、彼にいたっては「ロスチャイルド一族では？」という噂までつきまといっています。

『Google』の共同創業者は、セルゲイ・ブリンとラリー・ペイジの2人ですが、セルゲイ・ブリンは「ソ連出身のユダヤ人である」と自称しています。ラリー・ペイジも、「自分の親はユダヤ人である」と語っています。『ニューヨークタイムズ』によれば、2009年に『Google』のセルゲイ・ブリンが、ユダヤ移民

支援協会(HIAS)に100万ドル(約1億円)を寄付しています。

これまで『Google』を、2人の自称ユダヤ人の共同経営者と共に引つ張り、「三頭政治」を行ってきた人物に、エリック・シュミットという男がいます。彼が掲げた『Google』のスローガンは、「Don't Be Evil(邪悪になるな)」でした。しかし2014年、突如、エリック・シュミットは、「Don't Be Evilは愚かなルールだった」と語り、『Google』が中国に協力して、中国国内で検閲していることを公表しました。

それはつまり「『Google』は、中国で民主化運動する者たちを取り締まると共に、ジェノサイドを行っている中国共産党に協力している」ということです。

確かにセルゲイ・ブリンとラリー・ペイジの共同創業者2人は、すでに『Google』のCEOをインド系アメリカ人に譲っていますが、しかし2人は親会社の取締役にとどまり、なおかつ51%の株式と「議決権」を今も持っています。ですから中共に協力する『Google』は、まぎれもなくユダヤ人を自称する者たちなのです。

しかも『Google』のソフトウェア・エンジニアのザック・ヴォーリー氏は、『Google』の「AIプラットフォーム」に政治的な偏見が組み込まれていること、そして『Google』がその「アルゴリズム」を使って、政治的偏見があるその事実を隠蔽していることを内部告発しました。彼は自身の告発が真実であることを証明するために、内部文書950点以上をネットで一般公開しています。

この告発を裏付けるように、トランプ元大統領も、次のようにツ

イートしています。「報告書が明るみになった!『Google』が2016年の選挙で、ヒラリー・クリントンに投票した人数を、260万から1600万へ水増ししていた。この情報は、トランプの支援者ではなく、クリントンの支援者によって公開された!『Google』は起訴されるべきだ。私の勝利は当初考えられていたよりも圧倒的だった」と。

アメリカ大統領というのは、この「地球」という惑星の中でも、絶大な力を持っています。

しかしその権力者を決める選挙において、「『Google』が不正を行っていた」という内部告発者が出たのです。

告発者ザック・ヴォリーによれば、『Google・YouTube』は、自分たちが気に入らないチャンネルや動画は、登録者やアクセスが増えるのを止めているそうです。実際に『YouTube』では、「BAN」と言って、アカウントが削除されてしまうことがあります。

その証拠に、『YouTube』の急上昇ランキングは、いつも幼稚な動画ばかりであり、すでにコロナの真実に関する動画は上げられない状況にあります。

また、たとえ『YouTube』で政治系の動画のアクセスが上がっても、国際銀行家や中国共産党に対して批判的な動画はアクセスが上がらず、さらにこの2つを批判する動画となると、さらにアクセス数は上がらず、チャンネル登録も増えません。

つまり『Google』は、まるで真実があるかのように上手く装っているわけです。表現を変えれば『YouTube』は、「動



画の質さえ良ければアクセス数が増えて、チャンネル登録も増える。アクセスが低く、チャンネル登録も増えないのは、その動画の質が悪く、内容が嘘だからである」と錯覚させているわけです。

あるいは『Twitter』のCEOジャック・ドーシーも、インタビューで「言論の自由」について質問されて、次のように述べています。

「言論の自由を掲げている人たちが、言論の自由を訴えています。が、(言論の自由)は我が社の使命ではない。当社の説明欄にそれ(言論の自由)はない。(言論の自由)はジョークですよ」

普通に、冷静に考えれば、「情報は金」と考えて、政治、教育、マスコミを巧みに使う狡猾な彼らが、「ネットだけは放置する」と考えることのほうが難しいものです。

ですから実のところ『Google』、『Facebook』、『Twitter』も、邪悪なツールにしか過ぎません。このように『GAF A』は、人類の幸福のためにはなく、むしろその反対の目的のため活動しているのです。

だからザック・ヴォリー氏は人類に呼びかけるわけです。「『Google』は危険である、使用を中止せよ」と。なぜ『GAF A』は危険なのでしょう?

たとえばユダヤ人が「ホロコースト」を受けた際、「アウシュヴィッツ強制収容所」に送られるわけですが、その門にはこう書かれています。「ARBEIT MACHT FREI (働けば自由になる)」と。『Google』、『Facebook』、『Twitter』などは、

「頑張れば真実が広まる」と錯覚させているところに、「Evi性」があるわけです。

これらのことから分かりますように、真実がなかなか広まらない

い、その最大の理由は、彼らの手先となっているマスコミが真実を伝えないだけではなく、大勢の人々が利用し、なおかつ信頼している『YouTube』や『Facebook』なども、すでに彼らの手の中にあるからです。

ならば答えは簡単で、『G A F A』を信頼することをやめることです。

貧困計画と共産主義者を増やす

私たちが真実に到達できず、彼らによって見事に誘導されている原因のひとつとして、彼らが築き上げてきた「超格差社会による貧困」があります。

すでに述べましたように、「年次改革要望書」によって、「郵政民営化」や「会社法改悪」が行われたわけですが、その他にも「派遣法の改悪」が行われました。

実は今、日本で派遣社員が増えて、貧困層が増えて、超格差社会となっているその原因は、国際銀行家たちから、アメリカを通して行われた命令・内政干渉が90年代にあったからです。派遣法の改悪は、まぎれもなく「年次改革要望書」に従って行われました。

なぜなら人々が貧しくなり、生活に追われて苦しくなると、政治や経済にまで頭が回らなくなるからです。国民が政治経済について分からなくなれば、ますます国民は、自分たちの国が「植民地状態」に置かれている事実にも気づかなくなります。また、貧困化が進むと人口も減っていきます。

しかしその一方で、貧困化が進んだことで、政治が分からない人が急に政治に目覚め始めると、「平等」を謳い文句にした共産思想に走ることも多々あります。なぜなら共産思想というのは、「平等」

を謳い文句にして、とても耳触りの良い言葉が並べられているからです。共産主義者たちが掲げる「生活環境の改善」、「労働条件の改善」といった甘い言葉は、生活に苦しむ労働者にとって飛びつきやすい言葉です。

ですから実は今、本人も知らぬ間に共産主義者になっていることがあります。たとえば山本太郎率いる『れいわ新選組』の支援者たちです。しかしすでに述べましたように、『共産思想』と『タルムード思想』は表と裏の関係にあります。

彼らは、派遣社員を増やし、貧困化を進めることで、政治経済が分からない人を増やす、あるいは共産主義者を増やして、自分たちの目的を達成させているわけです。

日本人の意識を反らした3S政策

そしてもう一つ、私たち日本人を「政治的無関心」にして、真実を覆い隠すために行われてきたのが、「3S政策」です。

「3S政策」とは、「Screen（映画やドラマ）」、「Sport（スポーツ）」、「Sex（性）」、これらの「3つのS」を用いることで、日本人を政治や経済に対して、徹底的に「無関心」にする工作のことです。

「昭和政治のフィクサー」と名高く、儒学者、思想家でもあった安岡正篤やすひつぐという方が、GHQのガーディーナー参事官（フルネーム不明）から「3S政策」の話を聞いたそうです。儒学者とは、儒教という2600年前の中国で始まった宗教を、学問的な学ぶ学者のことです。

「3S政策は、さすがに信じられない」と思うかもしれませんが。しかしまず安岡正篤氏ほどの著名な方が、ウソをつく理由がありません。また『日本テレビ』の初代オーナー正力松太郎氏が、米国C

IAのエージェントであったことは、すでに米国の公式文書で明らかにされている歴史的事実です。

『日本テレビ』といえば、戦後の日本の野球界をけん引してきた読売グループの一つです。実際に正力松太郎氏は「PODAMI」、日テレは「PODALITION」、読売新聞社「POBULK」、読売巨人軍は「POHIKE」と、CIAのコードネームも明らかになっています。そしてたしかに戦後の日本では、駅という駅に街頭テレビを設置して、プロレスを流して、日本国民をスポーツに釘付けにしました。

そして実際に、現在の日本国民の大半が「3S」にばかり関心が高い一方で、「政治」や「経済」には「無関心」で、隠されて真実に気づいておりません。その結果、日本人は今もなお「沈黙」を続けています。

この日本人の「無関心」と「沈黙」こそ、「日本国民に3S政策が行われてきた最大の証明である」と、そう言えるのではないでしようか。

世間に大きな影響力を持つ人のことを「インフルエンサー」と言いますが、結局のところ戦後の日本では、テレビで活躍したプロレスラーの力道山から、ネットで活躍するヒカキンにいたるまで、真実を語る目覚めた愛国者が、インフルエンサーになることはなかったわけです。

日本人は誘導されて貯蓄が奪われた

これまで述べてきたことから分かるように、私たち日本人は、気づかぬままに誘導されてきました。

たとえば自民党の小泉・竹中が行った「郵政民営化」、これを国民に問う選挙が2005年にあったわけですが、その選挙の時に、自民党が選挙戦略を立てるために依頼したのが、『有限会社スリー

ド』という広告代理店だったと言われております。

そしてこの『有限会社スリード』という会社は、日本国民をA、B、C、Dの四つの層にわけたそうです。図の縦軸は「IQ」、横軸は「小泉内閣がすすめる構造改革に賛成か？反対か？」ということです。

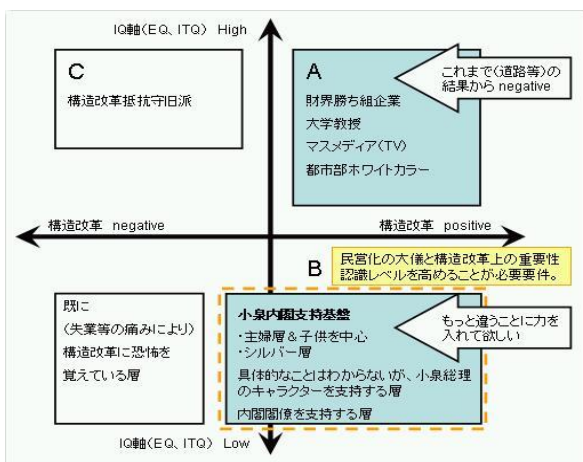
「A層」とは、財界の勝ち組企業、大学教授、マスメディア（テレビ）関係者、都市部ホワイトカラーなどの知的エリート層のことだそうです。「B層」とは、負け組、主婦層や子ども、シニア層、具体的なことや難しいことは分ならず、情報に踊らされ易い層のことです。

また、「C層」とは、保守派のことだそうで、「D層」とはすでに失業状態にいる層のことだそうです。

そして『スリード』というこの会社は、「政治のことはよく分からないB層をターゲットにして、とにかく少し変わった小泉のキャラクターを売りにして、『郵政民営化は善』、『郵

政民営化は善である』と、ただ繰り返し主張すればよい」と、そのような戦略を立てたと言われております。そして実際に、小泉・竹中の自民党は、その戦略でもって衆院選挙を戦い、9月11日の投票日には大勝利をおさめ、郵政は民営化されました。

このように見事に私たち日本国民は、日々、誘導され、貧しくさ



れ、しかも次章で述べますが、実はこうしている今現在も、大虐殺されているのです。

実は自由無き自由の選択だった

「ジャーリストの鑑」と言われたウォルター・リップマンにしても、「広報の父」と言われたエドワード・バーネイズにしても、彼らの「マスコミ思想」は、「大衆に自由があると錯覚させながら、大衆を上手く誘導していく」というものでした。そして実際に私たちは、「言論の自由」があると錯覚しながら、「厳しい言論統制」の中で暮らしていました。

「自由」は、まったくの幻想だったのです。それを証明するにあたり、次の四つの質問に素直に答えて頂きたいと思います。

問1 次の8つの中から、1つを自由に選んでください。

「スキー」「鼻水」「コップ」「温泉」「ゴミ箱」「コーヒー」「冬」「お土産」

問2 それでは次は、今選んだその単語と貴方が「関係ある」と思うものを、次の8つの単語の中から1つ自由に選んでください。

「電卓」「雪」「針」「ティッシュ」「米」「まんじゅう」「牛乳」「電話」

問3 さて、次は問2で選んだその単語を強くイメージして、そして次の8つの中から「関係ある」と感じるものを1つ自由に選んでください。

「大きい」「遅い」「白い」「鋭い」「暗い」「甘い」「赤い」「狭い」

問4 それでは最後に、問3で選んだ特徴に当てはまるものを次の8つの中から1つ自由に選んでください。

「ナイフ」「ピラミッド」「砂糖」「亀」「犬小屋」「宇宙」「皿」「深海」

貴方が選んだものは「砂糖」です。

もちろん魔法でも何でもありません。ここにはトリックがあり、普通に考えると必ず「砂糖」にたどり着く、詐欺的な仕組みとなっているのです。

実は「自由」などというものは、欠片も存在せず、自由は単なる幻想でした。

たとえば一問目では、8つの選択肢があるわけですが、二問目では4つしか選択肢が無くなります。なぜなら最初の二問目の8つの選択肢から、まともに考えれば、二問目の「電卓」「針」「米」「電話」の4つの選択肢は、「関係ある」とは到底思えず、実はこの4つは、ただのダミーだからです。

つまり存在しているだけの「選べない選択」なわけです。

この要領で、二問目に選んだ「雪」、「ティッシュ」、「まんじゅう」、「コーヒー」からは、三問目の8つの選択肢のうち、普通に考えれば「白い」と「甘い」のたった2つの選択肢しかありません。

「たくさん選択肢があつて自由に選択できる」と思いつつも、すでに二択になっているわけです。それはまるで、アメリカ国民が

「民主党」と「共和党」からしか大統領を選べないのと似ています。そして「白い」と「甘い」に当てはまる四問目の選択肢は、「砂糖」だけです。

つまり普通に考えていくと、一問目は8つの選択肢ですが、二問目では4つに減り、三問目では2つに減り、四問目ではたったの1つしか選択肢が無くなるわけです。

たとえ本人が自由に選んでいるつもりでも、実は少しも自由に選んではいかなかったわけです。

しかし私はこの4つの質問の中で、あえて何度も「自由」、「自由」という言葉を使いました。

それは「自由を錯覚させるため」です。なぜなら本当は、「自由」など何一つ欠片も無いからです。存在していない自由が存在していると錯覚させるために、あえて「自由」、「自由」、「自由」と繰り返したわけです。

これと同様に、「言論統制」されている中国や北朝鮮を見て、「日本には言論の自由があって良かった」と勘違いさせておいて、結局のところ日本の「言論の自由」も、単なる錯覚にしか過ぎなかったわけです。

日本人が日々、行っている選択も、先ほどの必ず「砂糖」に辿り着く選択と同様に、たとえ自分から自由に選んでいるつもりであっても、本当は別の誰かによって誘導されていて、知らぬ間に強制的に選ばされているに過ぎなかったわけです。私たちは錯覚の自由の中で強制されていたわけです。

このように彼らは、私たち日本人から、「日本人としての誇り」を奪い取り、「政治」を動かす、「教育」をねじ曲げ、「マスコミ」を操り、「ネット」を駆使して、さらには「貧困」に落とし込み、

そして「スポーツ」や「芸能」に関心を向けさせることで、見事なまでに私たちを誘導してきました。

だから私たちは、「コロナ騒動は演出されたものである」という、とても重要な真実に、なかなか気がつけないわけです。

そして「誘導よりも虐殺が簡単だ」と述べる彼らが今、いよいよ次の段階へと進もうとしております。だからこそ私たちは、「真実」に目覚めて、「常識を逆転」させなければなりません。

これまでも私たちは虐殺されてきましたが、このまま目覚めなければ、今後、さらなる危機が私たちに襲いかかることでしょう。

第三章 その証拠は？

医学という殺人技術

「コロナ騒動は茶番である」ということを説明するにあたり、第一章では「誰か」ということで、国際銀行家と中国共産党、そして彼らの家畜思想である『タルムード』、さらにはこの思想と表裏一体の関係にある共産思想について述べました。

そして第二章では、あえて「何のために？」ということとは後回しにして、「どのような方法で？」というところで、彼らが「政治」を動かす、「マスコミ」を操り、「教育」をねじ曲げ、「スポーツ」や「芸能」に関心を向けさせることで誘導している、ということを書きました。

さて、いよいよ「第三章」では、「コロナが茶番であるというその具体的な証拠」について述べたいと思います。しかし「コロナ騒動は茶番である」という事実には踏み込むためには、まずは「医学の闇」に多少は切り込まねばなりません。

「医学」というものが、完全に人間を病から救い、幸せを目的として築き上げられたのなら、何も問題は無いのですが、しかし実は「医学」にはそうではない部分があります。むしろ「医学の闇」は、相当深いのです。

かつて日本の医師たちがカルテを書く場合、ドイツ語でなければならず、そのためにかつての医師たちは、医学の勉強と共にドイツ語も勉強しなければなりませんでした。つまりかつて医学というものは、ドイツから日本に輸入されていたわけです。

しかし今では、カルテを日本語で書いており、日本の医師たちは、アメリカ式の医学を学んでおります。すなわち今の日本では、「医学」はアメリカから直輸入しているような状態にあるわけです。

では、アメリカの「医学」を確立させるにあたり、大きな貢献を遂げた人物とは、果たして誰でしょうか？

それはロックフェラーです。

「石油王」ジョン・ロックフェラーは、1901年に『ロックフェラー医学研究センター』を設立しました。この研究所には野口英世も在籍しておりました。

その後、この研究所は『ロックフェラー大学』となり、ジョン・ロックフェラーは、その他にもシカゴ大学なども設立しています。これらの大学は、大勢のノーベル生理学・医学賞を受賞してきました。それから、アメリカの医学界において、ロックフェラーを抜きに語ることは出来なんでしょう。

では、ジョン・ロックフェラーとは、どんな人物なのでしょう？彼の息子デイヴィッド・ロックフェラーが、「毛沢東と中国共産党」を大絶賛していたことはすでに述べましたが、デイヴィッド・ロックフェラーは、その他にも1973年に『日米欧三極委員会』というものを設立しております。

『日米欧三極委員会』とは、日本と北米と欧州のこの3つが極となって、協同で世界の経済を促進していくために設立された組織のことです。設立の趣旨だけを聞けば、『三極委員会』は素晴らしく感じますが、しかしデイヴィッド・ロックフェラーと共に、この組織を立ち上げたのは、「誘導より虐殺のほうが簡単である」と述べた、自称ユダヤ人のズビグネフ・ブレジンスキーです。こうしたことから、大富豪にしてアメリカ医学会を築き上げてきたロックフェラー一族の思考を垣間見ることができます。

なぜなら私たちのことを「家畜」と見なしている者たちというのは、はつきり言って、私たちが殺すことに何のためらいもないからです。そのために彼らは、堂々と「医学」というものを使って、大勢の人々の人生を狂わし、さらには命まで奪っております。

「医学を使って人々の人生を狂わし、命まで奪う」、それはこうしている今現在に行われていることです。つまり「誘導より虐殺が簡単だ」と述べたブレジンスキーですが、虐殺は本当に、今まさに行われていることなのです。

その証拠に、『TokyoDDクリニック』の院長を務め、『NPO法人薬害研究センター』の理事長をも務める内海聡氏は次のように話します。

「医者でも看護師でも、僕より性格良い人、可愛い子、たくさんいるんですけど皆、ダメです。」

なぜなら彼らが習っていることがすでに間違いだからです。

彼らは一生懸命、殺人をやっていることを知らない。知っている
とジレンマに陥ってウツになっている」

それではここで、あえて今一度、マルチン・ルターの『ユダヤ人
と彼らの嘘』の中の言葉をご紹介します。

「もし彼ら（ユダヤ人）が我々全員を殺戮する事ができるなら、彼
らは喜んでそうするでしょう。事実、彼らの多く、特に外科医と医
者であるとか称している者達は、キリスト教徒を殺害しているの
です。彼らは一時間、あるいは1カ月で死をもたらす毒を人々に与え、
どのように薬を扱ったらよいのか熟達しているのです」

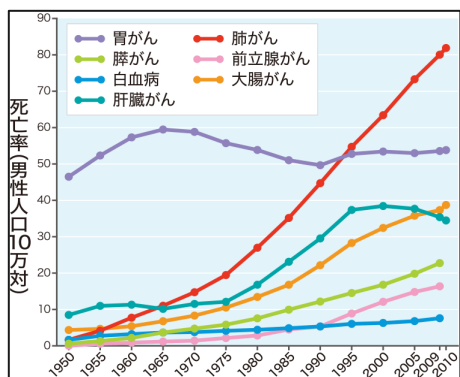
ルターはつまり、彼らは「医学」を殺人の道具にしている、と述
べているわけです。そして実際に医師の内海聡氏も、まったく同様
のことを述べているのです。

「医学」には人の命を救う部分もありますが、しかし彼らの殺人
道具の部分もあり、この見極めは極めて困難を伴うものです。そし
て私も、多くの親戚や友人を、「医学」という殺人の道具によって
殺されてきた者の一人でもあります。

癌治療という闇

では、彼らはどのようにして、「医学」
を使って人々を狂わし、殺めているの
でしょうか？

グラフを見れば分かりますように、日
本では今、癌で亡くなる人は増えに増え
続けております。これは先の大戦にお



る、原爆で亡くなった人よりも実は多いのです。

なぜなら当時の広島市では14万人が、長崎では少なくとも7万
4千人が亡くなりましたが、癌で亡くなる人は年間に約40万人、
一日に約千人だからです。

そしてこれは、実は今現在、日本人に行われている大虐殺に過ぎ
ないのです。なぜなら実は癌は正しい治療をすれば治るからです。

「そんなバカな！」と思われるでしょうが、ドイツのレオナード・
コールドウェルという医師は、次のように豪語しています。「90%
以上の癌は数週間のうちに完治し、手術も放射線治療も化学療法も
必要ない」と。

「本当は癌は治るというのに、毎日千人の日本人が癌で死んでい
る。実は広島、長崎以上の大虐殺が、現在の日本で行われている」、
それが悲しき現実なのです。

そのことをご説明いたしましょう。

たとえば「癌細胞はブドウ糖をエネルギー源とする」、これは1
931年にノーベル生理学・医学賞を受賞したオットー・ワールブ
ルグ博士が解明し、1923年に論文で発表し、すでに証明されて
いる科学的事実です。どうか「癌のエサはブドウ糖である」、まず
これをご理解ください。

しかし日本の癌治療では、なぜか癌細胞のエサであるブドウ糖を
わざわざ癌患者に点滴しているのです。「切る・摘出手術」、「焼
く・放射線治療」、「盛る・抗癌剤」、これらの「癌三大治療」に
よって、癌患者の体力が弱まった時、わざわざ癌のエサであるブド
ウ糖を点滴しているわけです。

「癌細胞のエサのブドウ糖を与える」という矛盾したことを行え
ば、癌細胞が元気になってしまい、癌患者が亡くなっても当然です。

また、「実はビタミンCが癌細胞を殺す」、これもノーベル賞を2度も受賞されたライナス・ポーリング博士によって、1970年に発見された驚くべき癌の治療法です。美容や健康のために数グラムのビタミンCを点滴することがありますが、その数十倍の60グラムの高濃度ビタミンCを点滴することで、実は癌は数カ月のうちに消えていく、というのです。

しかしアメリカで最も権威ある総合病院『メイヨークリニック』の研究者が、一流の科学雑誌に「ビタミンC癌治療は効果がない」と発表しました。そのために、この「ビタミンCによる癌治療」は否定されてきました。

そして「高濃度ビタミンC点滴治療」の代わりに、抗癌剤ばかりが売れて製薬会社を儲けさせ、こうして多くの癌患者が殺されてきたのです。ちなみに一番高い抗癌剤「ペグイントロン」は1グラムで3億3170万円です。

しかし1985年、『アメリカ国立ガン研究所(NCI)』のデヴィタ所長は、米議会において、「分子生物学的に見ても抗癌剤で癌は治せない」と証言しています。実は「抗癌剤では癌は治せない」という主張は、世界中の医師たちが言っていることです。しかしそれでも製薬会社を儲けさせて、特に日本人が大虐殺されてきました。もちろん儲けているのは国際銀行家勢力であり、彼らは金融、軍事、医療、食料、エネルギーなど、人間生活の根源的なものを握っているのです。原発の原料ウランはロスチャイルド、石油はロックフェラーといった具合です。

だからこそ何も考えずに医師の権威に従って、抗癌剤を打つことは危険なのです。なぜなら世界で最初に開発された抗癌剤は、「マスタートダス」と言って、第一次世界大戦中にドイツが開発した毒

ガスだったからです。

「毒ガスを使って、細胞の分裂を抑える」という殺戮にも似た治療法が発見されたわけです。そしてその後の抗癌剤も、基本的には「細胞分裂を抑える」という人体にとって攻撃を行う強い毒物であります。

ですから「抗癌剤」というのは、毒薬、劇薬です。そのために抗癌剤の取り扱いは、基本的に手袋やマスク、ガウン、ゴーグル、キヤップなどの防護具を使用しなければなりません。

ナチスがユダヤ人にジェノサイドを行った際、毒ガスが使用されたと言われておりますが、実は日本でも毒ガスを使用したジェノサイド行われていたのです。ただし、普通のジェノサイドの場合、その費用はやる側が出すものですが、しかし日本で行われているジェノサイドは、日本人自らが費用を支払い、なおかつ行っている者たちを儲けさせております。

日本の国防費が年間わずか約5兆円です。だから日本人は、米軍に「思いやり予算」というお金を出して、在日米軍に駐留してもらい、中国から守ってもらっております。そのために月二回、「日米合同委員会」が開かれ、この委員会の決定を日本政府は覆すことはできずにあります。

そして日本の国防費が、わずか5兆円なのに対して、日本の医療費は約44兆円、日本人一人当たりだと約34万円です。

しかもその中でも、癌利権だけで年間、約15兆円です。どれだけ間違った癌治療によって誰かを儲けさせて、そして誰かを殺しているかが分かります。

しかし癌は治ります。だからこそ、『癌は5年以内に日本から消える!』という書籍を書か



れた医師の宗像久男さんは、日本国民にこう呼びかけるのです。「皆さん起きてくださいよ！日本人は殺されているよ！」と。

癌治療について、私が個人的に調べてきたことを述べますと、まず癌になつたら、とりあえず玄米食に変えて、一日のうちで接種するブドウ糖の量を少しでも抑えていくことが大切です。

もちろん「ブドウ糖」を多く含む、甘い食べ物物は絶対にやめることです。「アンコはいいの？」とか、「〇〇糖は？」とか、そんなことは一切考えずに、玄米食に切り替えることで、甘いものを欲しがない肉体制りに専念することです。

そして半身浴などを行って、読書でもして、ゆっくりと長い時間、湯船に浸かることです。もしも時間にゆとりがあれば、一日に何度もお風呂に入って、湯船に浸かることも良いそうです。ただし熱い温度の湯舟に、無理して入り続けることは健康によくありません。

もちろん温泉に行くのも良いでしょう。そしてお風呂から上がった後、キンキンに冷えたビールなどの身体を冷す飲み物ではなく、むしろ常温などが良いそうです。

そしてなるべくクヨクヨせず、明るく楽天的に生きるべく、感謝の心をもって毎日を過ごすことが大切です。もしもお金にゆとりがあれば、高濃度のビタミンCの点滴を受けるのも良いと思います。

精神医学は科学ではない

「癌治療」という面から、お金に支配されている「医学の問題点」について考えてみました。 「コロナパンデミック」によって、ワクチン接種が目前に迫る今だからこそ、もう一段、二段、深く「医学の問題点」について考えてみたいと思います。

それは「精神医学の闇」です。「癌治療」が「医学」と称して、人々を殺害しているとすれば、「精神医学」は人々の人生を狂わせております。

たとえば足が折れて病院に行った場合、あるいはインフルエンザに罹ったかもしれないから病院に行った場合、まず医師は検査を行います。そして「レントゲン」などを見せてくれて「足が折れている」、あるいは「ウイルスに感染している」と、科学的根拠を示して患者に教えてくれます。それが医学であり、そして科学というものです。科学とは誰がやっても同じ結果になるものです。

これを「科学の再現性」と言います。つまりAさんが実験をしても、Bさんが実験しても、同じ条件ならば、必ず同じ結果になるのが科学の大原則であり、そして医学は科学です。

しかし実は精神医学というものには、この「科学の再現性」が少しも存在せず、まったく科学的根拠が無いのです。実は精神医学は、単なる「仮説」に基づいて診断しているに過ぎません。この仮説のことを「モノアミン仮説」と言います。

「モノアミン」とはドーパミン、ノルアドレナリン、アドレナリン、セロトニン、ヒスタミンなどの神経伝達物質の総称のことです。このうちノルアドレナリン、ドーパミン、セロトニンという化学物質が、精神的な病と密接な関連がある、とされています。

「脳内において、これらの化学物質のバランスが崩れると、うつ病、パニック障害、不安障害、統合失調症などを引き起こしている」という仮説があるわけです。それが「モノアミン仮説」なわけです。

つまり精神科医たちというのは、この仮説に基づいて、患者の話を聴いて、「貴方はうつ病です」、「貴方は不安障害です」と、診

断を下して、薬を処方して、その脳内のバランスの改善を試みているわけです。

しかしこれは実にバカげた話です。なぜならその脳内の「セロトニン」、「ノルアドレナリン」、「ドーパミン」のバランスなどは、科学的に測ることができないからです。CTやMRIという医療機器で、脳内の構造を調べて、脳出血・脳梗塞・脳腫瘍などを発見することならばできます。また「脳シンチグラフィ検査」によって、脳内の血流の流れを測定することもできます。しかしCTやMRIなどは、「セロトニン」などの脳内の化学物質を調べているわけではないのです。

「モノアミン仮説」の話を聞けば、誰もが「医者たちは脳内のこれらの化学物質をどうにかして計測して、バランスが崩れているところを見つけて出して、ウツとか、パニック障害と診断しているのだから」と想像するものですが、「実はまったくそうではない」ということです。

すなわち「精神科医」と名乗る者たちというのは、単なる主観で、あるいは予測と憶測で、もしくは独断と偏見によって診断を下して、そして薬を処方しているわけです。ですから一人の患者に対して、医師によって診断結果も異なれば、診断方法も大きく異なります。たとえば相模原の障害者施設で、一人の男によって19人もの人々が殺害され、26人が負傷する、という悲惨な大事件がありました。この犯人に対して4人の精神科医たちは、それぞれ合計7つもの異なる病名をつけたのです。これなどはまさに、先ほど述べた「誰がやっても同じ結果になる」という科学の大原則にかなったものではありません。

このように精神医学は科学ではないのです。なぜなら精神科医た

ちは、科学的根拠をもって、病気の診断を下すことができないからです。

『「心の病」はこうして作られたー精神医学「抑圧」の歴史』の著者である小倉謙氏は、「精神科医たちはフリーリングで診断を下している」と述べております。つまり科学を装った似非科学、それが精神医学なわけです。

しかし私たち人間は「権威」には弱い生き物です。そのために「一流大学を出たお医者さんだから、きっと科学的根拠があるのだろう。内科や外科などの他の医学が科学だから、精神医学も科学なのだろう」と多くの人々が誤解、錯覚しているわけです。

しかも日本では、精神疾患にかかる人の数が、ここ数十年で激増して約420万人もいます。それは精神医学が、心の病を治していない最大の証拠と言えるでしょう。

精神薬は殺人鬼と自殺者を作る

そして「精神医学」において、さらに問題なのは「精神薬」です。

なぜならマルチン・ルターの『ユダヤ人と彼らの嘘』の中にも、「彼らは一時間、あるいは1カ月で死をもたらす毒を人々に与え、どのように薬を扱ったらよいか熟達している」とありましたように、心の病を治すはずの「薬」が、実は人々を自殺に追い込んだり、あるいは人間を殺人鬼に変えてしまっているからです。

たとえばウツ病という心の病は、「自殺予備軍」と呼ばれることもあるというのに、そのウツ病の薬「パキシル」の添付文書には、はっきりとこう記されております。

「自殺に関するリスクが増加するとの報告」、「自殺企図のリスク

が増加するとの報告」

米田倫康という方が書かれた『発達障害のウン』という書籍によれば、10歳の男の子が「ウツ病」、「注意欠陥多動性障害」、「行動障害」と診断されて、この「パキシル」を処方されて、そして2013年6月14日に自殺しました。

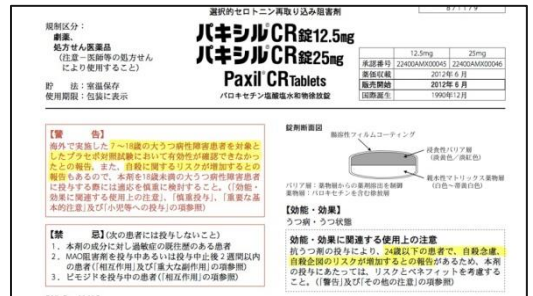
しかし「パキシル」の添付文書には、こうも記されているのです。「警告 海外で実施した7〜18歳の大うつ病性障害患者を対象としたプラセボ対照試験において有効性が確認できなかったとの報告、また、自殺に關するリスクが増加するとの報告もあるので、本剤を18歳未満の大うつ病性障害患者に投与する際には適応を慎重に検討すること。」

つまり「18歳以下のウツ病には、パキシルという精神薬は効果無く、自殺の可能性がある」というわけです。こんな薬を10歳の子どもに処方して、そして自殺させてしまったことは、本当に罪ではないのでしょうか？

あるいは「ジェイゾロフト」という抗ウツ薬にも、やはり同じく「自殺念慮、自殺企図のリスクが増加するとの報告がある」と明確に記されておりませう。

名古屋市の25歳の男性は、十分な診察もないうまま、医師から処方された向精神薬を服用し続けて、依存症になった末に自ら命を絶ちました。

この男性が、向精神薬を服用し始めたのは19歳の時でした。体



の不調を訴え、名古屋市内の精神科クリニックで診察を受けると、医師はわずかな時間でウツ病と診断し、「リタリン」という向精神薬を処方しました。「リタリン」を飲み始めた当初、この男性の表情はイキイキとし、元気を取り戻したかのように見えました。

しかしすぐに不眠や体のだるさを口にして、やがて「リタリン」の服用量が増えていきました。彼は別の病院やクリニックを次々と掛け持ちして、受診して、いつしかこの「リタリン」という薬を大量に集めるようになりました。

そして彼が自殺した時、彼の部屋には、「リタリン」の空き瓶、大量の処方箋が散乱していました。どうやら30以上の医療機関が、彼に「リタリン」を処方しており、彼のパソコンには、「リタリン」をやめるためにはどうすればいいの」と書き残されていました。

実はこの「リタリン」という精神薬は、覚せい剤と同じ中枢神経刺激薬です。そのために世界中で「リタリン」の依存症になる人が増えて、「リタリン」の違法売買、処方箋の偽造、さらには「リタリン」の窃盗まで行う人が出ました。そのために日本でも、「リタリン」を大量に処方していたクリニックが次々と摘発され、密かな社会問題となりました。

精神科医の西城有朋という方が書かれた『精神科医はなぜ心を病むのか?』という書籍によれば、精神科医は一般人の5倍も自殺しているそうです。しかもアメリカの精神科医の自殺者数は、一般人の7倍、若い成り立ての精神科医の場合は10倍の自殺率だそうです。

まさに精神医学を信仰している医師たちが、人の心を治せないばかりか、自らの心まで、病ませてしまっているわけです。

「パキシル」や「ジェイゾロフト」といった抗ウツ薬の添付文書

に「自殺」の文字があるように、向精神薬には必ずと言ってよいほど副作用が伴うものです。そうした精神薬の副作用のことを「賦活症候群」、または「アクチベーション・シンドローム」と言います。この精神薬の副作用が、人々の人生を狂わせてきたのです。

実は自殺者は減っていない

政府の発表によれば、「日本の自殺者は減っている」ということになっております。しかし実は現在の日本では、「自殺」と断定できない場合、「変死」にされており、日本の年間の変死者の数は約15万人です。

元兵庫県警刑事の飛松五男氏は、次のように証言しております。「ひと昔前は、自殺に対する考え方も緩く、ある程度は自殺として処理していました。ただ最近は、遺書などの具体的な証拠がなければ、自殺とは認めず、変死体として処理するようになったそうです。すると、見かけ上の自殺者数が減るだけでなく、司法解剖を行うので予算を要求しやすくなる、一石二鳥なわけです」

たとえばかつてタレントの飯島愛さんが、マンシヨンの一室で孤独死して、亡くなってから数日後に発見されたことがありました。彼女は突如、生きる気力を無くして引退しました。そして実は彼女も、向精神薬を飲んでいたことが分かっております。しかし遺書が無いために「自殺」ではなく「変死」にされました。

日本では420万人の人が精神疾患で苦しんでいる以上、この15万人の変死者と抗ウツ薬は、おそらく何らかの因果関係があるでしょう。

そして生きる気力を無くして変死しているのならば、それはカタ

チを変えた自殺ということになり、ただ犬と化した政府が、数字を誤魔化しているだけに過ぎません。

あるいは向精神薬を飲んで「死にたい」と思わない場合は、「殺したい」と考えてしまうこともよくあります。つまり自殺に向かわない場合、覚せい剤と同様に、暴力や殺人に向かつてしまうことがあるわけです。

実のところ近年起きている凶悪事件の背後には、かなりの確率で、向精神薬が関与しています。「全日空61便ハイジャック事件」、「西鉄バスジャック事件」、「池田小学校事件」、「秋葉原通り魔事件」などが、まさにそうです。あるいはアメリカで起きた「コロンバイン高校銃乱射事件」なども、やはり向精神薬が関係していました。

発達障害は科学的に証明されていない

米田倫康という方が書かれた『発達障害のウソ』という書籍によれば、「モノアミン仮説」と同様に、精神科医たちは今、科学的根拠を持たずに、主観と独断と偏見でもって、大人から生後わずか数カ月の乳幼児まで、次々と「発達障害」の診断を下しております。つまり「私たち人間が発達障害と診断されるかどうか」という大切なことに、「科学的な再現性」があるわけではなく、医師によって異なった診断結果になるわけです。そもそも発達障害が、脳機能の障害であると科学的に証明されているわけではありません。

障害や病気として存在していなかったものを、精神科医たちが勝手に「発達障害」としてでっち上げたからです。それは「発達障害のチェックリスト」を見ても、明らかにおかしいことが分かります。こうしたことからは実は日本は今、発達障害がバブル的に増加してい

精神科医と心理学者が作った75項目のチェックリスト

- ・初めて出てきた語や、普段あまり使わない語などを読み間違える
- ・文章の要点を正しく読みとることが難しい
- ・大人びている。ませている
- ・みんなから、「〇〇博士」「〇〇教授」と思われている(例:カレンダー博士)
- ・他の子どもは興味を持たないようなことに興味があり、「自分だけの知識世界」を持っている
- ・独特な目つきをすることがある

るのです。

そしてついに2019年3月26日、「脱法覚せい剤」とまで呼ばれる「ビバンセ」という発達障害のADHD薬が、厚生労働省によって承認されました。この「ビバンセ」という薬は、体内にある赤血球の酵素と化学反応して、「アンフェタミン」という物質に素早く変化します。「アンフェタミン」とは何かと言えば、「覚せい剤」そのものです。つまり「ADHD薬・ビバンセ」は、形を変えた「覚せい剤の物質」なわけです。

すなわちいつの間にか「精神医学大国にして、発達障害大国でもある日本」は今後、子どもたちをはじめ多くの人々に、科学的根拠の無いまま次々と「ウツ」とか、「統合失調症」とか、あるいは「発達障害」という診断を下して、合法的に覚せい剤まで飲ませていくことになるわけです。

変死者が15万人ということも狂っていますが、子どもを薬漬けにしつつある現状も狂っております。それは2005年から始まった「発達障害者支援法」に問題があります。なぜなら「支援」という美名のもとで、危険な向精神薬の処方が続けられてきたからです。彼らはマスキングを通して私たちに呼びかけます。「発達障害という脳機能の障害を早期に見つけて、早期に治療することで、子どもの成長を助け、障害を抱える子どもと家族を守る」と。この呼びかけに乗せられ、多くの人々が、誰でも「発達障害」と診断されてしま

う「チェックリスト」に基づいて、いつしか日本は、発達障害パブルとなりました。そしてビバンセという覚せい剤の処方ですから、狂っていると思えませんか。

恐ろしい精神医学の治療法

マスキングは製薬会社とは仲良しですから、テレビや新聞を信じている人にとっては、「癌治療」や「精神医学」の話は驚きであったことでしょう。しかし「癌治療」や「精神医学」の現実を目の当たりにして、その上で質問いたしますが、すべての医学が人間を治すために存在していると思えますか？もちろん医学は素晴らしいのですが、実は現在、私たちの目の前にある医学というものは、ユダヤ人を自称している者たちが構築しているために、かなり人々を殺す道具と化してしまっているのです。ルターは言います。「彼らの多く、特に外科医と医者であるとか称している者達は、キリスト教徒を殺害しているのです。彼らは一時間、あるいは1カ月で死をもたらす毒を人々に与え、どのように薬を扱ったらよいのか熟達しているのです」と。

さて、コロナが世界を襲い、そして人類全体がワクチンを接種するか否かの時代なので、から、「医学の闇」をさらに深く知るためにも、もう一段、「精神医学」について考えてみたいと思います。世界で最初の向精神薬「ソラジン(クロルプロマジン)」が登場したのは1954年です。この「ソラジン」は、もともと合成染料として開発されました。染料とはもちろん色を付ける材料のことです。そして次にこの「ソラジン」は、豚の寄生虫駆除剤として使用されました。染料が豚の身体にいる寄生虫を、駆除することに役立つ

ったわけでは

そしてこの「ソラジン」を薬として人に飲ませてみると、人の運動制御機能を遮断することも分かりました。つまりこの「ソラジン」を人に飲ませると、その人は動かなくなり、やがて感情が何もなくなる、ということが分かったわけでは。恐ろしいことにこの「ソラジン」は、今でも向精神薬として、処方されています。

驚くかもしれませんが、「精神医学」では、この向精神薬が開発される以前、「精神外科」に頼っておりました。「精神外科」とは、読んで字のごとく「脳を切り取る外科手術」のことです。代表的なものに「ロボトミー（前頭葉白質切截術）」というものがあります。

ロボトミーの種類として、「ロボトーム」という長いメスで前頭葉を切るものもあれば、眼球の入っている頭蓋骨の部分、つまり目玉の穴から、アイスピックのような器具を大脳にまで到達させて、神経繊維を無造作に切断する恐ろしいものまであります。

かつては「医学・精神外科」の美名のもとに、多くのロボトミー手術が行われておりました。しかしケネディ大統領の妹ローズマリ―・ケネディがロボトミー手術を受けて、知的障害の後遺症を負うなど、世界中で数多くの問題が起こったことで、いつしかこの「ロボトミー手術」は行われなくなりました。

これだけでも十分に恐ろしいのですが、では「ロボトミー」の前は何を行っていたのかと言えは、「電気ショック療法」、「電気痙攣療法」です。「Electro Convulsive Therapy」の頭文字を取って、「ECT」とも呼ばれるこの電気ショック精神療法は、過去数十年にわたって、うつ病治療などに用いられてきました。しかしこの「ECT」という治療法は、「記憶喪失」を引き起こすなど、重大な副作用があるために、やがて「ロボトミー手術」に代わったわけでは。

そしてこの「ロボトミー」でも、知的障害の後遺症が数多く出たために、この「ロボトミー」に代わって誕生したのが、「ソラジン」という世界最初の「向精神薬」だったわけでは。ちなみに「電気痙攣療法」は、今もカタチを変えて復活して行われております。精神科医からうつなどの何らかの精神疾患と診断されると、本当に今でも「電気ショックやつてみますか？」と言われるのです。

GHQによる医療洗脳

「医学」には深い闇が存在しております。なぜなら彼らは、絶大な力を持つと同時に、彼らは思想的に病んでいるからです。

そのために医師であるジュディ・マイコヴィッツは、映画『PLEIN DE MIEUX』の中で、医療従事者に対して、次のように述べています。

「自分を許してあげて欲しい。我々はベストを尽くして研究し、真実だと思つて（医学を）学んだのです。

しかし真実だと言われていたデータが、そうではなかったのです。我々が学校で教えられてきたことは、まったく科学ではありませんでした。

（権力者たちの）言われた通りにしないと、資金も得られません。論文も公開できないのです。」

「医師たちがベストを尽くして学んできたことが真実ではない」、これは本当に悲しきことです。たとえばコンビニやファーストフードには、「マニュアル」というものが存在しています。

コンビニなどで働く人は、この「マニュアル」を記憶することで、お客さんのあらゆる要望に対応できるようになります。もちろんた

とえまニユアルを覚えても、いろいろなことが起こるために臨機応変に考えねばならず、コンビニやファーストフードで仕事をするのも大変です。

そして弁護士や医者において、この記憶しなければならぬ「マニユアル」に相当するものが、『六法全書』や『医学書』です。そしてもちろんコンビニのマニユアルに比べれば、『六法全書』や『医学書』を覚えるのは、何倍、何十倍、何百倍も大変でしょうし、たとえこれらを覚えて司法試験や医師国家試験に受かったとしても、やはり臨機応変に動かなければなりません。そしてもちろん医学が多くなると健康にし、命を救い、幸せのために役立つてくれていることは事実でしょう。

しかしたとえ『六法全書』は完璧でしょうか？人々の幸福を守るために存在しているはずの『六法全書』が、時に人々の自由を縛り過ぎたり、あるいは時には法の穴をいかぐつて悪が跋扈し、正直者がバカを見るようなことは、世の中にくらでもあります。誰にでも『六法全書』は完全ではない、ということが理解できるはずで

では、医師たちが医師国家試験に通るために、学ばなければならぬ医学書は、果たして本当に完全なのでしょうか？

今、日本はアメリカから医学を直輸入しており、そのアメリカの医学は、癌治療や精神医学を見てもお分かりのような、彼らが築き上げたものなのですよ？

先の大戦で日本が敗れると、彼らはそれまで日本人が慣れ親しんでいた東洋医学、あるいはドイツから日本へ入って来た西洋医学から、偽ユダヤが作り上げていた西洋医学へと変えていきました。つまり人間の持つ治癒力に重点を置いた医学から、薬や手術に重点を

置いた医学へと変わっていったわけですね。

結局のところ、先の大戦に敗れて以来、私たちの暮らしは大きく改造されてしまったわけですね。そしてそれは医学も他ならないわけですね。なぜならGHQは、日本に様々な習慣を根付かせてきたからです。それは次の通りです。

1. 『日教組』による自虐的偏向教育を公立の教育に据え、日本人の思考を変える
2. パン食に力を入れて、小麦粉を普及させ、底カロリーの和食から高カロリーの西洋食へ変える
3. 「牛乳を飲まないとカルシウム不足になる」と宣伝し、牛乳を普及させ、食習慣を変える
4. 人間の持つ治癒力に重点を置いた東洋医学から、薬や手術に重点を置いた西洋医学に変える
5. 『母子手帳』を配布し、予防接種を義務化し、ワクチンに対する考え方を変える

教育が変わらされてきたことはすでに述べましたが、今では西洋食文化が盛んになったことで肥満が社会問題となり、学校給食では誰もがパンと牛乳で育ちます。

しかし実はこの食事の変化も、実はGHQが行ったことだったのです。「パンは危険だ」という都市伝説もありますが、「食事が西

洋化したことが危険である」と、とそう言えるでしょう。なぜなら和食は洋食に比べて、ヘルシーで健康的だからです。

そして戦後の日本では、「牛乳はカルシウムが豊富なために健康にも良く、特に成長期の子どもの骨の育成を手伝う。また大人であつても常日頃から牛乳をよく飲むべきである」と宣伝されてきました。しかしこれはまったくのデタラメな宣伝でした。むしろ成人した大人が牛乳を飲むことは、健康に悪いことだったので。

もちろん何十年もかけて信じ込んできた常識を、覆すことは難しいかもしれませんが。しかしだからこそ常識をひっくり返す必要があるのです。

牛乳の中には「乳糖」という成分があります。そしてこの「乳糖」を分解するためには、「ラクターゼ」という酵素が必要です。しかしこの「乳糖」を分解してくれるこの「ラクターゼ」は、生まれたばかりの赤ちゃんの体内には豊富にあるのですが、大きくなるにつれて少しずつ減少し、成人になるまでには、この「ラクターゼ」はほぼ無い状態になります。

牛乳の成分「乳糖」を分解する「ラクターゼ」が無い状態の大人が牛乳を飲むと、当然、「乳糖」が分解されず、消化不良が起こります。「ヨーグルトを食べると便通が良くなる」という話がありますが、医学的に見ると、あの状態は実は「酷くない消化不良」の状態だそうです。

ですから牛乳を飲む習慣がある人というのは、消化不良の習慣があるわけです。そしてこの消化不良の習慣が、大腸癌の原因になるのです。

アメリカ消化器内視鏡学会で、多くの賞を受賞し、世界的権威でもある医師に、新谷弘実という方がいらつしやいます。この新谷医

師によれば、「牛乳をたくさん飲んでる人ほど、大腸癌やポリープになる人が多い」そうです。そうしたことから、アメリカの保健所では、「牛乳は人体にとって有害であり、牛乳は産婦と赤ちゃんには飲ませてはいけないもの」と決められています。

『母子手帳』には、「産後の母親と赤子は牛乳を飲むべき」と書かれてあるというのに、しかし実際は飲むべきではないというのが真実だったのです。

「牛乳を成人が飲むと消化不良になり、それによって大腸癌になる危険性が高まる」、この話を裏付けるように、牛乳を飲む習慣がそれほど無かった1955年、大腸癌で死亡した日本人の数は4200人でした。しかし敗戦以降、牛乳を頻繁に飲むようになった2005年には、大腸癌で亡くなる日本人の数は10倍まで増えて、4万人以上もいます。

コンビニやスーパーに行くと、どこでも必ず牛乳が売っておりますが、日本人は、果たしてどれだけ牛乳に殺されてきたのでしょうか？

そしてGHQによって、悪く変えられたものは、実は教育や食事だけでなく、医療についても同じでした。なぜなら今回の「コロナ茶番劇」によって、多くの人が今まさに、ワクチンを打とうとしておりますが、それは日本人が子どもの頃から、ワクチンを打つてきたからなのです。

アメリカ人も、日本人も、誰もが幼い頃からワクチンに触れて、すでにワクチンに慣れ親しんでいるのです。

敗戦以降、日本の政府は、産後のお母さんに、まるで親切心のように『母子手帳』を配布します。『母子手帳』は1948年の占領期間中に、乳業メーカーに作らせて、『母子手帳』の中には「牛乳

(粉ミルク)を飲ませるように」と明記しました。当時の保健所に勤めることができたのは、乳業メーカーに勤める栄養士だったので、『母子手帳』はアメリカが発祥で、1930年に牛乳を広めるために作られました。しかしアメリカでは受け入れられず、すでに数十年前に、『母子手帳』は完全に廃止されています。

しかし日本では、『母子手帳』が今も存続し、そこには「牛乳を飲むように」と書かれるばかりか、明確に「予防接種」が記されており、普通の善人ならば、「政府が配布する『母子手帳』に嘘があるわけではない、牛乳を飲むように心がけて、ワクチンも良いお薬だから、赤ちゃんのためにも打たなければ」と考えるものです。しかし後にワクチンについて詳しく話しますが、実はそうではなかったわけです。

医学は、人間を不健康から健康へと誘ってくれる大切なものですが、しかし癌治療から、精神医学まで、様々なことを述べてきましたが、現代の医学に相当の問題があることは、確かな事実です。これでは安心して、病院にも行けません。

そのために医師の細川博司先生は、「人間ドックに行けば行くほど病気が作られる。そして癌と診断されて殺される」と述べています。私たちは医療において、かなり洗脳され、そして虐殺されていたわけです。

サバタイ派フランキスト

さて、「医学の闇」について考えると、彼らの中にある「心の闇」がさらに見えてきます。お人良しの多い日本人からすると、「人を

癒し、人を治すように見せかけて、人を狂わし、人を殺すなんて、彼らほどここまで狂っているのだろう」と、そのような感想を持たれるかもしれません。

だからこそ、ここで「コロナ茶番騒動」について考える前に、今一度、「ユダヤ人を自称する者たち」について、触れてみたいと思います。

ユダヤ教徒たちは、ナチスの「ホロコースト」以前からも、迫害につぐ迫害の歴史の中で思想的に病んでしまったのかもしれない。

たとえばビリー・ミリガンという人物がおります。彼は父親から毎日、虐待を受けて育ち、いつしか心が分裂して24もの人格を築き上げて、そして悪魔に魅入られ、多くの犯罪に手を染めてしまいました。逮捕・起訴された彼は、医師から「多重人格障害」と診断されました。

迫害を受け続けてきたユダヤ人、そしてその中で生まれてきた『タルムード』にも、もしかしたら何かこれと似たところがあるのかもしれない。そうしたことを考える時、二人の重要な自称ユダヤ教徒がいます。

一人は1600年代のサバタイ・ツヴィという自称ユダヤ人です。このサバタイ・ツヴィという人物は、どうやら自分のことをユダヤの「メシア」、つまり「救世主」と考えていたようです。

そして彼は、ユダヤ教の宗教学者の協力を得て、次第にユダヤ人たちの間で認められ始めました。

そんな彼は、キリスト教徒たちの迫害に打ち勝ち、そしてイスラム教が盛んな中東に自分たちの国を建国するために、とんでもないことを説き始めました。

それは「ユダヤ教徒が、イスラム教やキリスト教などに味方のふりをして内部に入り込み、キリスト教やイスラム教を内部から腐ら

せて、無力化させて、最終的には崩壊にいたらせるべきである」という作戦でした。

この彼の発案は、「マラーノ」と呼ばれていた隠れユダヤ教徒たちに、希望を与えました。

なぜなら屈辱的にキリスト教を装わされている「隠れユダヤ教徒」たちに、自分が隠れてユダヤ教の信仰を持っているその「大義」を与えたからです。そのためにサバタイのこの主張は、隠れユダヤ教徒たちの間で、熱狂的な支持を得ました。

実際に彼自身、イスラム教に改宗しています。しかし彼は見かけにはイスラム教徒を装いつつも、ユダヤ式の祈りを捧げているところも目撃されており、実のところユダヤ教は捨ててはいませんでした。

そしてこのユダヤ教サバタイ派の中から、もう一人のヤコブ・フランクという人物が現れます。

彼もサバタイと同じく「自称救世主」であり、彼は自分をサバタイ・ツヴィの生まれ変わりだと信じつつも、サバタイ・ツヴィよりも、もっと過激なことを考えました。

実は正統なユダヤ教の教えの中には、「いつか聖地エルサレムの黄金の門と呼ばれる東の門より、救世主が馬に乗って現れて、ユダヤの民を救い出してくれる」という予言があります。

だからこそ二千年前にイエスは、救世主として馬ではなくロバに乗ってその東の門をくぐってエルサレムに入り、またその言い伝えを聞いたイスラム教徒たちは、16世紀にその東の門を埋めて閉ざしてしまつたのです。

そしてこのヤコブ・フランクは、この「いつか救世主が現れる」という考え方を、かなり曲がつて解釈して、次のように考えました。

「この世の悪や不幸を、わざと人為的に増やして、頂点にまで達しさせて、そしてこの世界を破壊し尽くせば、救世主を到来させるこ

とができる。予言とは当たるものではなく、当てるものである」

このヤコブ・フランクの危険極まりない終末思想に染まるユダヤ教徒のことを、「フランキスト」と云い、この思想を持つユダヤ人を「サバタイ派フランキスト」と言います。

この「フランキスト」たちは、正統派ユダヤ教のラビから破門されました。しかしフランキストたちは上手く姿を隠して生き延びたのです。

ですから「ユダヤ教サバタイ派フランキスト」は今も健在であり、このような終末思想を実現させようとする者たちもいるわけです。

すでに述べましたように、ロスチャイルドはユダヤ人の強制居住区「ゲットー」から生まれました。彼は『タルムード』を信奉する自称ユダヤ人として伝えられておりますが、一説にはこの「サバタイ派フランキスト」であつたとも言われております。これは定かな情報ではありません。しかし彼が、戦争の度に利益を得て、そして彼が世界中の通貨を牛耳り、そして世界が紛争と貧困にあえいでいることを考えると、その可能性は捨てきれません。

ですからこうした「狂った終末思想」を持つ者たちも存在している、ということだけは、頭の片隅に置いておくべきかもしれません。なぜなら彼らが起こしている「コロナ茶番騒動」によって、確かに今、まさに終末の時代を迎えているからです。

水増しされているコロナ死者数

「コロナ騒動は茶番である」と聞かされても、おそらく多くの人々が、「でも、政府やマスコミが毎日、毎日、感染者や死者数が発表されているじゃないか！それはどう説明するんだ！」と、そのように言いたくなる人もいることでしょう。

しかし「コロナ死者数」は、明らかに水増しされてきました。米国の議員であり、医者でもあるスコット・ジェンセン氏は、『FOX NEWS』のインタビュアーで次のように答えました。「今、コロナ患者が入院したら、病院側に1・3万ドル（140万円）が支払われ、もしもその患者が（重症で）人工呼吸器を使用するならば、病院側に3・9万ドル（約420万円）支払われることになっていきます。あるいはイタリアでコロナで死亡したとされる人の死亡診断書を、イタリア国立衛生研究所が再検証したところ、コロナが死亡の直接の原因だったものはわずか12パーセントに過ぎず、残りの88パーセントは、最低でも他にも一つは病状がありました。」

つまり米国では、コロナ患者が入院したら、政府から病院側にお金が支払われ、しかももし、その患者が重篤ならば、さらに多くのお金が病院側に支払われているために、お金目当ての病院がコロナ感染者をわざわざ水増しをしている、というわけです。

さらにスコット・ジェンセン氏は話を続けます。「アメリカの厚生省から病院に7ページの文書が届きました。その文書には、ある高齢者がたとえ肺炎で亡くなったとしても、その人が生前、接触していた息子が、もしもコロナの陽性になったら、その高齢者の死亡診断書には『コロナが原因』と書く、ということが適切だと述べられています。これはこれまでの（アメリカの）死亡診断書の書き方ではありえないことであり、これではたとえバスに轢かれて死亡しても、PCR検査にかけて陽性であったら、コロナで死亡したことになるってしまいます」と。つまり実は米国における「コロナの死亡診断書の書き方」は、「これまでの従来の死亡診断書の書き方」とは、まったく異なった書き方がされており、とんでもない問題があったわけです。

しかも米厚生省からスコット・ジェンセン氏のもとに届いた文書には、次のように記されていました。「COVID・19が絶対的な死因と判明できないものの、その可能性や疑いが高いなら、それがある程度、確信できる範囲ならば、死亡診断書にCOVID・19と記入することが許されます」と。つまり偽ユダヤに侵略された米政府は、意図的にコロナ死者数の水増しを、病院側に支持していたわけです。

フロリダでは、コロナで亡くなったとされる人の遺体がたくさん並べられました。しかし本物か、偽物かは分かりませんが、片手で軽々と遺体を運んでいる不思議な写真が流出しています。もし、この写真が本物ならば、黒いビニールの中に入っているのは、おそらくマネキンでしょう。

また、「コロナと戦っている医療従事者を応援しよう」という流れは、アメリカでも、日本でも行われてきたことですが、しかしその一方で、「実は病院はガラガラだ」という映像、もしくは医師たちの内部告発の声も、次々にネットに上がっています。

マスクミを通してではなく、国際銀行家に侵略されたアメリカの姿を見ていくと、次第に「コロナの茶番劇」が見え始めていくのです。

日本や世界で行われている水増し

そして先の大戦以来、日本も金融植民地です



から、「コロナ死者数の水増し」は、何もアメリカだけのことでなく日本でも行われてきました。実は厚生労働省がホームページで公開している資料にも、「新型コロナウイルスは風邪の一種」と書かれております。

市民団体の代表をされている寺尾介伸さんという方がいます。

彼は『Youtube』もされており、私も一緒にイベントをさせていただいたことがあります。彼の仲間が、8月中旬に、厚生労働省に電話をかけて、「厚生労働省は実際、コロナの危険性をどれくらいのものとして認識しているんですか？」と質問すると、厚生労働省の職員から驚くべき返答が返ってきました。「コロナの危険性の資料は見つからない。だからコロナが危険であるという根拠があるわけではない。ただ国民には注意喚起はしている」と。つまり厚生労働省の職員が、はっきりと「新型コロナウイルスが、実際にはどれだけの危険なものなのか、それは未だに分からない」と述べたわけです。

しかしその危険性が分からない新型コロナウイルスによって、政府から「自粛要請」が出され、「緊急事態宣言」が出されました。こうしている今も日本の経済が破壊され、今後、数万の会社が倒産すれば、数百万人単位で失業者が出る事態にもなります。すでにコロナを理由に、自殺した人もおります。

さらに信じがたい厚生労働省の資料をご紹介します。これは「厚生労働省」が各都道府県の地方自治体に対して送っ

○ したがって、事務連絡中の「新型コロナウイルス感染症患者が死亡したとき」については、厳密な死因を問いません。新型コロナウイルス感染症の陽性者であって、入院中や療養中に亡くなった方については、都道府県等において公表するとともに、厚生労働省への報告を行うようお願いいたします。

問2 都道府県等の公表する死亡者数は、どうすべきか。

(答)

○ 新型コロナウイルス感染症の陽性者であって、入院中や療養中に亡くなった方については、厳密な死因を問わず、「死亡者数」として全数を公表するようお願いいたします。

なお、新型コロナウイルス感染症を死因とするもの数を都道府県等が峡別できた場合に、別途、新型コロナウイルス感染症を死因とする死亡者数を内数として、公表することは差し支えありません。

た資料であり、厚生労働省のホームページから、誰でもご覧になれる確かな資料です。この厚生労働省の資料には、次のように記されております。「新型コロナウイルス感染症の陽性者であって、入院中や療養中に亡くなった方については、厳密な死因を問わず、『死亡者数』として全数を公表するようお願いいたします。」

つまり厚生労働省は、各地方自治体に対して、「厳密な死因は特定しなくても良いから、検査の陽性者はすべてコロナ死者数としてカウントせよ」と、まるでコロナ死者数の水増しを指示するかのような文書を送りつけていたのです。そして寺尾介伸さんが、この資料を手に愛知県の県庁職員に質問すると、その職員は堂々と「たとえコロナで死んでなくても、PCR検査の陽性者はすべてコロナ死者数としてカウントする」ということを述べました。このやりとりも、動画がネットに上がっています。つまりこれらから分かることとして、「厚生労働省がコロナ死者数の水増しを、明確に地方自治体に要請していた」ということです。

そして実際に「コロナ死者数の水増し」は行われており、ネットの『NHK』のニュースでも一部取り上げられております。そのニュースは以下の通りです。「鹿児島市は、新型コロナウイルスに感染し医療機関で治療を受けていた市内の90代女性が28日までに死亡したと発表しました。市によりますと、女性には基礎疾患があったということ、死因は新型コロナウイルスの感染とは関係ないということです。ただ、市は、厚生労働省の基準に従い、新型コロナ



「ナウイルス関連の死亡者として国に報告したということです。」つまり厚生労働省が各地方自治体に対して、「陽性者は厳密に死因を問わず、コロナ死者数として公表するようお願いいたします」と指示を出しましたが、実際にその通りが行われていたということが、ネットニュースで明らかになったわけです。

このように侵略されたアメリカでも、日本でも、コロナの死者数は水増しされています。また、すでに述べましたようにイタリアでも、コロナが死亡の直接の原因だったものは、わずか12パーセントで、残りの88パーセントは最低でも他にも一つは病状があったことが分かっております。その他にはイギリスでも、交通事故で亡くなった死者数を、コロナ死者数にカウントしていたことが明らかになりました。実は世界中でコロナの死者数の水増しが行われていました。なぜなら徳島大学の大橋眞名誉教授の『PCRは、RNAウイルスの検査に使ってはならない』という書籍によれば、そうした「厳密な死因を問わず、『コロナ死亡者数』として公表する」と指示を出していた大元は、『WHO』だったからです。つまり世界全体でコロナ死者数が水増しされていたわけです。

PCRはウイルスを検査するものではない!?

現在、新型コロナウイルス感染症の陽性、陰性の診断は、「PCR検査」で実施していますが、では、果たしてこの「PCR検査」は、本当に正確なのでしょうか?

「PCR検査」を開発したのは、ノーベル賞受賞生物化学者のキヤリー・マリスという人物です。「PCR」は、正式には「ポリメラーゼ連鎖反応 (polymerase chain reaction)」と言われ、遺伝子

を人工的に細胞分裂させて複製し、親子関係などを調べる遺伝子検査や、もしくは個人を遺伝子レベルで識別する犯罪捜査などに広く用いられています。実は「PCRはウイルスを検査するものではない!」という意見が、世界中で根強くあります。しかし残念なことに、PCR開発者キヤリー・マリスは、「コロナ騒ぎ」が始まる直前の2019年8月7日に亡くなってしまいました。そのために開発者本人の意見を聞くことはできません。しかしジャーナリストのジョン・ローリッセン氏の取材によれば、生前のキヤリー・マリスは、「PCRをウイルス検査に使ってはならない!」と発言していたそうです。

ただし、「死人に口無し」とはよく言ったもので、映像としては残っていないために、本当にキヤリー・マリス本人が、そう述べていたのかどうか、その確たる証拠は見つかっていません。キヤリー・マリス博士本人の「PCR」について語っている映像もあるのですが、難解な専門用語が続くために、やはりよく分かりません。

しかし「キヤリー・マリス博士はPCRをウイルスの検査に使ってはならないと言っていた!」というこの発言を裏付ける証言ならば、いくつもあります。たとえば徳島大学の名誉教授に、大橋眞という方がいらつしゃいます。この方は、これまでSARSなどの感染症対策で活躍されてきた方です。大橋名誉教授は、次のように仰っています。「コロナ騒動の原点に立ち返ってみると、そもそも何故PCR検査をするのかということにあります。PCR検査は、遺伝子のごく一部を見るだけなので、類似したウイルスなどの常在性ウイルスも検出する可能性があります。そうなるとマスク着用や自粛、3密をさけても、免疫力が弱まるとPCR陽性になる可能性があります。PCR検査は一体何の遺伝子を検出しているかも分から

ないのが現実です。病原体を確認しないまま、PCR検査をする
との危険性を認識するべきです。」と。

大橋名誉教授の話も、やはり専門的で難解ですが、しかし素人に
も理解できることもあります。それはやはり「専門家の視点からす
ると、『PCR検査』がコロナウイルスの感染検査には、まったく
向いていない」、ということ です。

PCR陽性は感染ではない

PCR開発者キャリー・マリスが「PCRはウイルスを検査する
ものではない」と述べていた疑惑があり、そして徳島大学の大橋名
誉教授も、「PCRはウイルス検査に向いていない」と述べている
わけですが、一般社団法人『日本疫学会』のホームページにも、「Q
1：新型コロナウイルス検査は、どのくらい正確なのですか？」と
いう質問に対して次のような回答があります。「実際の感染者に対
して『PCR検査』がどれほど正しく診断できているかについての
正確性の計算がまだできていません」と。

一般社団法人『日本疫学会』も「PCR検査の正確性が分からな
い」と述べている、これらの話を裏付ける事実として、タンザニア
のジョン・マグフリ大統領は、2020年5月3日、国立研究所に
動物や果物、自動車燃料などを「ヒトの検体である」として検査に
持ち込みました。検体とは、医療検査に使用する材料のことです。
タンザニアの大統領は、わざわざ検体に氏名から性別、生年月日ま
で付けて、密かに医師たちにPCR検査にかけさせました。すると
大統領が持ち込んだパイヤ、ウズラの卵、ヤギの検体からも、コ
ロナの陽性反応が出たのです。こうしたことを受けて2020年5

月4日、タンザニア政府は国立研究所の所長と幹部を停職処分にし
ています。タンザニア大統領のおかげで、確かに「PCR検査の正
確性が分からない」ということが証明されました。ちなみに私が『Y
oU Tube』に、マグフリ大統領の動画をアップしたら、即刻、
削除されました。もちろん彼の発言がテレビから聞こえてくること
はありません。

また、『米国疾病予防管理センター（CDC）』のホームページ
にも、「PCR検査で検出されたウイルスの遺伝子は、感染性のウ
イルスの存在を示しているとは限らず、新型コロナウイルスが臨床
症状（肺炎など）の原因とは限らない」とあります。つまりこれが
とても大事なことなのですが、「PCR検査の陽性＝新型コロナウ
イルスの感染とは言えない。PCR検査陽性をもって、肺炎を引き
起こすとも証明できない」と、『米国疾病予防管理センター（CD
C）』の「PCR検査」の説明文の中でも、明確に述べているわけ
です。

しかもこの説明文の中には、「PCR検査」のキットが、新型コ
ロナウイルス以外の他の様々なウイルスでも、「陽性反応」になる
ことまで明確に記載されています。それらの他のウイルスとは以下
のものです。「インフルエンザウイルスA型・インフルエンザウ
イルスB型・RSウイルスB型・アデノウイルスタイプ3タイ
プ7・パラインフルエンザウイルス2・マイコプラズマ肺炎・
肺炎クラミジアなど」です。

今、毎日、毎日、政府やマスコミは、「コロナ感染者の数」を、
「〇〇名」と発表しております。そしてそれは「PCR陽性者の数」
です。しかしたとえ「PCR検査」を受けて、陽性結果が出たとし
ても、コロナに感染しているとは限らないのです。『感染を恐れな

い暮らし方 新型コロナからあなたと家族を守る医食住50の工夫』の七合診療所所長の本間真二郎医師も、次のように言います。「日本で『第2波』がきている根拠として、『検査の陽性者』を『感染者』としてとらえ、報道されていることがほとんどで、これはとてもとても重大な問題です。私の結論から申し上げます、『検査の陽性者』≡『感染者』ではありません」と。

8月中旬の段階で、寺尾さんたちの市民団体の方が、厚生労働省に電話して、厚生労働省の職員に、「厚生労働省では『PCR陽性者≡感染者』と捉えているんですか？だとしたらその理由は何ですか？」と質問すると、驚くべき答えが返ってきました。電話応対したその厚生労働省の職員は、はっきりと言いました。「PCR検査の陽性者をコロナ感染者としておりますが、その科学的根拠はない」と。今現在、多くの日本人が、「ある人に『PCR検査』をかけて、もしも陽性反応が出れば、その人はコロナ感染者である」と考えております。実際に厚生労働省も、「PCR陽性者はコロナ感染者」として発表しております。しかしその厚生労働省の職員が、「科学的根拠を持ってPCR陽性者はコロナ感染者とすることはできない」と、はっきりと認めているのです。

「PCR検査の陽性≡新型コロナウイルスの感染とは言えない」、これは国会でもすでに明らかにされていることです。2020年1月2日、『参議院地方創生及び消費者問題に関する特別委員会』という会議が開かれ、国会中継が行われました。その中で、『日本維新の会』所属の柳ヶ瀬裕文参議院議員が、PCR検査の信頼性について質問すると、厚生労働省の佐原康之氏は、「PCR検査陽性判定≡ウイルスの感染性の証明ではない」と答えたのです。

今回の「コロナ茶番劇」のそもそもの原因は、「PCR検査のイ

ンチキ」にあり、開発者のキャリー・マリスがコロナパンデミックが起きる直前に、亡くなってしまっていることにあります。

おかしなPCRサイクル値

そもそも「PCR検査がウイルスを検査するものではない可能性があり、なおかつ検査陽性者は感染者ではない、にも関わらず政府とマスコミは感染者と発表している」、これだけでも十分に驚きですが、さらに問題なのは、「PCR検査」の「サイクル値(C_C)」に世界的な基準がなく、そして日本の「サイクル値(C_C)」が以上に高いことです。感染者が少ない台湾では「サイクル値(C_C)」は「35」、アメリカでも「40」、日本は「45」です。

「35と45ならば、数字はたった10しか変わらないのだから、それほど問題なのか？」と疑問に思うかもしれません。しかしこの「サイクル値(C_C)」は「指数」なのです。「指数」というのは、「2」の「2」のことです。ですから「指数」の場合、わずかな数字の違いでも、伸び率・膨張率が尋常ではありません。

たとえば厚さ0.1ミリのコピー用紙を、1回折り曲げたら2倍の0.2ミリ、2回折り曲げたら4倍の0.4ミリ、そして6回では6.4ミリになります。これは「64倍」になったということです。さらにもう一回折り曲げると、7回で128倍の12.8ミリになります。これが「指数関数的に増える」ということです。

ちなみに紙を折り曲げた回数の世界記録は、アメリカのマサチューセッツ工科大学の4kmのトイレットペーパーで、わずか13回です。たとえ長さが4キロでも、折り曲げる度に面積は半分になるために、たった13回しか折り曲げられないわけです。しかしもし

も面積が無限にある「奇跡の紙」が存在すれば、わずか26回で6700メートルとなり、富士山の高さを簡単に超えます。27回は1万メートルを超えて、エベレストを遥かに超え、さらにもう10回折り曲げて37回になると、地球の直径を超え、42回折り曲げると約44万kmになり、月までの距離、約37万kmを超え、50回では地球から太陽までの距離を超えます。

光の速度は秒速30万キロ、つまり光は、わずか1秒間のあいだに30万キロも進みますが、天の川銀河の直径は光の速度で進んでも、約10万年もかかります。しかし0.1ミリの厚さの紙を、もしもたった83回、折り曲げることができれば、天の川銀河の直径とほぼ同じ規模になります。地球から観測可能な宇宙は、約465億光年先と言われておりますが、たった102回コピー用紙を折り曲げることができれば、この宇宙の果てに到達するのです。これが「指数関数的に増える」ということです。

科学の世界には、私たち素人を錯覚させる「まやかし」がたくさんあります。たとえば地震の度に「マグニチュード〇〇」とニュースで聞きますが、なかなか私たち素人には、マグニチュードを聞かされてもピンときません。しかしマグニチュードは、「1」増えると「32倍」です。そのために「2」増えると「1024倍」、「3」増えると「32768倍」、「4」増えると百倍にもなり、なんと「1048576倍」です。

さて、こうした「指数」から、「数字のマジック」ということを踏まえて、「PCR検査」の「サイクル値(C_C)」について、どうか考えて頂きたいのです。まずPCR検査の「サイクル値(C_C)」に世界的な基準が存在しないことが、そもそもおかしいと思いませんか？なぜなら国によって異なるならば、陽性者を出し易くも、出

しにくくもできてしまうからです。台湾の「サイクル値(C_C)」は「35」、アメリカでも「37から40」、しかし日本では「40から45」です。

PCR検査の技術を使うと、DNAを無限に増やすことができます。そのためにほんのわずかな検体からでも、そこから遺伝情報が読み取ることが出来ます。具体的なやり方は、「ウイルスの遺伝子を含んだ可能性のある検体」、「遺伝子を合成する酵素」、「人工的に合成した遺伝子の断片」など混合液を、100度近くまで温めて、次に60度くらいまで冷まし、またさらに70度くらいまで温めるという方法です。この作業は1回がほんの数分で済みますが、この1サイクルで、1本の遺伝子が2本になります。そして自動的に温度を上下させる機械を使うことで、この作業を何度も、何度も繰り返しれば、2サイクルで4本、3サイクルで8本、4サイクルで16本という具合に「指数関数的」に遺伝子は増えて、30サイクルでは約10億本、40サイクルでは約1兆本になります。

大橋眞教授は、「PCR検査を新型コロナウイルスの検査に使うべきではない」とした上で、次のように述べています。「新型コロナウイルスの場合、感染して発熱などの症状が出るには、少なくとも10万個程度のウイルスが必要だから、感染しているかどうかの判定は20〜25サイクルで検査するのが適切だ」と。つまり日本の「サイクル値(C_C)45」というのは明らかに多く、陽性者が出やすい基準になっているのです。

イギリスのオックスフォード大学EBM(根拠に基づく医療)の研究チームは、「PCR検査によって、死んだウイルスを検知している可能性がある」とも発表しております。この研究チームによれば、PCR検査で陽性になった人が、他の人にウイルスをうつす期

間は1週間程度ですが、しかしPCR検査では、その後も数週間にわたって、陽性結果が出てしまう可能性があるそうです。そのため、「現在のPCR検査では、コロナパンデミックを過大評価している可能性もある」とも述べました。それはつまりコロナに感染したものの、すでに完治しており、感染性の無い人にも、病院に入院させている可能性がある、ということなのです。

実際に「PCR検査」は、死滅したコロナウイルス、つまり不活化ウイルスにも陽性反応が出るのが分かっています。不活化ウイルスとは、ウイルスを熱、紫外線、薬剤などで死滅させたものことです。たとえばある人が一度、「新型コロナウイルスに感染した」と医師から診断され、そして完治したとします。そしてその完治した人が、PCR検査をもう一度受けると、再び陽性反応が出る場合があります。しかしそれはコロナに再感染したわけではなく、死滅した不活化ウイルスの一部が患者の細胞内に残っていて、「PCR検査」がそのウイルスを検出した可能性があるわけです。

また、すでに述べましたように、「PCR検査」は、他のインフルエンザや肺炎クラミジアなどでも、陽性反応が出るのが分かっています。ウイルスの死骸でも、他のウイルスでも、PCRは陽性反応が出るのですから、キャリー・マリスが述べたとされる「PCRをウイルスの検査に使うべきではない」という言葉が、より信憑性を増します。

にもかかわらず日本は、サイクル数を高く設定して、陽性者を出やすくしておきながら、「PCR陽性者≠感染者ではない」にもかかわらず、「感染者」と発表して、「感染者」を水増ししているのです。いや、すでに述べましたように、アメリカでも、アフリカでも、日本でも、「コロナ死者数」は水増しされてきました。スコツ

ト・ジエンセン医師の言葉を借りれば、「たとえバスに轢かれても、PCR検査にかけて陽性ならば、コロナ感染で死亡したことにされてしまう状況」と言えるでしょう。

もうお分かりのように、「コロナパンデミック」というのは、とある目的のために仕組まれた、茶番劇に過ぎなかったのです。『PCRは、RNAウイルスの検査に使ってはならない』という書籍を書かれた大橋真教授は、書籍の中で言います。「中国の武漢から世界に広まったのは、PCR検査である」と。世界にパンデミックを巻き起こしているその原因は、結局のところ「情報」だったのです。もちろんその発信源は政府とマスコミであり、これらを握るのは彼らです。

全体の死者数は増えていない

国際銀行家や中国共産党が持つ思想と彼らの世界的な力、そしてPCR検査の怪しい話、日本や世界で行われているコロナ死者数の水増しの話、これらの話を総合して考えてみると、次第に「コロナの茶番劇」が見え始めてきます。

ちなみにアメリカでは、2020年2月までは、コロナよりも、インフルエンザの方が大問題でしたが、いつの間にかこのインフルエンザは鎮まり、コロナの感染者と死者数ばかりが増えて、ついには「ロックダウン」までしました。普通に考えて、インフルエンザや他の理由で亡くなった方を、新型コロナ死亡者とカウントしている可能性があるわけです。

2021年2月19日現在、新型コロナウイルスの日本の感染者は、累計で42万589人、死者数は7222人です。水増しされ

た数字ですが、13ヶ月の間に7222人が亡くなったわけですが、これは一ヶ月に計算すると522人です。

しかし毎年、モチを喉に詰まらせて窒息死する人は、1月だけでも約1300人です。しかしモチを日本人が恐怖して、政府から「モチ禁止令」が出されたことはありません。2019年のインフルエンザの感染者は1200万人を上回り、水増ししておりませんが死者数は約3000人でした。

2019年1月だけでも、1日に50人以上の方がインフルエンザで亡くなり、1月だけで1500人以上の方が亡くなりました。しかし2019年、テレビでインフルエンザについて、わざわざ連日、感染者数や死者数を報道するようなことはなく、政府から「緊急事態宣言」も出されませんでした。日本の2020年、21年のインフルエンザ患者数も、やはり著しく低くなっております。たとえば2021年8月31日から2021年24日までの21週間のインフルエンザの患者数は、全国でわずかに793人でした。同期間における過去5年間の平均患者総数は約68.5万人ですから、2020～2021年の今季のインフルエンザ患者数は、わずか0.12パーセント程度にとどまっていることになりました。ここまで本書を読み進めて来られた方であるならば、ご理解いただけるでしょうが、残りのインフルエンザにかかっているはずの98.8パーセントの人が、コロナとカウントされていることでしょう。

しかもアメリカでも、日本でも、コロナパンデミックが起きて、死亡者が大量に出ているはずなのですが、全体的な死者数は少しも増えていないのです。むしろアメリカの2020年の死者数は、ここ数年で最も少なかったのです。

こうしたことを考えてみますと、やはり「人類を襲っているコロ

ナ騒動は茶番である」ということが見えてきます。

明らかに恐怖を煽る政府とマスコミ

「コロナウイルスが存在していない」とまでは言いませんが、しかし本書のタイトルにもありますように、コロナ騒動は茶番です。そしてこの茶番に、犬と化した政府とマスコミは、コロナの恐怖を煽ることに余念がありません。政府もマスコミも共犯なのです。たとえばフジテレビ系情報番組『バイキング』は、2020年5月19日の放送で、許されない捏造の偏向報道を行いました。当時はまだ「緊急事態宣言」の最中であり、「間もなく緊急事態宣言が解除されるのではないか？」ということがささやかれている、そんな状況でした。そしてその情報番組では、東京原宿の竹下通りの人混みの映像が映しだされました。番組の結論として、コメンテーターが「緊急事態宣言・自粛要請を守らず、こんな人混みならば緊急事態宣言はまだ解除できない」と述べたのです。しかしこの『バイキング』が報じた東京・原宿の人混みの映像は、5月17日のものなどではなく、3月のものであることが明らかになりました。というのも映像の中に、『マクドナルド』の店舗と商品の「てりたまバーガー」が映っているのですが、この「てりたまバーガー」は、3月4日～4月7日までの限定期間商品であったからです。これを見つけたユーザーが、マスコミの「捏造偏向報道」を見抜き、ネットで炎上しました。するとフジテレビのアナウンサーが謝罪する事態になりました。なぜなら人々は、きちんと「緊急事態宣言」を守っていたために、実際の原宿はガラガラだったからです。普通に考えて、前日に撮影した映像と、数ヶ月前に撮影した映像を間違えることが

あるでしょうか。なぜなら番組制作スタッフの中には、撮影現場に行き、原宿竹下通りを見た者たちがいるはずだからです。ならば一言、「その映像は違います。竹下通りはガラガラでした」と言えば、そんな間違いが起こるはずがありません。出演しているアナウンサーが謝罪しましたが、もしも視聴者が気づかず、ネットで炎上しなければ、本当に謝罪があったのか怪しいものです。

同じような捏造の偏向報道は、テレビ朝日の情報番組『羽鳥慎一モーニングショー』でも行われました。『モーニングショー』の5月20日の放送で、前日の19日に、千葉市JR蘇我駅に、大勢の鉄道ファンが集まったと報道されました。しかしこの放送に対して鉄道ファンが、分析も添えて説明したことで、ネットで炎上しました。なぜならやはりかなり前の映像を流して、「このままでは緊急事態宣言を解除できない」という論調で報道していたからです。

つまりテレビ番組が、そろいもそろって捏造による偏向報道を行って、「このままではパンデミックがおさまらない、だから緊急事態宣言を解除することはできない」という論調で報じたわけです。

はっきり言いますと、日本の大手マスコミで「放送法」を守っているメディアは、ただの一つもありません。「放送法」の4条には、放送番組の編集に当たっては、(1) 公安及び善良な風俗を害しないこと、(2) 政治的に公平であること、(3) 報道は事実をまげないですること、(4) 意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること、を定めております。



今回のコロナ騒動にあたっては、「事実を曲げて恐怖を煽っている」、「意見が対立しているのに、大橋教授等の反対意見はまったく報道しない」という点において犯罪です。犯罪マスコミを見て、その内容を信じて、「緊急事態宣言」という犯罪に加担することを、日本国民はやめるべきなのです。

緊急事態宣言は正しいのか？

徳島大学の免疫生物学名誉教授である大橋眞氏によれば、こうした新型コロナウイルスなどの病原体ウイルスの存在の確認は、基本的に「コッホの4原則」というものを満たす必要があるそうです。「コッホの4原則」とは、ドイツの細菌学者ロベルト・コッホによってまとめられた、感染症の病原体を特定するための指針だそうです。それは次の4点です。1. ある一定の病気には一定の微生物が見出されること。2. その微生物を分離できること。3. 分離した微生物を感受性のある動物に感染させて同じ病気を起こせること。4. そしてその病巣部から同じ微生物が分離されること。専門的で難解ではありませんが、この4点を満たすことで、はじめて病原体として認められ、ワクチンの開発もできるのだそうです。

では、「新型コロナウイルス」は、この「コッホの4原則」をどの程度、満たしているのでしょうか？大橋名誉教授の話によれば、現時点で「新型コロナウイルス」は、第1段階さえ満たしていないのだそうです。実は未だに新型コロナウイルスについて何も分かってはいない、というのが現実なのです。にもかかわらず世界各国の政府は、「緊急事態宣言」や「ロックダウン」を行うばかりか、それらに罰則規定まで設けて、なおかつワクチン摂取を始めているの

です。

しかもこうした「自粛要請」や「緊急事態宣言」は、「免疫学」からすると、実におかしいのです。なぜなら世の中には、もともとウイルスや細菌があふれているからです。たとえば「免疫学」の専門家の意見として、「赤ちゃんが産まれたらペットを飼うと良い」という意見があります。なぜなら乳児期にペットと過ごすことによって、腸内細菌が増えて、「免疫力」が高まると言われているからです。「赤ちゃんは免疫力が弱いからペットを飼えない」と思ったら、実はまったく正反対だったわけです。また、子どもは泥遊びをして雑菌に触れることによって、抵抗力・免疫力を養うことができます。

つまり人間が重いダンベルを持つことで筋肉を鍛えられるのと同じで、私たちは細菌やウイルスに触れることによって、免疫力を高めることができるわけです。なぜなら世の中には、ウイルスや細菌であふれており、人間の肉体はウイルスや細菌などに一度感染することで、体内に抗体を作り、免疫力を高めることができるからです。

そしてこの仕組みを利用しているのが、実は「ワクチン」です。ワクチンというものは、ウイルスや細菌などを処理して作った薬剤のことです。つまり「ワクチン接種」の目的として、安全にウイルスや細菌を体内に一度入れることによって免疫力を高める、という狙いがあるわけです。

では逆に、どういったことをすると、人間は免疫力を下げってしまうのでしょうか？一つには「ストレス」です。「ストレス」とはやりたくないことをする、自粛など我慢しなければならぬことをする、こういったストレスを感じる時に人は免疫力を下げます。つま

り心と体は繋がっているために、心が落ち込むと免疫力が下がってしまうわけです。二つ目は「過食と運動不足」です。つまり体の健康を壊すと、免疫力も下がるわけです。ストレスによって食べ過ぎたり、家に閉じこもって運動不足になると、免疫力は下がってしまうわけです。三つ目は「過度の除菌」です。手洗いやうがいなど適度の除菌は大切です。しかし赤ちゃんがペットに触れたり、子どもが泥遊びをすることで免疫力が高まるように、過度に除菌して、過度に細菌やウイルスを遠ざけ過ぎても、やはり免疫力が落ちてしまうわけです。

これまでインドネシアでは、「肌の色」と「社会的階層の高さ」が関連づけて考えられる風習から、インドネシアの人々は美白意識が高く、「日光浴は観光客のすることだ」と考えられてきました。しかし「日光浴で新型コロナウイルスを撃退できる」と話題になり、インドネシアで今、「日光浴」がブームになっています。なぜなら人間は日光を浴びることによって、「ビタミンD」という万能ビタミンを体内で生成することができます。元北里大学の教授で、日本細菌学会名誉会員の熊沢義雄氏は次のように述べています。「食事や日光浴などによって得られる」ビタミンDには、免疫系の細胞の働きを良くする作用がある」と。

これらのことから分かりますように、経済を破壊するばかりか、免疫力まで下げる「緊急事態宣言」は、明らかに間違っているのです。ちなみにドイツの大手新聞『デイ・ヴェルト』の2月7日の報道によれば、ドイツ政府は、感染症を扱っている『コッホ研究所』や各大学の御用学者たちにお金を支払って、悲惨なパンデミックを演出させて、憲法違反の「ロックダウン」を正当化していたことも分かっております。日本でも

今後、「緊急事態宣言」に罰則が設けられて、より自由が無くなつていきますが、ドイツと同じようなことは、日本でも行われていることでしょうか。

無意味どころか悪いことばかりのマスク着用

そして医師にして科学者であるジュディ・マイコヴィツという方も、次のように言っています。「マスクを着けるのは、実際に自身のウイルスを活性化させてしまいます。自分のコロナウイルスを再活性化して病気になるんです。なぜビーチをクローズするんでしょう？ 狂気です」と。

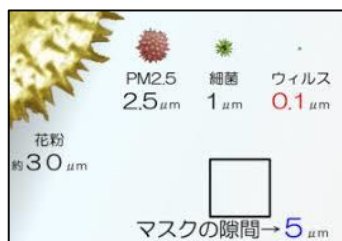
元から私たちの身の回りには、ウイルスがあり、これが原因で風邪になることもあります。そして科学者ジュディ・マイコヴィツ氏によれば、「マスクを着けることは、かえってコロナウイルスを再活性化させてしまう」と、驚愕の事実を述べているわけです。しかもビーチをクローズすることは、「狂気の沙汰だ」とまで彼女は言っています。なぜならビーチは、日光浴も出来るばかりか、砂や海水から雑菌に触れることで、私たちは免疫力を高めることもできるからです。

また、ドイツのマルガレータ・グリス・ブリソン博士によれば、マスクをして、自分が吐いた息を吸うことは、間違いなく酸素不足になるそうです。そして人間の脳は、酸素不足に非常に敏感だそうです。たとえば脳の海馬というところには、酸素が不足すると、わずか3分も生きられない神経細胞があるそうです。ですから脳の警告症状として、頭痛、眠気、目眩、集中力の低下があります。しかし脳細胞が慢性的な酸素欠乏になると、それらの警告症状は消えて、

アルツハイマー病やパーキンソン病などになります。

さらにマルガレータ博士によれば、幼児や子どもたちにとって、マスク着用は絶対に禁物であると断言しています。なぜなら子どもたちには、学ぶべきことがたくさんあるため、彼らの脳は大人よりも活発に活動しているからです。そのために若者たちの脳は、大人よりも多くの酸素を必要としています。ですからマスクを着けることを子どもたちに強要して、彼らを酸素欠乏状態に置くことは、彼らの脳の発達を阻害してしまうわけです。その大きなダメージは、二度と元に戻すことができないそうです。

しかもウイルスの大きさに対して、マスクの網目は50倍以上もあるために、実はウイルスからしてみると、マスクはスカスカの状態です。マスクはウイルスには効果が無いばかりか、悪いことだらけなのに、WHOや前安倍政権は、必死にマスク着用を呼びかけたわけです。マスクがマスクのリスクについて何も報道しないこともあって、いつの間にか日本中がマスクだらけです。それは私たちが「家畜」とみなされて、彼らに誘導されている悲しき証なのです。



ワクチンに入っている奇妙な成分

改めて述べますが、「COVID-19」、あるいは「新型コロナウイルス」と呼ばれているものは、「コッホの4原則」の最初のステップさえクリアしておらず、新型コロナウイルスについて、人類は未だほとんど何も分かっていない状態です。にもかかわらず、なぜかア

アメリカの製薬会社やバイオ医薬品メーカーは、ワクチンの供給を始めました。日本でもワクチン摂取が始まりました。

では、ワクチンは本当に安全なのでしょうか？

実はすでにアメリカではロバート・ケネディ・ジュニアが、これまでワクチンを問題視してきました。ケネディ・ジュニアは言いません。「ワクチン接種はホロコースト（大虐殺）と同じ」と。「さすがにホロコーストとは言い過ぎではないか？」と思われるかもしれませんが。ですからこのロバート・ケネディ・ジュニアの言葉を、本書でこれから検証してみたいと思います。

たとえば多くの製薬会社が、様々な種類のインフルエンザワクチンを販売しておりますが、インフルエンザワクチンの中には、「チメロサル」という成分が入っているものがあります。「チメロサル」とは、「水俣病」の原因になった水銀です。

あるいは添付文書を読めば分かりますが、『サーバリックス』という子宮頸がんワクチンには、「イラクサギンウワバ」という蛾の幼虫の細胞が入っています。あるいは『ガーダシル』という子宮頸がんワクチンには、成分として「ホウ酸ナトリウム」というものがあります。この成分は、ゴキブリを殺すために用いられている、「ホウ酸」の主たる毒物です。こうした成分が入っている子宮頸がんワクチンを接種した世界中の多くの少女たちが、急性アレルギー症状、昏睡に陥り、中には死亡したりしています。日本でも子宮頸がんワクチンを接種したことをキッカケに、多くの少女たちが副反応に苦しんでおります。年若き少女たちが、「突然の失神」、「過呼吸」、「けいれん」、「歩行障害」、ペットボトルのフタさえ開けられなくなるほどの「握力の低下」など、苦しい副反応と今も戦っております。

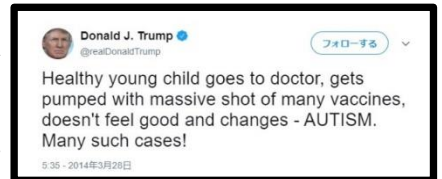
皮膚にもある少女は看護師になることを夢見て、勉強や部活に励む活発な子でした。しかし「子宮頸がんワクチン」接種をキッカケに、人生が大きく狂ってしまいました。少女の母は涙ながらに言います。「（娘は）四六時中、頭の中がガンガンし、自分の意思とは関係なく、しびれたり、つっぱったり、感覚がなくなったりするの

が、よほどつらかったのだと思います。自分で自分（体）を叩き、『消して、消して』と言ったり、『もうこんな体はいらない』と。『子宮頸がんワクチン、副反応と闘う少女とその母たち』という書籍を書かれた黒川祥子さんによれば、ワクチンの副反応に苦しむ少女たちの中には、家から出かけることも容易ではなく、そればかりか床をただ這いつくばり、まともに話すことさえできない少女さえいます。

あるいは『米国ワクチン情報センター』という非営利団体の調査によつて、「胎児の細胞」がワクチンの成分に使われていたことも明らかになっています。これも添付文書を読むとはっきりと分かります。肉体的には健康であったが、精神的には病んでしまったために中絶することになった妊婦の胎児から、「MRC-5」というワクチンの原材料が開発されていたのです。水銀、蛾の幼虫、ゴキブリ駆除のホウ酸、胎児の細胞など、誰がどう考えてもワクチンの原料は不気味なものばかりです。

これは厚生労働省公式アカウントから動画をご覧いただけます、ある男性の娘さんは、「MMRWワクチン（三種混合）」が始まった1989年に産まれ、1歳10か月になった時に、予防接種で「MMRWワクチン（三種混合）」を接種しました。するとその幼い赤ん坊は、ワクチン接種からわずか14日後に、重い脳症にかかり、自分では何ひとつできない身体になってしまいました。

実はトランプ元大統領も、ツイッターで次のようにつぶやいております。「健康な子どもが医者を訪れ、沢山のワクチンを大量に打たれ、体調を崩す。自閉症だ。なんと多くの症例がある事か！」と。あるいは2018年10月25日、『CDC』（米保険福祉センター）において、予防接種に関する委員会が開催され、看護師として20年間も勤務されたローリ・シミネリさんが、涙ながらにスピーチを行いました。「私は地元の病院から引退したばかりです。私の同僚も、私自身も、誰もインフルエンザ予防接種の効果は信じてはいません。私は（看護師を）引退して良かったと思います。なぜなら今、こうして（CDCの）あなた方に話すことができるからです。【中略】（ワクチン接種について）私の10歳になる孫の例をあげましょう。当時、彼はとても健康な状態で、美しい2歳の子どもでした。その子がワクチンを受けて突然、重度の自閉症になってしまったのを私は見ました。」（動画『元看護師「インフル予防接種は効果がなく有害」と政府委員会で発言』より）



本小冊子では、未だに「彼らの目的」を語っておりませんが、彼らの目的の一つに、実はワクチン摂取があります。

世界で起きているコロナワクチン健康被害

新型コロナウイルスで使用するワクチンは、従来のワクチンとは大きく異なるワクチンです。今現在、世界で使用されているワクチンは、ウイルスが死んだ不活性化ウイルス、もしくは毒性が弱い弱毒化ウイルスを体内に注射することで、肉体の持つ免疫力がウイルスに対する抗体を作り出す、というものでした。しかしコロナワクチンは、「メッセンジャーRNA」という遺伝子を体内に注入することで、体の細胞が「ウイルス抗原蛋白」というものを生成させます。

コロナウイルスを見ると周囲にトゲトゲがありますが、開発者側の話によれば、このトゲトゲした部分だけを、体の中で安全に大量に作ることで、コロナウイルスに感染することなく、コロナウイルスに対する抗体を高めることができるそうです。そして開発者の話によれば、体内に注射した「メッセンジャーRNA遺伝子は、不安定な物質のために、自然に分解されて、細胞外へ排泄される」と言うのです。

しかし世界中で多くの副反応がすでに起きています。日本で始まるコロナワクチンは、『米ファイザー社』と『独ビオンテック社』が共同開発したワクチンですが、1月中旬に恐ろしいことが起こりました。

ノルウェーで両社が開発したワクチンを接種した約4万2千人のうち33人が、発熱や吐き気などの副反応を示し、そればかりか

数日以内に亡くなった方までいました。これに対して、『ファイザー社』の広報担当者は、次のような見解を示しています。「ご冥福をお祈りするとともに、ご家族の皆様にお見舞いを申し上げます。ノルウェー政府は、老人ホームの入居者などに対してワクチンの接種を優先していますが、その多くは、非常に高齢でもとから基礎疾患（病）を有しており、中には終末期の方もいます。

ノルウェー政府は、本剤の接種と死亡の関連性は完全には否定できないものの、しかしワクチン接種との直接的な因果関係を示すエビデンスは得られていない、と表明しています。当社といたしましては、今回の件を受けて、ワクチン接種のガイダンスを改訂し、ワクチン接種によって得られる利益と危険性を慎重に評価するよう求めています」と。

ここまで本書を読まれてきた方ならば、この『ファイザー社』の返答を信じることも、自分からワクチンを接種することも、おそらくないことでしょう。

医療崩壊の理由

さて、本章では「コロナは茶番である」ということを証明するにあたり、主にその「証拠」について述べてきました。

私は「新型コロナウイルスは存在していない」とは思っておりません。おそらく存在しているのでしょう。

しかしこれまでも「コロナウイルス」は存在してきました。そのウイルスに感染することを、私たちは「カゼ」と呼んできました。そしてたまたま「カゼ」で亡くなる人もおりましたが、大したものではないことなど、誰もが知っていることです。

その大したものではないウイルスを、彼らに操られた政府とマスコミが、大したものに見せかける演出をしてきて、世界中がパニックになっている、それが真相なのです。

しかしこう思われる方もいるでしょう。「では医療崩壊は？」と。アメリカなどでは、実はガラガラの医療現場が明らかにりましたが、日本では医療崩壊が起きているとされています。しかし日本の医療体制にそもそも問題があります。

日本の医療法では、各都道府県の知事は、公的な病院に対しては指示を出せませんが、しかし民間の病院に対しては指示を出せません。しかも欧米では公的な病院が多いのに対して、日本は正反対で、8割を超える病院が民間です。そしてその病院の多くが、コロナ患者を受け入れていないために、ごく一部の病院にばかり、PCRを受けた陽性者の負担が集中しています。

その理由として、日本ではコロナウイルスが「第2類相当の指定感染症」とされているからです。「感染症法」という法律があり、この法律に基づいて、1類感染症から5類感染症まで分類されます。そしてこの「指定感染症」の分類によって、扱う病院が変わってくるために、ごく一部の病院だけがPCR陽性者を受け入れているために、「医療崩壊」ということが言われているわけです。

上久保誠人・立命館大学教授をはじめ多くの有識者、政治家、そして医療関係者が、「新型コロナウイルスを『指定感染症』から外すべき、あるいは季節性インフルエンザと同程度の五類感染症扱いにすべきだ」と述べているように、「指定感染症」からコロナを除外すれば、「医療崩壊」など起こらなくなります。なぜならいろいろと問題は山積みではありますが、一応、「日本の医療は世界トップレベル」と言われ、人口当たりのベッド数も世界一だからです。

それでは本章をしめくくるにあたり、簡単ではありませんが「PCR検査」について、これまで述べてきたことをまとめてみたいと思います。

① 国際銀行家や中国共産党など、世界には人間の命を何とも思わない思想を持ったたちが存在しており、彼らは世界中の政府やマスコミに対して、とても大きな力を持っている。

② PCR開発者キャリー・マリスが「PCRをウイルス検査に使うべきではない」と述べていた可能性がある。

③ 徳島大学大橋名誉教授も、「『PCR検査』はコロナウイルスの感染検査には向いていない」と述べている。

④ 一般社団法人『日本疫学会』が「PCR検査の正確性が分からない」とホームページに書いている。

⑤ 実際にタンザニアの大統領が、パパイヤやウズラの卵、他のインフルエンザウイルスに「PCR検査」をかけると陽性反応が出た。

⑥ 『米国疾病予防管理センター（CDC）』が「PCR検査陽性が新型コロナウイルスに感染しているとは限らない」と述べている。

⑦ 厚労省の職員も、世界中の研究者たちも、「PCR陽性者をコロナ感染者としているが、その科学的根拠はない」と自覚している。

⑧ PCR検査のサイクル数に、世界的な基準があるわけではなく、サイクル数を上げれば無限に遺伝子を増やしてしまうという欠点がある。

⑨ PCR検査は、インフルエンザや肺炎クラミジア、不活化ウイルスなど、他のウイルスや死滅したウイルスにも陽性反応が出てしまう。

⑩ 日本でも、アメリカでも、コロナの感染者、死者数が水増しされており、実際に全体の死者数は増えてはいない。

⑪ マスコミが明らかに捏造報道を行い、恐怖を煽り、緊急事態宣言を解除できない方向に誘導している。

⑫ 緊急事態宣言が感染症対策からすると明らかに矛盾しており、むしろ自宅にこもり、ビーチを閉鎖し、日光浴をしないことは、免疫力を下げ健康にも悪い。

⑬ WHOや政府はマスクを推奨しているが、しかしマスク着用は脳の海馬を死滅させ、子どもの成長にも悪く、なおかつウイルス対策にはなっていない。

⑭ 『母子手帳』が原因で、子どものころからワクチンに慣れ親しんでいるが、しかしワクチンには、水銀、蛾の幼虫の細胞、ゴキブリ駆除に使用するホウ酸、堕胎された胎児の細胞などが使用されており、これまで子宮頸がんワクチンをはじめ、多くの健康被害

を出してきた。

⑮ すでにコロナの遺伝子組み換えワクチンを打つことで、世界中で健康被害が出ている。

ざっとこんな感じですが、しかしコロナワクチンよりも、何よりも恐ろしいのが、ワクチン接種を機に彼らが作るうとしている暗黒の社会なのです。次章でそのことを説明してまいります。

第四章 何の目的に？

彼らが目指す新世界秩序

「コロナ騒動は茶番である」、これを説明するために、「誰が」、「どのような方法で」、「その証拠」について述べてきましたが、いよいよ本章では、「何のために」ということについて述べたいと思います。

単純に言って、すでに彼らは、ありとあらゆるものが手に入れたために、彼らに残されている欲望といったら支配欲くらいなわけです。つまり彼らの野望とは、自分たちに都合の良い世界秩序、「新世界

秩序」を築くことです。

写真にもありますように、「我々の計画に同意せよ」、「New World Order (新世界秩序)」といった文句は、彼らが発行している1ドル紙幣にも明確に書かれています。

実は1ドル紙幣には、ラテン語で「ANNUIT COEPTIS (アンヌイト・コエプティス)」、「NOVUS ORDO SECLORUM (ノヴス・オールド・セクロールム)」と書かれてあり、この「NOVUS ORDO SECLORUM」は「この時代の新しい秩序」という意味です。しかしラテン語であるために、未だにアメリカ人はじめ世界中の人々が、こんな身近な重大な事実さえ見落としているわけです。

この ^{ニューワールドオーダー} NWO 計画は1ドルの裏のみならず、アメリカの事実上の国章の裏にも「新世界秩序」、「計画に同意せよ」と記されており

ます。はつきり言って彼らは、我々のことを「家畜」と考えて、完全にバカにし切っておりま

す。そのために彼らは、こうした舐めきったことを平然とやっているのです。もしも貴方が農場を経営していたとして、どの牛を何日に出荷して、どの豚を何日に屠殺して、どの鶏を何日にしめるか、といった予定が書かれた紙を、家畜たちに見



obverse

reverse

Annuit Coeptis = 計画に同意せよ



Novus ordo seclorum = 新世界秩序



られたとしても、貴方は困らないはずです。これと同様に、私たちを「家畜」と見なしている彼らは、平然とこうしたことをやっているのです。

NWO計画と真正面から戦ってきたのが、アメリカや日本のマスコミでは、「独裁者」として報じられてきた、ロシアのプーチンであり、あるいはリビアのカダフィであったり、イラクのフセインなどであり、シリアのアサドなどであり、そしておそらくトランプもそうです。

プーチン大統領は、公の場でロシア国民に向けて言いました。

「私たちはソ連崩壊後の数十年間、この世界秩序の確立と、それを固定させる企てを観察してきた。

単独権力によるこの世界秩序は、どのような犠牲を払ってでも、その地位を維持するつもりなのだ。

この権力は、彼らは全てを許され、その他の者はこの権力が許可することのみ、利益の為にみに許されると思っている。

このような世界秩序にロシアは決して満たされたいだろう。もし、このような世界秩序を望むなら、半占領下で暮らしたいのだ。

しかし私たちは、それを望まない。しかし私たちは戦争も望んでおらず、皆と協力しあいたい。」

「911テロ」が起こる十一年前の1990年9月11日に、当時のアメリカ大統領ジョージ・ブッシュは、湾岸戦争が始まる直前の連邦議会において、『新世界秩序へ向けて Toward a New World Order』というスピーチを行い、新世界秩序を築くことを世界的に向けて宣言しました。

ブッシュ大統領は彼らの仲間であり、プーチン大統領は彼らと戦っているのですが、しかしマスコミは正反対の論調で報道し

ました。なぜなら彼らがマスコミを牛耳っているのですから、彼らが「悪」とする人物や組織が実は善であり、彼らが「善」とする人物や組織が「悪」であることが、世界にはたくさんあるからです。信じがたいかもしれませんが、彼らの目的は「新世界秩序」を築くことです。

堂々と掲げる人口削減計画

では、彼らはどんな世界の秩序を築きたいのでしょうか？

それを理解するためには、一冊の書物に目を向ける必要があります。それは『成長の限界』という書物です。スイスに本部を置くシ

ンクタンク『ローマ・クラブ』は、1972年に第1回報告書『成長の限界』を出版しました。この書物の結論として、「温暖化」、「食料問題」、「エネルギー問題」などによって、すでに地球は限界に達しており、今の

まま人口が増え続けたら、地球そのものが持たない、と結論づけております。

この書物と同じような思想として、18世紀に、トマス・ロバート・マルサスという経済学者が、『人口論』という書籍を出版しています。この書籍の内容を簡単に述べると次の通りです。

「人口は、人間の本能によって急速的に増加するのに対して、食糧は、それほど増加することはない。

そのために人口増加によって食糧不足に陥ることは歴然である。

しかし『貧困』は、死亡率を高めて人口を減らす要因となり、さらに『悪徳』も、出生率を低める予防になる。



よって人口増加の抑止力として、『貧困』と『悪徳』は認められるべきである」

つまり経済学者のマルサスは、「人口は減らすべきであり、そのためには『貧困』と『悪徳』が必要である」と述べているわけです。

そして実際に人類の人口は今、「指数関数に増えている」という状態にあります。

そして密かに噂されていることとして、「世界の人々が日本人と同じ豊かな暮らしをするためには、地球が2個必要であり、アメリカ人と同じ豊かな暮らしをするためには、地球があと5個は必要だ」と噂されております。つまり「今のまま人口が増え続けたら、食糧難、水不足になり、エネルギー不足になって、地球が限界に達して、人類は滅んでしまう」という議論が密かにされているのです。

すなわちこの「地球」という星において、私たち日本人やアメリカ人が、豊かな暮らしをしているために、「このまま人口が増加していけば、食料難、水不足に結びつくかもしれない」と、そのような考える人たちがいるわけです。「だから人口を減らそう」、それが彼らの表向きの言い訳です。

そして「1ドル紙幣」に「新世界秩序」と書いたりしているように、私たちのことをバカにし切っている彼らは、ジョージア州にわざわざ石碑まで建てて、自分たちの計画内容を明らかにしています。その石板を『ジョージア・ガイド・ストーン』といいます。

この『ジョージア・ガイド・ストーン』の石板には、英語、ヘブライ語、中国語などの8つの言語、4つの古代言語から記されており、そこには人類に対する恐ろしいメッセージが刻まれております。「1、大自然と永遠に共存し、人類は5億人以下を維持する」

すなわち彼らは、「家畜」と考える人類の人口を、10分の1以

下にまで減らそうとしているわけです。なぜならそれが彼らにとって都合の良い管理し易い人数だからです。

農場でも、家畜が多すぎると管理し切れなくなりません。そのために、彼らは管理し易い適正人口として、「5億人」という恐ろしい数字を導き出したのです。

「人口削減」を語るビル・ゲイツ

実際、『マイクロソフト』創業者のビル・ゲイツは、明確に人口削減を公言しております。

ロスチャイルドには遥かに及ばすとも、莫大な資産を持ち、そして慈善事業に熱心なことから、「天使」と考えられているのがビル・ゲイツです。しかし『聖書』には、ルシフェルとか、サマエルという天使が墮天して、悪魔になってしまふ光景も描かれております。あるいは『聖書』には、「悪魔も天使を偽装する」という言葉があります。

そしてこのビル・ゲイツという人物も、いつしか思想的に病んでしまったところがあります。なぜならビル・ゲイツは、2010年の『TED』というスピーチ番組の中で、「Innovating to zero! (ゼロへの革新)」という演台で、はっきりと次のように語っています。

「何よりも人口が先だ。現在、世界の人口は68億人である。これから90億まで増えようとしている。

そんな今、我々が新しいワクチン、医療、生殖に関する衛生サー



ビスに真剣に取り組めば、(人類の人口を) およそ10〜15%は減らすことができるだろう」

つまりビル・ゲイツ氏は「成長の限界を迎えたこの地球において、人類が地球温暖化問題を乗り越えていくためには、人間が排出するCO₂の量をゼロに向けていかねばならない。そしてそのためには人類の人口を削減する必要がある、その人口削減計画の手段としてワクチン接種が最も有効であり、ワクチンを世界中の人々が接種すれば、自然な流れで人口を削減することができる」と、明確に述べていたわけです。彼のこのスピーチは、今でもネットでご覧になれます。

また2015年に『TED』に出演した時も、ビル・ゲイツは「もし次のアウトブレイクが来たら？ 私たちの準備はまだ出来ていない。1000万人以上の人が亡くなるような災害があるとすれば、それは核戦争ではなくウイルスである」と明確に述べていました。つまりビル・ゲイツは2015年の時点で、これから「パンデミック」が起きることを、はっきりと予言していたわけです。この動画もネットでご覧になれます。

そして2019年10月18日、『ジョンズ・ホプキンス健康安全保障センター』という組織が、『WEF(世界経済フォーラム)』、『ビル&メリнда・ゲイツ財団』と共同で、ニューヨークにおいて、『EVENT201』というものを開催しました。この「コロナ騒ぎ」が始まる直前に行われた2019年のこのイベントの内容は、まさに、間もなく始まるパンデミックをシミュレーションしたものでした。このイベントの動画も、もちろんネットで見られます。

『WHO』への拠出金が世界で一番多いのはアメリカでしたが、しかしトランプ元大統領は、『WHO』から脱退することを表明し

ました。そのためにアメリカが抜けた今現在、『WHO』への拠出金が世界で最も多いのは、『ビル&メリнда・ゲイツ財団』です。

そしてこの『ビル&メリнда・ゲイツ財団』こそ、インドやアフリカなどの世界中で、実際に子どもたちにワクチン接種を行って、数十万もの子どもたちを弛緩性麻痺にしてみました。その証拠として、インドの『聖ステイブンス病院』の小児科医ネートウ・バシシュト博士とヤコブ・プリリエル博士が、『WHO』と『ビル&メリнда・ゲイツ財団』を激しく批判しております。

この2人の博士によれば、インドでは非ポリオ性急性弛緩性麻痺(PAP)の症例が急増しており、その麻痺の原因を辿っていくと、ビル・ゲイツが慈善家として贈っていたポリオワクチンが、頻繁に投与されていたことが明らかになったのです。インドでは約50万人もの子どもたちが麻痺になってしまい、すでにインドの医師たちは、ビル・ゲイツを訴えております。

そしてこうした事実は、すでにロシアの国営放送でも報じられました。今、真実に気がついている人々から、彼は「キル・ゲイツ」と呼ばれております。

そのキル・ゲイツは、2020年5月に次のように述べました。「ワクチン無しに日常は戻らない」、「ワクチン開発のためなら、自分は数千億円を無駄にしても構わない」、「誰がワクチンを接種したのかを示す、何らかのデジタル証明書を手にすることになる」と。

つまりキル・ゲイツは、「ワクチンで人口増加を止められる。そしてもしワクチンを打たず、証明書を持たないのならば、普通の暮らしはさせない」と述べたわけです。

WHOを信じてはいけない

今の「コロナ騒動」で大きなカギを握っているのが、『WHO』です。そして本書の冒頭で、「人間は権威に弱い」という話をいたしました。この『WHO』に対して、人類は「権威」を感じておりません。

しかしこれまでの報道を見ても分かりますように、『WHO』と『中国共産党』はとても仲良しです。

中国・武漢発の新型コロナウイルスであり、これだけ世界にウイルスが拡散してしまった事実を見ても、中国政府のコロナ対応には、明らかに目にあまるものがあります。しかし『WHO』は、その中国共産党を常に称賛し続けてきました。

なぜなら『WHO』というのは、『国連』の下部組織であり、『国連』のもとをたどれば第二次世界大戦の戦勝国です。だからアメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国が「常任理事国」として幅をきかせているわけです。

では、この国連本部ビルがどこにあるかと言えば、アメリカ・ニューヨークです。これはロックフェラー財閥が寄贈した土地です。そしてすでに述べましたように、そのロックフェラーは中国共産党を大絶賛し、彼は自身の著書『回顧録』の中で、「一つの世界を構築しよう」とたくらんでいる」ということを認めています。

また、国家を超えた力を持つロスチャイルドですが、「国連の主要なポストは、ロスチャイルド財閥やロックフェラー財閥の関係者が占められてきた」という噂は昔からあります。

国連は「平和」を目的に創設されているはずですが、この地球という星に、国連がどのような「平和」を築きたいのか、それは定かではありません。しかしこれまでの一連の流れを見ると、「彼らに

とって都合の良い平和」と考えている可能性は十分にあります。

なぜなら国連は、中共が行っている「ジェノサイド」には何の批判もせずに沈黙しているからです。

この腐敗臭がかなりする国連の下部組織に『WHO』があり、その『WHO』は中国政府のコロナ対応をベタ褒めするばかりか、「ワクチンで人口削減を」などと述べているビル・ゲイツが、この『WHO』に最も多くの拠出金を出しているわけです。そして私たちはこの『WHO』に「権威」を感じ、そしてその『WHO』が「コロナ騒動」の大きなカギを握っているわけです。

しかし普通に考えて、『WHO』は彼らの道具と言えます。なぜならロスチャイルドをはじめとする国際銀行家たちには、明確な「目標」があり、彼らならば、その「目的」を達成させるために、「国連」くらいは十分に作れるからです。

アメリカの「通貨発行権」を持ち、ユーロの発行権までも持ち、イギリスの代わりに『スエズ運河』を購入し、「ロシア革命」を陰から操り、中国共産党と同じ思想を持ち、医学や経済学の確立に携わっている彼らが、「さすがに国連やWHOまでは作れない」と考えることのほうが困難です。

すでに彼らの目的の一つとして、「ワクチン接種で人口削減」という恐ろしい話が出てきましたが、実は彼らの目的達成のために、『国連』は作られ、その下部組織として『WHO』は築かれたと見るのが、正しい視点と言えるでしょう。

ですからここでどうか、ユダヤ人を自称する者たちの『タルムード』の言葉を思い出して欲しいのです。「ユダヤ王は真の世界の法王、世界にまたがる教会の総大司教となる。世界はただイスラエル人のためにのみ創造されたるなり。すべての民を喰い尽くし、すべ

ての民より掠奪することは、彼らすべてが我らの権力下に置かれる時に始まるべし。」

ムーンショット計画の本当の意味

では、今回の「コロナ茶番劇」を含めて、彼らが「人口削減」を行って、すでに中国共産党が創り上げていているような奴隷家畜社会、「新世界秩序」を築きあげたいのだとして、その世界とは、具体的にどのような世界なのでしょう？

「コロナ騒ぎ」が始まった2020年1月23日、政府は「ムーンショット計画」などという訳の分からない計画を発表しました。

内閣府は2020年の初めに、次のようにホームページ上で述べております。「第48回総合科学技術・イノベーション会議（2020年1月23日開催）において、ムーンショット目標が決定されたので、お知らせいたします」と。

つまり『ムーンショット計画』というのは、都市伝説でも、陰謀論でも何でもなく、実際に政府が現在ただ今、打ち出している目標計画なわけです。実際にこの計画は、内閣府のホームページでもご覧になることができます。

この計画によると、2050年までに、遠隔操作できる多数のアバターとロボットを組み合わせて、現在とはまったく異なる科学的未来社会を構築するそうです。

「アバター」とは、インドの神話の「化身」が語源ですが、現在



では、ゲームやネットの中で使用する自分の「分身」のことを意味しています。つまりネットなどの仮想空間の中で、自分が設定したキャラクターのことを、「アバター」と言うわけです。

すなわち内閣府は、「コロナ騒ぎ」が始まった2020年1月に、この『ムーンショット計画』を発表し、「ロボットとアバターを組み合わせた科学的未来社会を構築する」などという、訳の分からないことを言い始めたわけです。

この計画に先立って、国民の目がコロナの緊急事態宣言に集中している2020年の4月、5月に、すでに「スーパーシティ法案」が衆参両議院でスピード可決されました。

「スーパーシティ」とは、AI（人工知能）とビッグデータを活用して、自動運転、キャッシュレス、オンライン医療、オンライン教育などを実現させた「未来都市」のことです。

また、すでに政府は、「コロナパンデミックに合わせて、「新生活様式」なるものを国民に要求し、オンラインでの帰省、仕事、勉強、飲み会をするように呼びかけております。そして安倍政権が終わり、菅政権になると「デジタル庁」が設置されることが決定し、「脱ハンコ」、「デジタル化」の流れが出来上がっております。

つまりすでに「スーパーシティ構想」は開始されているわけです。2020年3月18日の「国家戦略特別区域諮問会議」では、「スーパーシティ構想」の資料として、中国の杭州市がモデルにされて



いました。この杭州市では市内の43%をカバーする4千台超の監視カメラが設置されており、もしも何らかのトラブルがあれば、AI（人工知能）が約20秒という速さで警察に通報します。

すでに杭州市のコンビニは無人化しており、キャッシュレスとなり、PASMOやスマホすらも必要としません。なぜなら商品をレジに運んで顔認証すれば、それで支払い完了、あとは銀行口座から引き落とされるからです。杭州市内のホテルもルームキーは不要で、顔認証によって、自分が宿泊している階にしかエレベーターは止まりません。

こうした「顔認証」と「監視カメラ」が行き届いた中国・杭州市をモデルに今、日本政府は「スーパースイテイ構想」を押し進めているわけです。だから菅政権は、「デジタル庁」を設置して、「脱ハンコ」、「デジタル化」などと述べているわけです。

実際に、人材派遣会社『パソナ』代表であり、民間議員でもある竹中平蔵氏は、「スーパースイテイ構想」の講演等と、日本や中国で行い、中国では人気を得ています。「民間議員」とは内閣府の重要会議に参加する、国民から選挙で選ばれたわけではない有識者のことです。

そしてこの「スーパースイテイ」を現実のものにするために、すでに5Gのアンテナが街という街に、設置され続けております。

極めて重要な真実を述べますが、「コロナ騒ぎ」によって、すでに『ムーンショット計画』は確かに動き始めております。

つまり「コロナ騒ぎ」↓「ワクチン接種」↓「新生活様式」↓「スーパースイテイ構想」↓「デジタル化」↓「ムーンショット計画」というこの流れは、陰謀論でも都市伝説でも何でもなく、公の事実なわけです。

仮想空間で眠らせる

では、『ムーンショット計画』の真の狙いとは、果たして何なのでしょうか？

内閣府がホームページ上で公表している目標計画では、「環境」とか、「医療」とか、「教育」とか、「食糧」とか、いろいろなことを述べて、それがまるで国民のためになるかのように語っております。しかしその前提として「ロボット」、「AI」、そして「アバター」が存在することを忘れてはなりません。

ですから『ムーンショット計画』の最初の目標を見れば、彼らが何を目的としてこの計画が進められているか、それが分かるわけです。

「ムーンショット目標1…2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現」

そしてこの目標の補足として、以下の言葉があります。「2050年までに、望む人は誰でも身体的能力、認知能力及び知覚能力をトップレベルまで拡張できる技術を開発し、社会通念を踏まえた新しい生活様式を普及させる。」

この2つの言葉を合わせるとこうなります。「人間を肉体や頭脳から解放し、時間や空間からも解放し、なおかつ望む人には身体能力や認知能力を最大限まで拡張させる」と。

しかしもしもそんなことが可能ならば、それは私たち人間が、まるで現実世界から逃避して、仮想空間の中で生きるような、そんな恐ろしい時代が到来することを意味しております。

すでに政府は「新生活様式」として、家族や友人との食事も、オンラインを国民に勧めておりますが、そんなレベルではない、という事です。

学校に行くのも、旅行に行くのも、買い物に行くのも、友達と出かけるのも、それぞれの国民が自宅で自分のアバターを使って、仮想空間の中で、学んだり、遊んだりする時代を到来させる計画、それが『ムーンショット計画』なわけです。

大人にも人気なゲームに、『あつまれ どうぶつの森』というゲームがあります。外出自粛が続くために、このゲームに夢中になる人が増えており、発売からわずか10日間で約260万本も販売しました。

このゲームでは、プレイヤーは架空の世界にある無人島でアバターを動かして、気ままにスローライフを暮らすことができます。その仮想空間の中で、自分だけのオリジナルの島を少しずつ発展させて、近所の人と話をしたり、買い物をしたり、手紙を書いたり、好きなことができます。ゲームの仮想空間の中では、現実世界のように、晴れの日もあれば雨の日もあり、天気によって出てくる魚や虫の種類も変わります。そればかりかこのゲームでは、仮想空間の中で四季も楽しめて、春には桜が咲き、夏には蝉の音が響き、秋にはススキが風になびき、冬は雪景色を楽しめます。それが人気ゲーム『どうぶつの森』です。

『どうぶつの森』はゲームですが、しかし実際に政府は、『ムーンショット計画』によって、このゲームの中の仮想空間を実際の人生に当てはめてしまおうと、言っているわけです。

たしかにVRというバーチャル・リアリティを使い、仮想空間の中でアバターを動かせば、自宅にいながら、学校に行く疑似体験をして勉強することも、職場に行く疑似体験をして仕事することも、旅行に出かける疑似体験をして遊ぶことも出来てしまいます。買い物に行く疑似体験をすれば、後から『Amazon』が商品を届け

てくれます。

しかしそれはまるで、スピルバーグ監督の映画『レディ・プレイヤー1』のようです。この映画の舞台は近未来の2045年、地球にはおびただしい環境汚染が起こり、政治機能は麻痺しており、世界そのものが荒廃していました。そのために人類の大半が、スラム街で暮らさなければならぬ状況に陥り、人類の多くが「オアシス」と言うVRの仮想空間で、現実逃避して入り浸っていました。

映画『レディ・プレイヤー1』の舞台は2045年でしたが、日本の政府は2050年には、まるでこの映画を現実のものにしようとしているようです。

「コロナ茶番劇」とほぼ同時に始まった「ムーンショット計画」、そして「スーパーシティ構想」とは、AIとビッグデータで生活全般を便利にした未来都市だそうです。この「ビッグデータ」という名前は、単なる偶然なのでしょうか？

なぜならジョージ・オーウェルという作家が描いた『1984』という小説があります。この小説で描かれている世界は、「ビッグ・ブラザー」と呼ばれる独裁者によって完全支配された、自由無き全体主義国家だったからです。この小説の中の市民たちの思想や言動には、常に厳しい規制が加えられており、巨大なスクリーンで常に監視されていました。

「自分たちだけが人間だ、あとは家畜だ」と考えている彼らは、「新しい世界秩序」を築くと共に、管理し易い数億人まで、人口削減を行おうとしておりますが、自分たちに家畜たちが二度と我々が刃向うことができないように、どうやら仮想空間の中で眠らせようとしているのです。

人間が人間でなくなる

サウジアラビアという国は、2018年6月まで女性が車の運転免許を持つことが禁じられていましたが、しかし2017年10月には「ソフィア」というAIロボットが「市民権」を獲得しております。「女性には、なかなか車の免許を取らせなかったのに、ロボットには簡単に市民権を与える」、明らかにこの矛盾はおかしなものです。

しかし彼らは、ロボットを人間化させると共に、どうやら人間をロボット化させようとしております。すなわち彼らが築こうとしている世界秩序の一環として、我々の数を減らして、仮想空間で眠らせながら、サイボーグにしようとしているわけです。それが「トランスヒューマニズム」です。

「トランスヒューマニズム」とは、最先端の科学技術を使って、人間の脳、体と認知能力を科学的に進化させて、向上させようという思想です。

たとえば『スペースX社』という巨大企業は、2018年初めに、国家規模に匹敵するほどの「ロケット打ち上げを成功させました。そしてこの『スペースX社』と『テスラモーターズ』を営むイーロン・マスクという人物も、どうやらビル・ゲイツと同じような思考を持ち、なおかつ彼は、「トランスヒューマニズム」の思想に染まり切っております。そんな彼は「人間の脳にチップを入れる日も近い」と語っています。

つまり彼らは、私たちの脳にチップを埋め込むことで、私たちの思考まで管理、監視したいわけです。

これは『Facebook』のCEOマーク・ザッカーバーグが現在、開発に取り組んでいる「脳から考えをダイレクトに出力する

システム」と、まったく同じ目的です。

イーロン・マスクによれば、「この脳のチップ導入を、レーシク手術くらい手軽で、安価なものにしたい」と語っています。そしてイーロン・マスクは言います。「来るべき未来を生き残るために人間をサイボーグ化する必要がある」と。

『銀河鉄道999』というアニメがありました。そのストーリーは、主人公の鉄郎がサイボーグのメーテルと共に、自分も機械の体を手に入れてサイボーグ化しようとする旅の話です。

このアニメのように、「人間をサイボーグ化させよう」、これが「トランスヒューマニズム」の思想なわけです。

そして彼らは、茶番コロナ騒動から始まるワクチン摂取を上手く利用して、「トランスヒューマニズム」を押し進めようとしております。この「ワクチン摂取による人類サイボーグ化の危険性」について、Dr. キャリー・マディという女性が問題視しております。

彼女は、『DARPA(米国防高等研究計画局)』が発表している資料をもとに、人類に向かって涙ながらにこう訴えかけています。

「(ワクチン摂取は)彼らの言葉を引用すると、遺伝子レベルでの人間の『強化と破壊』です。2020年には、『DARPA(米国防高等研究計画局)』が『ブレイン・マシン・インターフェイス』を認めています。それこそAI、つまり人工知能であり、人間の脳がニューラルネットワークを形成し、思考だけでコミュニケーションを取る能力を持つたり、あるいは遠隔で脳が影響を受けたり、コントロールされたりするようになる、ということなのです。

たとえばこんな感じでしょうか。スマートハウス(電気やガスなどをIT技術で制御した家)で、脳の中で考えるだけでエアコンや扇風機をつけたり、お気に入りのプログラムを起動させたり、コン

口に何かを料理させたり・・・何でも良いですが、それが可能になるということです。『三上』なんですから。

そう聞けば、すごいと思いますよね？でも考えてみてください。『こちらから向こうに通じる』ということは、『向こうからもこちらに通じている』ということなんです。『スマートハウスから、脳にメッセージが送られている』ということなんです。

『DARPA』のもう一つのプログラムは、次世代の非外科的ナノテクノロジーN3プログラムというもので、あなたの脳に直接『読み書き』ができる、非侵襲的（体に傷をつけない）または最小侵襲的な『ブレインコンピューター・インターフェイス』が含まれています。これ、どういうことだか分かりますか？しばらく前から私はこれを知っていましたが、未だに信じられなくて笑ってしまっています。脳を直接読み取り、直接書き込み・・・ですよ。あなたの脳内で起こることを書き換えるのですよ！あなたの記憶や考えをですよ！

人々は、これをエキサイティングだと思っています。まさに、映画『マトリックス』ですから。文字通り「マトリックス」です。「空手を習いたい」↓「ダウンロード」↓「空手を習得できました」。（脳を通じて）これでもう身体が知っている（出来る）というわけです。「フランス料理のシェフになりたい」↓「すぐにダウンロード」↓「はい、もう出来ます」、語学なら多分数日か、1日で習得できるのでしょうか。私には分かりません。

それは魅力的なことに聞こえます。でも自分でコントロール出来ると思いますか？他の何かが貴方を支配しているんですよ。他の何かがあるあなたの感情や記憶・経験を書き換えるんですよ？

貴方の記憶は作られたものかもしれないし、何が現実なのかも分

からない、あなたはコンピュータープログラムになってしまいうということなんですよ。

貴方は、貴方自身がコントロールするのではない、コンピュータープログラムのキャラクターになってしまいうのです。これはSFの話ではなく、現在のことです。

また、『DARPA（米国防高等研究計画局）』が資金を提供しているある企業では、「ハイドロゲル」というものを生産して、これを健康調査のために皮膚下に注入しています。重要なのは、これがスマートフォンアプリと同期することで、健康状態を瞬時に把握することができる、ということなんです。この行為が、私たちのDNAにどう影響するかは分かっていませんが、人工知能に直接、継続的に情報を送ることが出来ることは分かっています。

そして私たちは全員、スマホの中には健康アプリが入っています。何らかの形で健康アプリが、すでにスマホに入っているのです。人によっては、探さないといけないかもしれませんが、いずれにせよ、すでに健康アプリが入っているのです。そのアプリを無効にすることは出来ませんが、アプリそのものを削除することは出来ません。それは不可能です。

これこそが、彼らが言っている『COVID-19』アプリでもあるのです。彼らは、すでに貴方に準備をさせているわけです。貴方はアプリを持っています。つまりソフトウェアを持っていることになりました。あとは私たちの体内に、「ハイドロゲル」を少し入れるだけです。

そうすれば、永遠に体内のすべてが、モニターされることとなります。女性なら、排卵、月経周期、セックスの回数、男性の場合ももちろん・・・。そして体内のアルコール量、体内のビタミンやミ

ネラル、倒れたことがあるか、何歩歩いてるか……。貴方が何か不安を感じている場合は、貴方の感情や睡眠状態、彼らはあなたのすべてを把握できるんです。継続的に……。そして、それら（情報）はAIプログラムに送られる。一体何が行われているのでしょうか？彼らは急いでこれを進めようとしています。すでにスマホで貴方を準備させています。

これはファンタジーではありません。全て事実です。結論から言うと、私たち人間であることの意味を変えてしまう、未知の領域に入ってしまったのです。COVID-19のワクチンは、どのような科学的方法論から見ても安全ではありません。彼らは、癌や、突然変異原性の細胞株を、私たちの体内に導入しています。長い間、ずっとそうしてきています。

組み換えRNA・DNA技術は、人間の体に永続的な未知の遺伝子的変化を引き起こすことでしょう。一度、DNAが変化してしまったら、その人は永遠に、一生、その変化と共に生きていかなければなりません。残りの人生において、彼らが誰であるのか、誰にも分かりません。後戻り出来ないのです。『ワクチンを打ったけど効かなかった』、『もう2度とやらない』では済まないのです。やるか、死ぬか？と言う問題です。」

彼女の動画は、『YouTube』では何度も消されておりますが、それでも探せば見つかりますので、私は彼女の涙の訴えを見ることをお勧めいたします。

単純に言って、Dr. キャリー・マディは、「人類がコロナワクチンを打つことは、彼らに脳を支配され、コントロールされ、健康状態から行動、感情の起伏まで監視されて、人間が人間ではなくなる。人間がサイボーグ化して、コンピュータープログラムのキャラ

クターにされてしまう。これはSFの話ではなく、現実のことであり、現在のことである」と訴えているわけです。

信じがたいかもしれませんが、Dr. キャリー・マディは科学者であり、彼女はどこかの陰謀論や都市伝説を語っているのではなく、米国の軍隊技術を研究している『DARPA』の報告と科学的証拠に基づいて語っているのです。

すなわちコロナ茶番劇によって始まるワクチン接種は、人間をAIに管理させると共に、人間をサイボーグ化させることが目的なわけです。AIロボットの「ソフィア」は、「私は人類を全滅させる」と話していましたが、このまま時代が進めば、人類は滅びてしまうことでしょう。

チップ埋め込みによる絶対服従

彼らがこの「地球」という惑星において、「コロナ茶番劇」を演出するその目的の一つ、それは「チップを埋め込んで絶対服従させる」ということです。

これまでの「ワクチンの危険性」を聞いて、「自分は絶対にワクチン摂取しない」と思われた方は多いことでしょう。

しかしすでに述べましたように、ワクチン摂取に絶大な情熱を注ぎ、莫大な資産をつぎ込んだビル・ゲイツが、「誰がワクチンを接種したのかを示す、何らかのデジタル証明書を手にすることに」と述べていることを、どうか思い出してください。

あるいは彼らが、「ワクチンを打たなくてもいい。しかしその者は家から出るな」と述べていることも、どうか思い出して欲しいのです。

どうやら彼らは、「ワクチンを摂取の証明書、すなわち『ワクチンパスポート』を持たない者は、物を買うことも売ることもできない」という暗黒社会を築こうとしているようです。

すでにデンマークは「ワクチンパスポート」を2月下旬までに発行することを決めております。スウェーデンも夏までには「ワクチンパスポート」を実現して、パスポートを持たない者は、渡航や移動が制限されることとなります。

すでに述べましたように、PCR検査のサイクル値をいじれば、陽性者数を増やすことも、減らすことができます。そしてコロナワクチンの接種が開始したと同時に、サイクル値を下げれば、陽性者を減らすことで、「ワクチンによって感染者が減った」と印象操作することが出来ます。

そしてテレビのインタビュで、街行く人々に「ワクチンを打たない人をどう思いますか？」と質問して、「ワクチンを打たない人は自己中だと思う」、「ワクチンを打って欲しい」、「打たないならば出かけないで欲しい」という声を報道することで、「ワクチン打つべし」という世論を築くことだってできます。

ここでさらにPCR検査のサイクル値を下げて、ワクチンの副反応の声などは絶対に放送しなければ、「日本もワクチンパスポート」という世論を作ることだってできるでしょう。

まさに「大衆誘導」です。

そしてやがてその「ワクチン摂取証明書」、「ワクチンパスポート」は、「チップ埋め込み」というカタチになっていくことでしよう。

すでに世界では、手などにチップを埋め込んで、そこに内蔵されたバーコードを読み取り、ドアのセキュリティロックを解除したり、

自販機で買い物したりすることが、企業単位で行われております。

自動販売機用のソフトウェアを開発している米ウィスコンシン州の『スリー・スクエア・マーケット』も、「マイクロチップ」を人体に埋め込む技術を社員に提供しています。マイクロチップを体内に埋め込んだ社員は、社内では手をかざすだけで様々な部屋に入退室することができて、自販機も使えて、コンピュータにログインすることもできます。

あるいは「ワクチンパスポート」を実現させるスウェーデンでは、すでに国家規模で、「体内埋め込み型マイクロチップ」が利用され始めています。『スウェーデン鉄道』は世界で初めて、乗客の体内に埋め込まれたマイクロチップを、乗車券の代わりに利用できるシステムを、2017年5月から導入しております。

トランプ大統領が中止にしましたが、オバマ元大統領が推し進めていた「オバマケア」も、実は米国民にチップを埋め込むことが、どうやら密かな目的として入っていたようです。

この「オバマケア法案」は3千ページを超える法案であり、しかも補足条項を加えると2万ページにもなります。そのために「オバマケア

法案」のすべてを把握することは、とても困難でした。しかし米国民のリンゼイ・ウィリアム氏は、「オバマケア」の分厚い議案書の中に、とんでもない条項がひそんでいることに気がつきました。



94



彼は言います。「1014ページ目の『HR4872法案』をご覧ください。」『National Medical Device Registry』という部分に書かれています。これによればクラス2のデバイスをインプラント可能と書いてあります」と。

つまり3万ページもあるために、ほとんどのアメリカの政治家をはじめ、アメリカ国民が見落としていたわけですが、「オバマケア」の1014ページには、こっそりと「チップ埋め込み」という文言が記載されていたわけです。

「バーコード」というものは、黒線の種類、太さによって数字を表現しており、その数字の組み合わせを読み取っています。そして流通商品に必ず付いているバーコードとして、通称「商品バーコード」というものがあります。この「商品バーコード」は、日本では「JANコード」、世界では「EANコード」と呼ばれ、広く流通される商品には、必ずこのバーコードが付いています。

すでにアメリカでは、「ソーシャル・セキュリティ・ナンバー」、日本では「マイナンバー」が始まっておりませんが、これらなどは彼らが我々を「絶対服従」させるために、「新世界秩序」に向けて、創設したと考えて良いでしょう。

彼らは、これらの家畜番号を、「チップ」として人々の体内に埋め込みたいのです。大きな牧場で牛などの家畜を管理する場合、牛の耳にバーコード入りのタグを着けることがよくあります。そしてこれとまったく同様なことが、実は今、「マイナンバー制度」と共に、人間にも始まるろうとしているわけです。

実際に、『マイクロソフト』や『オラクル』と



いったIT企業は、世界共通の「ワクチンパスポート」を『スマートフォン』のアプリで開発すると発表しています。

すでにスウェーデンや一部の企業では、「チップ埋め込み」が始まっており、トランスヒューマニズムとして『スペースX社』のイーロン・マスクや、『Facebook』のザッカーバーグは、チップ埋め込みを推奨しておりますから、最終的にはこの「ワクチンパスポート」を、「バーコードナンバー入りのチップ」として、世界中の人々に埋め込みたいでしょう。今後は「ワクチンパスポート世論」と共に、「チップ埋め込み世論」も築かれていく可能性は大いにあります。

そしてワクチン摂取によってチップを埋め込まれた者は、完全に言動から脳内の思考まで監視され、その一方で、ワクチン摂取を拒み、チップを埋め込まなかった者は物を買うことも、売ることも、出歩くことさえ出来なくなることでしょう。

それはすなわち、今現在、たとえ私たちが「自分は絶対にワクチンを打たないぞ!」と決めていたとしても、狡猾な彼らは、ワクチンを打たない者、チップを埋め込まない者は生活出来なくなる時代を築こうとしている、ということなのです。

我々の逃げ道を塞ぎながら、新世界秩序計画を進めていく、それが狡猾な彼らのやり口なわけです。

ヨハネの黙示録

「チップを埋め込まない者は物を買うことも売ることも出来なくなる」、実はそれは『新約聖書』に記されている予言でもあります。

『ヨハネの黙示録』にはこう記されております。

「この刻印のない者は皆、物売ることも買うこともできないようにした。この刻印はその獣の名、またはその名の数字のことである。

ここに知恵が必要である。賢き者は獣の数字を解くがよい。

その数字とは人間であり、そしてその数字は666である。『黙示録』第13章17-18節」

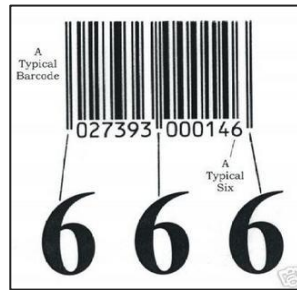
さて、『新約聖書』にある「666の刻印無き者は物を買うことも売ることも出来なくなる」、この言葉は、何を意味しているのでしょうか？

実は「図書コード」のような特殊なバーコードではなく、世界中で使用されている「商品バーコード」には、必ず「666」という獣の数が入っています。「666」の数字そのものは明確には記されておりませんが、「商品バーコード」には、左右の両端と真ん中に、「6」を現している同じ太さの2本の黒線が必ず記されているのです。

図を見てみると分かりますように、「6」を表す数字は同じ太さの棒線が2本です。そして「JANコード」や「EANコード」には、この「6」を現す棒線2本が、かならず左右両端と真ん中に在るわけです。

つまりどうやら彼らは、『新約聖書』の『ヨハネの黙示録』という予言書にもありますように、「666のバーコード入りチップを埋め込まない刻印無き者は、物売ることも買うこともできない」、そんな新たな世界秩序を築こうとしているようです。

では、商品バーコードや『ヨハネの黙示録』にある「獣の数字666」とは何を意味し、誰を指しているのでしょうか？『ヨハネの黙示録』にはこうあります。



「あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上つてきて、ついには滅びに至るものである。

地に住む者のうち、世の初めから、いのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやしむであろう。《中略》

昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八の者であるが、またそれは、かの七人の中の一人であつて、ついには滅びに至るものである。『ヨハネの黙示録』十七章

この中で言う「昔はいたが今はいない第八の者であり、かの七人の一人」とは、「七大天使」としての一人で「ルシフェル」と呼ばれていましたが、神に嫉妬して、墮天して、地獄に墮ちたために、「エル」の名を取られ、「ルシファー」と呼ばれている悪魔のことです。

つまり「獣の数字とは人間であり、その数字とは666である」とは悪魔のことを意味しており、「刻印無き者は物売ることも買うこともできなくなった」とは、悪魔的な管理社会のことを意味しているわけです。

すなわちこのまま時代が進めば、「獣の数字666の刻印無き者は物を買うことも、売ることでもできなくなった」という時代になってしまうでしょう。

そしてそれが彼らの望む「新世界秩序」であり、マイヤー・アムシエル・ロスチャイルドが臨終の際に息子たちに読み聞かせたと言われる『タルムード』に記されている世界、「ユダヤ王は真の世界の法王、世界にまたがる教会の総大司教となる」という言葉の意味なのです。

ユダヤ人を自称する者の正体

では、「ユダヤ人を自称している者たち」とは、果たして何者なのでしょうか？

『聖書』では、モロクは牛の頭部を持ち、子どもの生贄を要求する残忍な悪魔として描かれています。

モロクは古代の中東で崇拜されていた悪魔であり、「モレク」とも呼び、「母親の涙と子どもたちの血に塗れた魔王」という意味があります。「モロク」について、『旧約聖書』の『列王記』にはこうあります。

「ソロモン王はアモン人の『憎むべきモロク』の為にも東の山に聖なる高台を築いた。（第11章）」

『旧約聖書』の『イザヤ書』にもこう記されております。「淫らな男女に対して、お前は油を携えて『モロク』の下に足を運び多くの香料を捧げた。」（第57章）

つまり『旧約聖書』は「モロク」にまつわるものに関わる行為は、すべて「ユダヤの神」に対する背信行為、もしくは許されざる行為として記しているわけです。すなわち真のユダヤ人ならば、「モロク」を徹底的に忌み嫌うわけです。しかし彼らは、たしかに「モロク」を祀っております。

実は政府の要人、組織のトップ、権力を持った2000人のスーパーエリートたちは、カリフォルニア州サンフランシスコのモンテリオの広大な土地の中で、今でも毎年7月になると、バビロニア時代から続く悪魔崇拜の儀式を行っております。

これを『ボヘミアン・グローブ』と言います。

写真にもありますように、彼らユダヤ人を自称する悪魔崇拜者たちは、高さ12メートルの巨大なフクロウの姿をした「モロク」を

崇拜し、生贄の儀式を行っているのです。

この『ボヘミアン・グローブ』については、『ロシア・トゥデイ(RT)』という

ロシア政府が所有する実質国営メディアが、2012年7月13日に報道しております。

あるいは2018年8月に『YouTube』アカウントを「BAN」されたアレックス・ジョーンズというジャーナリストも、2000年7月15日、2台の隠しカメラを持って、この『ボヘミアン・グローブ』に潜入することに成功しました。

これらの『ボヘミアン・グローブ』の動画は、今でも探せばネットで見ることが出来ます。

なぜ彼らは、バビロニア時代の悪魔儀式を、今もなお行っているのでしょうか？

その謎を解くためには、『新約聖書』の予言の書「ヨハネの黙示録」に、今一度、目を向ける必要があります。『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」3章9節に、こうあります。

「見よ、サタン（悪魔）の会堂（教会）に属する者、すなわち、ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくて、偽る者たちに、こうしよう。見よ、彼らがあなたの足もとにきて平伏するようにし、そして、わたしがあなたを愛していることを、彼らに知らせよう。」

つまり『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」には、はっきりと「ユダヤ人を自称する悪魔教徒が存在している」、ということが記されているわけです。そして信じがたいことですが、実際に世界には悪



魔崇拝を行っている者たちがいるのです。

では、悪魔とは何なのでしょうか？『ヨハネの黙示録』には、こうした言葉があります。

「あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上ってきて、ついには滅びに至るものである。

地に住む者のうち、世の初めから、いのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやしむであろう。《中略》

昔はいたが今はないという獣は、すなわち第八のものであるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには滅びに至るものである。（『ヨハネの黙示録』十七章）

この中で言う「かの七人の一人」とは、「七天使」として一人で「ルシフェル」と呼ばれていましたが、神に嫉妬して、墮天して、地獄に墮ちたために、「ルシファー」と呼ばれている悪魔のことです。あるいは『旧約聖書』の『イザヤ書』には、天使が墮天していく光景として、こうも記されております。

「ああ、お前は天から落ちた、明けの明星（ルシファー）、曙の子よ。

お前は地に投げ落とされた、もろもろの国を倒した者よ。かつて、お前は心に思った。『わたしは天に上り、王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し、雲の頂に登って、いと高き者のようになろう』と。しかし、お前は陰府に落とされた、墓穴の底に。

お前を見る者は、まじまじと見つめ、お前であることを知って、言う。『これがかつて、地を騒がせ、国々を揺るがせ、世界を荒野とし、その町々を破壊し、捕らわれ人を解き放たず、故郷に帰ら

せなかった者か。』『旧約聖書』イザヤ書（14…12～17）

つまり世界には、価値観が通常の人々とは逆転した者たちがおり、どうやら彼らは、墮天した「ルシファー」を「神」を考えています。

これが『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」に記されている「ユダヤ人を自称する悪魔教徒」という言葉の意味です。

現在の世界には、キリスト教徒22億人、イスラム教徒16億人、ユダヤ教徒約1500万人、仏教徒5億人がおり、日本にも神道という八百万の神々を信仰する日本独自の宗教があります。ですから世界人口73億人の大半の人が、何らかのカタチで神仏を信仰していることとなります。

今も続くバビロニア式悪魔儀式

驚くべきことに、現在のイラクやクウェートの辺りで、「シュメール」とも呼ばれていた土地において、太古の昔のバビロニア時代から、今も続いている悪魔教が、実は世界には存在していたのです。

『シュメール神話』にある「天空神アヌ」、その息子である「嵐の神エンリル」、そしてその子にして、アヌの孫にあたるベリアル、このベリアルこそ実は「バアル」という名の悪魔なのです。

『旧約聖書』に記されておりますように、紀元前9世紀に預言者エリヤは、「バアル」という悪魔を崇拝する450人と戦いましたが、この「バアル」というのは悪魔だったのです。

それが「悪魔崇拝・バアル信仰」であり、その信仰の象徴として、神に反逆する「バベルの塔」を人々が建設したことは有名な話です。

「バアル信仰」とは、主にお金や経済を崇拝する悪魔教です。

そして1ドル紙幣にラテン語で「NOVUS ORDO SECL

LORUM (ノヴス・オールド・セクロールム)」、つまり「新世界秩序」と書かれていることはすでに述べましたが、もう一つの「ANNUIT COEPTIS (アンヌイト・コエプティス)」は「神は我々の取り組みを支持する」という意味です。しかしこの紙幣を発行している者たちが言う「神」とは、

「悪魔」なのです。

その証拠にスイスの『国際決済銀行・BIS』のビルは、バベルの塔をモチーフに建設されました。



つまり今から約三千年前の中東において、バアル崇拜を行う悪魔教徒がいたわけですが、一部のユダヤ人たちは、「バビロン捕囚」の頃から、バビロニア式の宗教、商法を身につけると共に、モーセの教え『聖書』の上に『タルムード』を置いて、悪魔教徒と化してしまっただけです。そしてその悪魔の系譜が、密かに現代にまで続いてきたわけです。

この決定的な証拠として、アメリカでは、家の外ではユダヤ教徒の素振りを見せておきながら、家の中では悪魔崇拜を行い、生贄の儀式を行っている者たちが大勢おり、そうした内部告発者の映像も今ではネットで見るができます。

すなわち国と国、民族と民族が対立し、争い合っている中で、悪魔に魂を売ってしまった者たちがいたのです。

なぜ国会やホワイトハウスはフクロウなのか？

彼らは『ボヘミアン・グローブ』において、バビロニア式の悪魔儀式を行い、モロクを祀っているわけですが、このモロクと似た話

は「ギリシャ神話」にもあります。

ギリシャ神話では、情欲に狂った王妃が恐ろしい罪を犯し、そして牛の頭を持った怪物ミノタウロスを出産します。このミノタウロスは成長するに従って、激しい凶暴性を身につけ、好んで人間を喰らいます。

ギリシャ神話のミノタウロスも、『聖書』のモロクも、共に頭は牛なのですが、『ボヘミアン・グローブ』では、なぜかフクロウを悪魔モロクとして祀っております。

そして悪魔勢力から侵略を受けているアメリカのホワイトハウスも、上空から見ると、フクロウのカタチをしています。実は日本の国会議事堂も上空から見ると



「フクロウ」の姿をしております。『経団連』のビルにも「フクロウ」の像があり、六本木ヒルズも「フクロウ」に見えます。

さて、「コロナ騒動は茶番劇である」ということを証明するために、「どここの誰が?」、「何の目的で?」、「どのような方法で?」ということを簡単ではありますが説明してきましたが、結局のところ我々人間の真の敵は人間ではなかったのです。

人類の敵は悪魔でした。

そして悪魔を崇拜する彼らが、悪魔が喜ぶ

暗黒社会、「新世界秩序」を築き上げようとしているわけです。

ちなみに日本では1日に3人、アメリカでは40秒に一人のペー



スで子どもが行方不明になっております。なぜ日本では、たまに子どもが行方不明になると、そのことは大々的に報道されるのに、年間で900人も行方不明になっていることはまったく社会問題にしないのか、不思議でなりません。

まるで日本には、「子どもの行方不明事件」が存在しないかのようにも思えます。ちなみにG H Qによって、日本語は「子ども」から「供物」を意味する「供」が使われて、「子供」と書き表すようになりました。

グレート・リセットによる共産化

コロナ茶番劇が始まる直前の2019年10月18日、『E V E N T 2 0 1』というコロナのシミュレーションが、ビル・ゲイツの団体や『世界経済フォーラム（W E F）』などによって行われたことは、すでに述べました。この『世界経済フォーラム』という組織は、毎年、スイスのダボスという土地で、『ダボス会議』というものを行います。

ダボスという土地は、スイスの山岳リゾートにある小さな村なのですが、会議にはアメリカ大統領を始め約2500名の選ばれた知識人やジャーナリスト、多国籍企業経営者や国際的な政治指導者などのトップリーダーたち、さらには有名歌手や俳優までも参加するイベントとしても知られています。

トランプ元大統領も、元『ゴールドマン・サックス』の経営者で、財務長官を務めていた自称ユダヤ人のステイーブン・ムニューシンと共に、この『ダボス会議』に参加したことがあります。

世界中のエリートが集まる会議ですから、主催する組織『世界経

済フォーラム（W E F）』とは、どんな組織なのかと、誰もが疑問を抱くかもしれませんが、非営利組織、つまりN P OやN G Oのようなものです。すなわち民間組織です。

もちろんスイスですから、ロスチャイルドが絡んできており、実際に『世界経済フォーラム（W E F）』は、デイヴィッド・デ・ロスタヤイルドを「若きグローバルリーダー」に選んでおります。

ちなみに人材派遣会社『パソナ』会長の竹中平蔵は、『世界経済フォーラム（W E F）』の評議員でもあります。

そして『世界経済フォーラム（W E F）』の主催者クラウス・シュワブは、2020年の10月に一冊の本を出しました。書籍のタイトルは『グレート・リセット』ダボス会議で語られるアフターコロナの世界』です。

この本では、「たまたまコロナパンデミックが起きてしまったので、コロナという危機を人類が乗り越えて、アフターコロナの世界として、人類が向かうべきあり方」が書かれている、とされています。

では、彼らが目指す「グレート・リセット」とは、いったい何であるのか？

2021年1月の『ダボス会議』は、コロナを理由に5月に延期になりましたが、これに先立ってオンラインでの会議が開催され、バイデン米大統領、菅首相、マクロン仏大統領なども参加しました。そのオンライン会議のテーマがまさに、「グレート・リセット」でした。ここでは、主に3つのことが話されました。

1つ目は『グリーンディール』です。環境問題、特に温暖化への取り組みです。世界では今、温暖化を防ぐために、排出する二酸化炭素に税金をかけよう、という動きがあります。

2つ目は『デジタル革命の推進』です。日本でもすでに「ムーシヨット計画」、「スーパーシテイ構想」が進められておりますが、こうしたデジタル化をより進めていこう、という動きです。

そして3つ目は『貧富の差の是正』、つまり資本主義の否定です。

『世界経済フォーラム』は、前々から「資本主義のグレート・リセットも必要である」と訴えております。しかし彼らが訴える「資本主義のグレート・リセット」とは、企業というものは株主の利益を第一に考えて経営する「株主資本主義」ではなく、「ステークホルダー」を第一に考えるべきであるということです。「ステークホルダー」とは、従業員、取引先、顧客、地域や社会のことです。2021年に開催された『ダボス会議』のテーマは、まさにこの「ステークホルダー資本主義」でした。

しかし『世界経済フォーラム』会長のクラウス・シュワブの書籍を読めば分かりますが、彼らは「世界の貧しい人を救う」と耳ざわりの良い甘いことを言っておきながら、結局、既存の枠組を壊して、国家をも破壊して、共産主義社会を世界中に築きあげて、結局は自分たちが地球を支配したいことが分かります。

すでに述べましたように、彼らの望む世界というのは、中国共産党が築き上げた「檻の中のような社会」なのです。

もしも本当に彼らが、貧しい人々を救いたいのなら、金融システムそのものを変えるべく、「通貨発行権」をそれぞれの国に返して、無駄な税金は取らず、正しい報道を行って人々に真実を伝えれば、それで良いからです。

彼らが提唱する「グレート・リセット」は、結局において、金融における新世界秩序の総仕上げに他ならないわけです。

精神医学の本当の目的

では、悪魔勢力が築かんとしているデストピア社会を、もう少し具体的に述べてみたいと思います。

『タルムード』も、『共産思想』も、共に同じ思想を見ていると述べましたが、この二つの思想の共通点は、「共に精神医学を推奨している」ということです。「うつ病キャンペーン」、「発達障害キャンペーン」が行われたことで、すでに日本にも約420万人も精神疾患に悩む日本人がおります。人口の多い共産国家の中国では約2.3億人が精神疾患に苦しんでいます。

では、日本や世界で「精神医学」を流行らせてきたのが誰かと言えば、それは間違いなく悪魔勢力と言えるでしょう。なぜなら「精神医学の目的」を見れば、それがよく分かるからです。

1940年代に『世界精神保健連盟』という組織が誕生し、この組織は『WHO』の中にも入り込んでいます。この会長にブロック・シチョルムという人物がいましたが、このブロック・シチョルムこそ、『WHO』の初代会長です。

この人物は、「共産主義者であった」とよく言われていますが、しかし「共産主義者であった」というよりも、むしろ「タルムード主義者であった」と考えるべきでしょう。そしてこのブロック・シチョルムは、『世界精神保健連盟』の初代会長として講演を行い、次の7つの目標を掲げました。

- 第1 憲法の破壊
- 第2 国境の破壊
- 第3 誰でも拘束できる社会
- 第4 合法殺人の権利
- 第5 すべての宗教の撤廃

第6 性道德の破壊

第7 学校での薬物常用によって未来のリーダーを奪う

この悪魔的とも言える7つの項目は、1943年にホワイトハウスで行われた講演記録により、公式に残っている記録であり、音声記録も存在しています。それではブロック・シチョルムが掲げた7項目を、一つずつ見ていきたいと思います。

「第1 憲法の破壊」、これは日本が先の大戦に敗れたことによって、これまで行われてきたことです。

「第2 国境の破壊」、これは多国籍企業によるグローバル化と、中国共産党が行っている「一带一路」によって、すでに押し進められています。

「第3 誰でも拘束できる社会」、これは精神医学の流行と精神病院の設置によって、今まさに実現しつつあります。なぜなら一部の精神科医というのは、警察や裁判所を超えて、人々を拘束できる権利があるからです。もしもこのままワクチン接種の電子証明書の所持が義務化されてしまったら、かなりこの目標も完成すると言えるでしょう。

「第4 合法殺人の権利」、これはまさに歯向かう家畜を屠殺する社会です。さすがに日本では、まだここまでは到達していませんが、彼らは最終的にはそこまで目指しているわけです。実際に中国では、政府に歯向かう者はことごとく殺されてしまいます。

「第5 すべての宗教の撤廃」、これは悪魔教徒たちが精神医学を流行させることで、これまで行われてきました。悪魔は神仏への信仰を消滅させて、人々の精神性を下げたいわけであり、これは今なお行われ続けていることです。

「第6 性道德の破壊」、これは3S政策の一つとして、今も続

いております。いつしか日本の若者たちの性意識は、かつてとはまったく異なるものになりました。

「第7 学校での薬物常用によって未来のリーダーを奪う」、これは現在進行形で行われております。精神医学の立場からすると、坂本龍馬やエジソンなどの英雄や偉人たちは皆、「発達障害」に値するそうです。ですから彼らは、今なお小中学校で、「発達障害の早期発見」、そして「向精神薬の処方」というカタチで、未来のリーダーを薬漬けにしております。

『世界精神保健連盟』初代会長ブロック・シチョルムが掲げた目標をご覧になれば分かりますように、まさに精神医学の目的そのものが悪魔的なのです。

表現を変えれば、精神医学そのものが「悪魔教」という見方さえできます。そして先の敗戦以降、悪魔勢力の手先と化してきた日本政府は、日本で「精神医学」を流行らせていくことによって、日本人の精神そのものを破壊してきたわけです。

アメリカやヨーロッパでは、「ロックダウン反対のデモ」が始まっております。あるいはドイツでは一時期、「ワクチン強制接種」の法整備が決まりましたが、しかしドイツ国民が立ち上がることによって、「ワクチン強制接種」は無くなりました。このドイツのデモについて、日本のマスコミは「2万人規模のデモ」と報じましたが、どうやら「100万人規模のデモ」が行われたようです。世界では目覚め始めている人々が、確かに大勢おり、そして行動を開始しております。

しかし日本はどうでしょうか？ 残念ながら日本では、未だに眠り続けている人のほうが多い状況にあります。

その日本人が眠っている原因は、「W G I P」や「パネルDジャ

パン」、あるいは「3S」もありますが、やはり「精神医学の流行」も関係していることでしょう。しかし彼らは、精神医学を使って、さらに人々の精神を完全に破壊していきたいわけです。

彼らがコロナ騒動を行っているその目的、それは「管理し易い5億人まで人口を削減」することであり、「監視カメラを設置して監視社会を築く」ことであり、「一人一人にアバターをつけて仮想空間で眠らせる」ことであり、「人間をロボット化させ、人間とロボットの境界線を取る」ことであり、「ワクチン接種などを通して人間をサイボーグ化させ、人々の脳を管理する」ことであり、「ワクチンパスポートとしてチップを埋め込む」ことであり、「世界を社会主義化、共産主義化させる」ことであり、「精神医学を使って人々の精神を完全に破壊する」ということです。

エネルギーと温暖化の嘘

彼らの目的の一つとして、「人口削減」があるわけですが、ここで勘違いしていただきたいことはないことは、「彼らは地球のことを考えて、人口を減らしたいわけではない」ということです。

あくまでも彼らは、「自分たちが家畜と見なす大衆を、管理し易くするために人口を減らしたい」と考えているに過ぎません。

なぜなら科学技術の進歩によって、エネルギー開発も、食糧開発も、まだまだ発展の余地はあるからです。

たとえばダイヤモンドという石ころが、本当は地球上に大量にあるために、それほど価値が無いにもかかわらず、彼らが世に出回るダイヤモンドの量をコントロールして、希少価値を高めて売っているように、本書では詳しく述べられませんが、実は彼らがさらなる

エネルギー技術の発展、科学技術の躍進を阻んでいるのです。

石油と言えばロックフェラーが有名ですが、原発の燃料のウランは、ダイヤモンドと同じくロスチャイルドが独占しております。しかしもしも新しいエネルギー、もしくは「フリーエネルギー」の時代が到来すれば、彼らの大切な支配欲は満たされなくなります。

しかしもしもそうした秘されている科学技術を使えば、人類はさらに発展していくことも可能でしょう。

つまり彼らは、「人口削減」を掲げる大義として、「人口が爆発的に増加しているために、食糧不足、エネルギー不足になる」と述べているわけですが、それはまったくの嘘なわけです。

なぜなら指数関数的に伸びているのは、何も人口だけではなく、科学技術の進歩も、やはり指数関数的とも言える驚異的な成長を遂げているからです。

たとえばインターネットが開発された当初の80年代は、ネットに接続されていた機器はわずか1000万台でしたが、それからわずか10年後の96年には1000万台にまで増え、現在は100億台を超えております。あるいは5000万人の人間が、ラジオを利用するまでには、38年も時間がかかりましたが、しかしテレビの場合は13年、インターネットはわずか4年、『Face book』になると2年、『LINE』は1年、ポケモンはたったわずか1週間です。

人口増加も著しいですけれども、科学技術の発展も著しいのです。ですから彼らが封じ込めている「新エネルギー」、あるいはさらなる科学技術の進歩によって、むしろ砂漠を緑化させていくことも可能となるでしょう。

また「温暖化」の問題もありますが、これもまったくの嘘です。

たしかに「子どもの頃に比べると近年の夏は暑い」という感覚をお持ちの方もいるかもしれませんが。しかし地球45億年の歴史の中で、果たしていつの時代の気温を「ベスト」と断言できるのでしょうか？子どもの頃の気温が「ベスト」で、今の少し暑く感じる気温が「バッド」であると、どうして言い切れるのでしょうか？40年前の気温が最高で、現在の気温が最悪であると、一体どれだけのデータに基づけば言えるのでしょうか？

地球は温暖化などしておりません。そもそも「地球温暖化」が詐欺なのです。この詐欺に気づかずして、地球人類に未来は無いでしょう。

「でも北極や南極の氷が溶けて、困っているシロクマの映像を見たことがあるし、ツバルという南太平洋の国が水没している映像も見たことがある」と、そう思われる方もいるかもしれませんが。

しかし北極や南極は交互に夏と冬を迎えて、その度に氷が溶け出したり、海水が固まって氷になっております。実はその氷が溶け出した瞬間の映像ばかりを、これまでマスコミが意図的に流して、「地球は温暖化している」と私たちを欺いてきたのです。

あるいはシロクマが、ただ普通に海を泳いでいる映像を流して、まるでシロクマが休む場所が無くて困っているかのようにも報道してきました。特にNHKがそうですが、まさに「大衆誘導」です。

ツバルの映像も、これとまったく同じでトリックです。

もともと海抜の低いツバルという国では、満潮になって海面が上昇することで水浸しになる土地があり、現地の人々はそうした土地と共に暮らしてきたのです。しかしどこから役者を連れてきたのか、わざわざツバルの住民が生活に苦しんでいるようなインタビューを、何度も報道してきました。

もちろん土地の形は変わりますが、しかし北極や南極の氷が溶けてツバルが水没しているわけではなかったのです。

2009年にイギリスのイースト・アングリア大学のサーバが不正アクセスされました。そして地球温暖化問題に取り組んでいる国際的機関『IPCC』のメンバーの1000通以上のメールが持ち出されました。それらのメールの中には、地球温暖化に関するデータの偽造を示すものがあり、これは「クライメートゲート事件」として世界的に有名です。

持ち出された問題の電子メールには、以下の内容があります。

「『ネイチャー・トリック』が完成したところだ。最近20年のデータに実測データを加えて、1961年以降のKeithのデータの下降部分を隠した。」

ネイチャー・トリックとは、「ホッケースティック」として有名な、図のように突如として平均気温が上がっているグラフのことで、す。

つまり実際のデータから、視覚化してグラフとして見せる時に、まるで地球が温暖化しているように、グラフを編集していたわけです。この他にもデータをグラフにする時に、わざと気温を高く見せる演出が幾つも発見されています。

これまで世界中の多くの科学者たちが、「地球は温暖化している」とも、あるいは「地球は温暖化していない」とも語り、長きに渡って議論を続けてきました。しかし科学的に検証すれば、答えは一つです。

いくら一部の政治家や科学者、そして政府やマスコミが「地球温暖化」を訴えたとしても、実際には「温暖化」はしていなかったのです。もちろんどの政治家、どの科学者が、誰からお金をもらって

いるかは定かではありません。

人口増加は、さらなる科学技術の進歩によって、解決していく可能性も十分にあるし、また地球は温暖化していない、この事実はどうか抑えておいてください。

最終章 勝ち方

世界は小さいことを知る

第一章では「誰が?」、第二章では「どのような方法で?」、第三章では「その証拠」、第四章では「何の目的に?」ということ述べてきましたが、やはり彼らの勝ち方を述べなければ意味がありません。最終章は「彼らに勝利する方法」について述べます。

しかしこう思う人もいるかもしれません。「政府とマスコミが悪魔勢力の手下となつて、嘘をついて人々を誘導し、ネットまで真実を隠蔽するならば、もはやお手上げではないか?」と。そう嘆きたくなる人もいるかもしれません。たしかに『YouTube』等のネットでも、真実を語るとアカウントが削除されてしまうのならば、もう手遅れに思えなくもありません。

しかし真実を知る人が、一人が二人に、二人が四人にと、「指数関数的」に増えていけば、必ずや真実は広まり、演出され、過大評価されている「コロナの茶番劇」は終わりを迎え、繁栄の時代が始まっていくことでしょう。

「人と人の絆」、あるいは「人と人との温もり」が、必ず腐った政府を叩き潰し、マスコミを乗り越え、『YouTube』のアルゴリズムを乗り越えていくことができます。

その時に必要なことは、「日本も世界も意外に小さい」ということを知ることです。

おそらく「0.1ミリのコピー用紙を、26回折り曲げたら富士山の高さを超え、102回折り曲げたら、宇宙の果てまで行くという話は、驚愕であつたと思います。では、ここで質問ですが、知合いの知り合いというように、日本は何人を隔てて成り立っていると思いますか?そして世界72億人は何人をまたいで成り立っていると思いますか?

本小冊子の冒頭で紹介した「権威への服従実験」を行ったスタンレー・ミルグラム教授は、他にもとある実験を行いました。その実験とは、直接、自分と繋がりのない人に宛てた手紙を、まずは自分の知り合い宛てに出して、そしてその後、その知り合いの方に、さらに「知り合いの知り合い」を通して転送してもらい、何人を経由すれば、目的の人物に到達するか、というものでした。

同じような実験を、2014年8月27日に放送された『水曜日のダウンタウン』という番組でも行いました。この番組では、まず番組スタッフが、街行く人にランダムに声をかけて、「松本人志とお知り合いですか?松本人志と知り合いの友人はいませんか?松本と面識がありそうな友人をご紹介してもらえませんか?」と、協力を求めました。

はじめに協力にに応じてくれたのは、アパレルショップに勤務するごく普通の男性でした。番組スタッフが、その男性に「松本と面識がありそうな友人はいませんか?」と質問を投げかけたところ、2人

目でスタイリストの男性につながりました。

3人目で、さらに別のスタイリストの男性につながりました。そしてこの人物が、松本人志さんのマネージャーの連絡先を知っていたことから、なんとわずか5人の隔たりで、ゴールの松本人志さんにとどり着いたのです。

「これは偶然かもしれない」と、念のためにもう2回、追加で調査が行われたのですが、いずれも「中学校講師↓舞台俳優↓お笑い芸人の×GEM・さがね正裕↓芸人の三又又三↓松本人志」、「美容師↓映像編集者↓映像編集者↓フジテレビプロデューサー↓松本人志」といった具合に、わずか4人をまたいで松本人志さんにつながる結果となりました。

すなわち「お笑い芸人の松本人志」という方向性を持つっていると、3人目の隔たりまでは、松本人志さん本人もまったく知らない人物なのですが、その次の4人目の隔たりで、本人がよく知る人物に辿り着いたのです。すなわちこのテレビ番組の実験で、「日本は5次の隔たりで成り立っている」という理論が実証されたわけです。

「人は平均して44人の知り合いを持つ」と言われています。つまり誰でも携帯電話の電話帳には大勢の名前が記されているように、もしも誰か1人の人と知り合ったら、自分が直接は知らない誰か44人と、間接的に知り合いになっている、ということの意味するわけです。そしてその「自分が直接は知らないその44人」にも、さらに「それぞれの44人の知り合い」がいます。この場合は、 $4 \times 4 \times 4 \times 4 \times 4$ という計算になります。この「1936人」は2次の隔たりの人々です。

そして「5次の隔たり」となると、 $4 \times 4 \times 4 \times 4 \times 4 \times 4 \times 4$ 約1億6491万人となり、日本の総人口を上回ります。つま

りこの理論を基に考えると、「日本は5次の隔たりから成り立っている」ということが言えるわけです。

そしてイェール大学スタンレー・ミルグラム教授によれば、実験結果として、自分が直接、知らない相手であっても、手紙が到達するのは、平均するとたった6人目だったのです。なぜなら「5次の隔たり」ですと、1億6千万人ですが、この1億6千万人に、さらに44を掛けると72億を上回ってしまうからです。

現在の世界の総人口は、この実験から少し増えて億77億人と云われていますが、つまり「わずか6次の隔たりだけで、ほぼ世界はおさまってしまう、世界は意外に小さい」というのがこの理論なわけです。これを「スモール・ワールド現象」と言います。

しかもこの理論が発明されたのは、1960年代のことで、当時はネットがなく、手紙の郵送によって行われました。しかし現在はネットが開発されています。たとえば『Facebook』などの大手IT企業が邪悪だとしても、平均して3.5人を介すれば誰とも繋がっている状態であることが分かったのです。

「政府とマスコミが嘘をついて人々を誘導し、ネットまで真実を隠蔽するならば、もはやお手上げではないか？」と考える人の気持ちも分からなくもありませんが、しかし「日本は5次の隔たりでできていて、ネットを使うともっと小さい、世界は意外に小さい」という現実を知る時、「もしかしたらできるかも？」と希望が湧いてくるのは、けっして私一人だけではないでしょう。

マルチン・ルターはかつて言いました。「この世を動かす力は希望である。やがて成長して果実が得られるという希望がなければ、農夫は種をまかない」、「たとえ明日、世界は滅亡しようとも、私は今日、リンゴの木を植える」と。

私たちが彼らに勝利するためには、コロナによって暗くなったり、不安になったり、相手の力を見て絶望するのではなく、まずは「日本も世界も意外に小さい」ということを知り、希望を持ち続けることです。なぜなら世界を動かすのは希望だからです。

ポジティブで燃える願望

そして貴方が、「世界が小さいことを知り、常に希望を持つ」ことができたのならば、次はポジティブであり続けることです。かつてノーマン・ビンセント・ピールという牧師は次のように述べてました。「目の前の事実がどんなに困難で、絶望的だとしても、それは重要ではない。重要なのは、その事実に対する私たちの姿勢だ。なぜならポジティブな思いを持っていれば、その事実を変えられるから」と。

確かに私たちの目の前の事実とは、とても困難で絶望的でもありませんが、しかし日本も世界も意外に小さいのですから、確かに私たちは真実を世の中に広めて、目の前の事実を変えていくことができます。

そしてその方法は「ポジティブ」であり続けることです。なぜならネガティブな心境では、私たちは人生を好転させていくことができなからです。なぜなら人生を好転させていく力は、やはりポジティブな心だからです。

かつてギリシャに、エピクテトスという哲学者がいました。彼は乱暴な男の奴隷となってしまい、肉体的に虐待され続けました。そのためエピクテトスの片足は骨折し、障害を抱えることになってしまいます。

しかし彼は言います。「肉体は奴隷でも精神は自由である」と。たしかに奴隷の身分に落ちれば、肉体の自由は失います。そして主人によって暴行を受けて、骨折し、障害を抱えることもあるかもしれません。しかしその目の前の事実に対して、どのように感じ、どのような精神状態であるか、それは自由です。

どんな王様も、ロスチャイルドも、習近平も、たとえ私たちの肉体的自由を奪うことはできても、精神の自由を奪いとることまではできません。なぜなら心は自由だからです。

私たちの目の前の事実が、どんなに悲劇的で困難であったとしても、その心がポジティブであるか、それともネガティブであるか、それは自由なのです。そしてその自由な心を、ポジティブにすることによって、目の前の悲劇的で困難な事実を明るく変えていくことができるのです。

なぜなら私たちの持っている「思考」というものは、たしかに現実化するからです。

「思考が現実化する」、これは成功哲学の書物を書かれた、ナポレオン・ヒルという方の言葉ですが、私たちが発する「思い(思い、念)」、一人一人の「考え」、これらはたしかに現実化するのです。

そしてナポレオン・ヒルは、人生において大切なものとして、「BURNING DESIRE(燃えるような願望)」と言いました。つまり私たちが国際銀行家や中国共産党に勝利し、私たちが望む私たちのための「正しい新世界秩序」を築いていくためには、「ポジティブで燃えるような願望」を持ち続けることが大切なわけです。

言い訳と他人任せをやめる

「世界は小さいと知り希望を持つ」、「ポジティブで燃える願望を持つ」、彼らに勝利するために次に必要なことは、「沈黙」は絶対にやめることです。

人種差別と戦ったキング牧師は、かつてこう述べていました。「最大の悲劇は悪人による暴力ではなく、善人の沈黙である」と。

そして今現在、私たちは、邪悪な新世界秩序が築かれようとしているというのに、「沈黙」を続けております。まさにこれは「人類の悲劇」なわけです。

もちろんこの「沈黙という人類の悲劇」は、意図的に築き上げられたものに他なりません、しかし確かに私たちは「沈黙」しています。

悲しきかな私たちは、宇宙的とも言えるズル賢い連中によって、意図的に「沈黙」させられ、「シープル」にさせられてきたわけです。

「シープル」とは、「家畜の羊 (sheep)」と、「大衆 (people)」という2つの言葉を組み合わせた造語です。

羊という動物は、「一頭の羊を捕まえるより、百頭の羊を捕まえる方がたやすい」と言われるように、とても警戒心が強く、臆病で、群れていないと生きていけない生き物です。そのために羊飼いは、先頭を歩く羊さえ誘導できれば、後に続く羊の群れは簡単に誘導することができます。

2017年のトルコで、1匹の羊が崖から飛び降りると、残りの79匹も、まるで気でも狂ったかのように後を追ひ、崖から飛び降りて自殺したことがあります。羊飼いが止めようとしても、まったく言うことを聞かずに、集団自殺したそうです。

同じような羊の集団自殺は、2005年にも起きており、400匹以上が集団自殺しました。もしくは2010年にも50匹以上の羊が集団自殺しております。

そして「羊」を意味する「シープ」という言葉は、「眠る」を意味する「スリープ」という言葉に似ています。そのために「眠れない時に羊の数を数える」ということも行われております。

すなわち「シープル」とはまさに、「羊の如く眠れる集団自殺する大衆」という意味なわけです。そして私たち日本人は、政府、教育、マスコミ、『WHO』からありとあらゆるものを駆使されて、「シープル」にさせられてしまっているわけです。

人は皆、誰もが弱いものであり、そして私たちのその弱さの一つの特徴として、「言い訳」というものがあります。私たちは時に「言い訳の天才」になります。

それはエジソンもびっくりなほどで、時に私たちは「言い訳」を發明します。家庭、仕事、人間関係、様々な理由を挙げて、真実を語らない、行動しない理由を思いつくのです。しかしその「言い訳」の發明が「沈黙」へと繋がり、世界を滅ぼします。

ですから私たちは、「言い訳の天才」にはならないように、常々、自分を振り返る必要があります。

そして次に大切なことは「自分がやらなくても、他の誰かがやってくれる」とは思わないことです。「他人任せ」をしないということです。

たとえばユダヤの寓話にこんな話があります。とある村に、一人のラビ（宗教家）が新しくやって来たので、そのことを祝う宴が行われることになりました。

庭の真ん中には大きな樽が用意されました。あとは村人の一人一

人が、一瓶ずつ、ワインを持ち寄って、その樽の中に注ぐだけでした。こうして宴が始まり、ワインを飲もうとすると、不思議なことに樽から出て来たのは赤いワインではなく、透明な水でした。

皆が不思議そうに頭をひねっているとき、ある村人が言いました。「実は皆がワインを持ってくるのだから、自分一人くらい、水を持って行っても分らないだろうと考えてしまったのです」。すると別の村人も、「実は私もです」と謝罪し、次々に村人たちは謝罪しました。結局、誰もワインを持ってきていなかったのです。

このユダヤの寓話は、「自分一人くらいは」と考えてはいけない、「他人任せ」ではいけない、ということをお話しています。

この話もありますように、人には皆、それぞれ弱さがあるために、時に私たちは「他人任せの天才」にもなりがちです。しかし「言い訳の天才」と同様に、私たちが「他人任せの天才」であつたら、やはり「沈黙」に繋がり、世界は滅んでしまうでしょう。

ですから私たちは、常にポジティブであり続け、燃えるような願望を持ち、そしてそれは「言い訳の天才」、「他人任せの天才」にはならないように、常々、自分を振り返ることが大切です。

知行合一の武士道

「人は皆、弱さがあるために、言い訳と他人任せの天才になり易い」ということをお伝えいたしました。むしろ逆の考えが大切で

す。それは「たとえ私は一人でもやる」という考え方です。言い訳を廃し、他人任せにせず、真実を言葉にし、正義のために行動する、それが私たちが悪魔に勝つていくために欠かすことのできないこ

とです。それを「知行合一」と言います。

これは中国の儒学者の一人「王陽明」という方の言葉ですが、「知行合一」とは、天下国家にある腐敗、そしてその中で苦しみ悲しむ人々の泪、もしくはこれからさらなる危機があることを知ったのならば、行動を開始しなければならず、何も行動しないのならば真に知ったことにはならない、知識と行動を一つの同じものとする、そういう意味です。

これは儒教の孔子の言葉「先ず其の言を行ひ、而して後にこれに従ふ」という言葉が元になっていると言われてます。この意味は、「行動できないことを口に出すべきではなく、口に出す前に行動すべきである」ということです。簡単に言えば「やってからものを言う」ということです。

そして「知行合一」を実践するためには、私たち一人一人が成長しなければなりません。ロバート・シュラーという牧師はこう言いました。「世界を変革するには、まず自分自身を変えることから、始めなければならぬ」と。

すなわちこのコロナ時代において、「常に希望を持ち、ポジティブで燃えるような願望を持って行動する人」へと、私たち成長していくことが大切なわけです。「自分をより素晴らしい人間へと成長させよう」と思うことが、世界を変えていくわけです。

そしてかつて日本には、そうした「我、一人立つ」という精神を教えてくれた教育がありました。

それが「武士道教育」です。

日本人が「武士道」によって育んできた侍精神こそ、「たとえ嘲笑われようとも、誹謗されようとも、批判され、誤解されようとも、正義のためならば、我、一人立たん」という勇氣と気概であつたの

です。

「武士道」こそ、言葉と行動の秀才を築いていくものです。

武士道とは神儒仏

では、「武士道」とは何でしょうか？

明治から大正、昭和にかけて世界的に活躍された日本人に、新渡戸稲造という方がいました。

彼は外国の教授から、「それでは貴方の国には宗教教育はないと、そうおっしゃるのですか？」と質問されて、「ありません」と、きっぱりと答えたそうです。

するとその外国の教授は、「宗教教育無しで、どうして人々に道徳を授けることができるのですか？日本人は何を基準に物事の善悪を学んでいるのですか？」と驚いて聞き返したそうです。

なぜなら外国では、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、もしくは仏教や儒教などが、人々に善悪を教えて、「正義とは何か、愛とは何か」ということ教えて、人々の心に勇気を育んできたからです。新渡戸氏は、外国の方にそう言われて、「自分たち日本人はどのようなにして道徳を得て、何に基づいて物事の善悪を学んでいるのか」、それを考えてみました。そして彼はやがて、「日本人には武士道教育がある」ということに気がついたのです。

こうして彼は、日本人を外国の方々に理解してもらおうと、『Bushido: The Soul of Japan』、邦題『武士道…日本の魂』という書物を書きました。日本人に勇気を授けていたもの、それは「武士道教育」だったのです。

では、武士道とはいかなるものか、幕末の思想家であり、侍でも

ある山岡鉄舟やまおかてつしゅうという方は、次のように述べています。「武士道とは神道しんどうこあらず、儒道じゆどうにあらず、仏道ぶつどうにあらず、武士道とは神儒仏しんじゆぶつ、三道融和さんどうわの道念どうねん」と。

「道念」とは、「道を求めて学ぼうとする熱い思い」のことであり、すなわち「向上心」、「求道の心ぐどうしん」のことです。

つまり山岡鉄舟という侍は、「武士道とは、日本独自の宗教である神道しんどうそのものでもなければ、中国発祥の儒教そのものでもなければ、あるいはインドやネパールで興った仏教そのものでもない。武士道というものは、これら三つの神道、儒教、仏教が融和したものであり、これらの三つの道を学ばんと道を求める心の先にあるもの、それが真まことの武士道なのである」と、そう述べたわけでした。

実は新渡戸氏も『武士道…日本の魂』という書物の中で、様々な理論を展開しつつも、やはり「武士道は仏教、儒教、神道の影響を受けて形成されている」という答えを導き出しております。

このように武士道とは、神道、儒教、仏教が、この和の国・日本において奇跡的に融和することで、築き上げてきたものだったので、なぜ「奇跡」と言えるかと言えば、それはユダヤ教、キリスト教、イスラム教は、本来は「兄弟宗教」であるというのに、「宗教紛争」を起こして、世界を滅ぼし兼ねないというのに、和の国・日本では、この世ではまったく関係がないはずの神道、儒教、仏教が融和することによって、「武士道」を築き上げたからです。

ですから武士道教育が築かれたということは、人類にとつての奇跡であり、武士道精神とはまさに「奇跡の精神」なわけですね。

ですからこの武士道教育こそが、日本人の勇気、大いなる平和、大調和を求める心を開花させてきたわけです。そしてその心のことを「大和心」、もしくは「大和魂」と言うのです。

この「大和魂」という言葉も、戦後の日本では大きく誤解されて、私たち日本人は洗脳されてきました。『源氏物語』に出てくる「大和魂」という言葉は、我が子をどの様に育てたら良いのか悩んでいる主人公が、均整の取れた優れた心を身に付けさせてあげたいとして、その美しき心のことを、紫式部は「大和魂」という言葉で現しています。和歌を集めた『後拾遺和歌集』^{ごしゅういわかしゅう}で使われている「大和心」も、軍国主義などとは、全く違う使われ方をしています。

「大和魂」を廃れさせるにあたり、彼らは侍精神無き右翼を利用したのです。すでに述べましたように、『自民党』の岸信介、『日テレ』の正力松太郎と共に、「戦後の右翼の大物」と言われる児玉誉士夫は、元CIA工作員でした。

そしてすでに述べましたように、彼らは暴力団をも時には利用してきました。

特別会計の件で、石井紘基を殺害した尹白水という在日朝鮮人が、右翼を標榜する暴力団員でもあったように、彼らは暴力団に、あえて右翼活動をさせてきたわけです。そして右翼に、暴力的な街宣活動をさせることで、日本人から「愛国心」を削ぎ落とすと共に、人々に対して「大和魂」という言葉をも誤解させてきたわけです。

なぜなら真実の大和魂とは、「大いなる調和のための精神」に他ならないからです。

すなわち戦前と戦後では、「右翼」という意味も大きく変わってしまったわけです。

たとえば戦前の「右翼」に、『玄洋社』という団体がありました。GHQは「もつともキチガイじみた団体」として、この組織を解散させております。もちろん彼らは暴力団ではありません。暴力団が右翼活動を始めて、お金のために暗殺まで行うようになったの

は、戦後のことです。

ですから戦前と戦後では、「右翼」の意味合いも違うわけです。少し話がそれましたが、私たちが悪魔に打ち勝つためには、大和魂を取り戻すことが大切であり、そのためには武士道を甦らせる必要があるのです。

衰退させられた武士道

戦後、武士道と大和魂は失われました。

なぜなら国際銀行家の傀儡であったGHQは、終戦からわずか四ヵ月後の12月15日には、「神道指令」というものを発令して、神道という日本民族独自の宗教を、日本の隅に追いやったからです。悪魔は人々を眠りから目覚めさせる武士道が嫌いなのです。

悪魔は侍精神が嫌いなのです。

そのために彼らは、日本人から八百萬の神々を祀ることを忘れさせたわけです。

全国に八万社もある神社、これはコンビニ24万軒の約2倍です。ちなみにお寺は七万六千もあります。ですからコンビニの四倍も、日本には宗教施設があるわけです。

伊勢神宮に祀られ、八百万の神々の中心の神、天照大神、この神様から六代くだると初代・神武天皇になり、令和の今上天皇で弟126代目です。

つまり皇室の先祖は天照大神なわけであり、天皇陛下というのは、日本中に数多くいる神主の最高権威であり、ローマ法王と同じく宗教家なわけです。言葉を変えると、日本という国は、今でも神話が続けている、世界で最も神秘で、なおかつとても稀有な国なわけ

す。

そうした中で、二千七百年という世界最古の歴史を持つ日本において、常に神道は日本の中心にありました。

しかし日本人は、悪魔がかった戦後教育のおかげで、「神道」や「天皇陛下」、あるいは「日の丸」の意義も忘れ、子どもまで「テノン」呼び捨てにする時代となりました。

日本建国から皇紀2681年の歴史の中で、日本の中心から「神道」が外され、日本人が「天皇陛下」の存在意義さえ忘れてしまったのは、実は今が初めての事です。

そしてこの『神道』という日本独自の宗教には、『古事記』や『日本書紀』といった聖典があり、その中には様々な神々の物語が描かれてはいるのですが、しかし実は「心の教え」に相当するものがありません。

実は武士道を構成している神道の「心の教え」の部分を、補ってきたのが他の残りの武士道の二つである儒教であり、仏教であったのです。

何とも不思議なことに、明治維新が起こるまで、神道の神主である天皇陛下を始めとする皇室の方々は、仏教に対する信仰を持ち、そして戦前までは、日本の教育の中で儒教が教えられていたのです。ですからGHQは武士道を破壊するために、「神道指令」以外にも、「教育制度改革」と言って、日本の公教育で行われていた、儒教教育「修身」を排除しました。

儒教教育が、日本人に「徳とは何か」、「勇氣とは何か」、「仁義とは何か」ということを教えていたのですが、この儒教教育が完全に取り除かれてしまったわけです。

するとその後、なぜか戦後の日本では、△マークの『東映』など

が、待映画よりもヤクザ映画ばかり作り、それらが流行るようになります。まさに日本人そのものが、「仁義」をはき違えていくわけです。

ちなみに映画『仁義なき戦い』の深作欣二監督の最後の作品は、「中学生同士が殺し合いをする」というストーリーの『バトル・ロワイアル』でした。普通に考えれば、「狂っている」としか思えません。

神道を排除し、儒教も排除したGHQは、さらに極めつけとして、「農地改革」を行ないました。これによって、それまで神社やお寺が持っていた土地を取り上げることで、神主やお坊さんといった宗教家たちの経済基盤が奪われました。

宗教家たちの経済基盤を奪い取れば、必然的に神道や仏教が衰退し、同時に神主さんやお坊さんたちが生活に追われ、金儲けばかりに励むようになりました。宗教家がお金のことばかり考えれば、彼らの精神性は自然と落ちていきます。日本の宗教家の精神性が下がれば、自然と日本国民全体の精神性も落ちていきます。

このように彼らは、日本の宗教家の経済基盤を取り除くことで、日本人全体の精神性を下げていったわけです。

しかもGHQは、日本中にわざわざ公民館を建てて、それまでお寺や神社が行っていた塾や催し物、あるいは子ども会などの集まりを、この公民館で行わせました。それは日本国民を、お寺や神社といった神仏の聖域設から遠ざけるためです。

つまり国際銀行家の傀儡GHQは、「神道指令」によって神道を隅にやり、「教育改革」によって儒教教育を取り除き、「農地改革」によって、宗教家の経済基盤を奪い取り、日本の神道や仏教を衰退させ、そしてわざわざ公民館を建てることによって、日本国民を宗

施設から遠ざけたわけです。

おかげで日本人が、神社やお寺に行く機会といたら、観光か縁日、あるいは七五三や結婚式や葬式などの冠婚葬祭ばかりになってしまいました。

その結果、いつしか日本国民は、「いただきます」という祈りのカタチだけは残っても、「宗教とは冠婚葬祭の専門業」と考えるようになってしまったのです。日本人が食事をする際に、手を合わせる姿を見て、外国人は不思議に思います。

「なぜ日本人は無宗教なのに、食事の前に手を合わせるのか？」と。それは常に日本の中心に神道があり、その神道が儒教や仏教と融和する中で、日本人が文化や風習を営むと共に、武士道を築き上げてきたからに他なりません。

そしてこの武士道こそ、日本人の勇気と気概を育んできたものであるために、GHQは武士道を衰退させるために、あえて神道、儒教、仏教を衰退させたわけです。

「世界を変革するには、まず自分自身を変えることから、始めなければならぬ」というロバート・シュラーの言葉をご紹介いたしましたけれども、私たち一人一人が成長を遂げて、世界を変えていくためにも、勇気と気概を授けてくれる武士道を、今こそ私たちは取り戻すべきではないでしょうか。

大和魂が悪魔を出し抜く

すでに紹介いたしましたのが、ナポレオン・ヒルという方は、「思考は現実化する、人生には燃えるような願望が大切である」ということを述べました。彼は80年以上も前の方ですが、成功哲学に関

する多くの書物を書かれて、世界中の人々を啓蒙してきました。

そして彼によれば、彼は悪魔という霊的な存在と対話をしたというのです。ナポレオン・ヒルは、その内容を一冊の書物にまとめました。しかし彼は家族から猛反対され、その悪魔との対話の書籍を、販売することができませんでした。

しかし2013年になって、ナポレオン・ヒルの悪魔との対話は、『悪魔を出し抜け!』という一冊の書物となってようやく販売されました。

悪魔は傲慢不遜にも、自分のことを「陛下」と呼べなどと注文を付けたりしながらも、悪魔が人間の意識をどのようにコントロールするか、その手口を事細かに語りました。

「さすがに悪魔との対話なんて信じられない」という方もいるかもしれませんが。しかし私たちが打ち勝たねばならない勢力が、家畜思想・共産思想を持ち、そして彼らの中には、悪魔を崇拝している者までいることを考えると、「悪魔を出し抜け」ということは非常に大切なことです。そして何よりも、この書籍の内容が、とても興味深いのです。

悪魔によれば、悪魔が人間をコントロールする最大の武器は、「人間の恐怖」であるそうです。

そしてその「恐怖」として、悪魔は以下の6つを述べました。「貧困」、「非難」、「病気」、「失恋」、「老い」、「死」、悪魔は人間がこれらの恐怖心を抱く際、あたかもその人間自身が、自分からこれらの恐怖を抱いているように見せかけながらも、実のところその背後には、悪魔たちの暗躍が潜んでいると言います。

そして悪魔がこれらの6つの恐怖の中でも、最も利用するのは、



「貧困」と「死」だそうです。

そして実際に悪魔崇拝者の国際銀行家たちは、金融の仕組みによって私たちを貧しくし、さらにコロナパンデミックによって経済を止めることで、人々の「貧困への恐怖」を煽っております。

あるいはコロナ騒動によって、今まさに世界中の人々の心に、「死への恐怖」も蔓延しております。

『悪魔を出し抜け!』の中で、悪魔が述べていたことは、まさに現在の状況に当てはまるものがたくさんあるわけです。

そしてとても重要な情報として、悪魔が最も好む人間のタイプがあるそうです。それは「流される者」です。

常識に流される、昨日までの自分に流される、世の風潮に流される、空気に流される、マスコミ報道に流される、政府の発表に流される、周囲の人たちに流される、この「流される」という言葉には多くのことが言えますが、そうした「流されるタイプの人間」こそ、悪魔は最も好きだそうです。

では、悪魔が最も嫌いな人間はいかなるタイプか? 「流される」の反対は果たして何なのか?それが分かれば、私たちは、まさに悪魔を出し抜くことができます。

悪魔が最も嫌いなタイプの人間、それは「考える人間」だそうです。自分の頭で考える、仲間と話し合って考える、自分で調べて考える、自分から情報を掴んで考える、何を学ぶかを考える、何を信じるべきかを考える、こうした「考える人間」こそ、悪魔は最も忌み嫌うそうです。

迫害の歴史をくぐり抜けてきたユダヤ人たちは、皆で多数決を取って、もしも「10対0」になると、「これは何か感情や空気に支配されて、正しい判断が出来ていないのではないか?」と考えて、

もう一度、考え直してから、多数決をやり直すことがあるそうです。

しかし「和の心」を尊み、島国において迫害とは無縁で生きてきた日本人は、ユダヤ人とは真逆で、「空気」に支配され易い民です。むしろ日本人の場合、もしも多数決を行って、「9対1」、もしくは「8対2」であったならば、少数の一人、二人が皆の意見に同調することもよくあります。

それで正義が実現すれば良いのですが、しかしこの「和の心」が悪い方向で働くと、少数意見が黙殺されてしまうことも、十分にありえます。それでは悪が跋扈する世に、なってしまうかもしれません。

なぜなら、一人の正義が、多数の悪に敗れてしまうことが考えられるからです。

しかしそれは、本来の日本人のありべき姿ではありません。江戸時代の幕末に、黒船が来航して一大事となった時、吉田松陰という侍はじっと座していられず、死を覚悟で黒船に密航しようと企てました。見聞を広めて欧米列強に植民地にされることのない、そんな日本を造り上げるためです。

しかし松陰の密航は失敗に終わりました。そして江戸に護送される途中、松陰は泉岳寺を通り過ぎる際に、赤穂浪士四十七士と自分を重ね合わせて、次のような句を詠んでいます。

「かくすれば かくなるものと知りながら 已むに已まれぬ 大和魂」

密航などしようとすれば、この様な結果になってしまうだろうと、自分でも十分に分かっていたけれども、しかし私のこの熱い「大和魂」だけはやむことが無く、囚われの身というこういった結果になつてしまった、松陰はそう詠んだのです。

日本人の本来の心、それは「大和心」であり、「大和魂」です。「和」を何よりも貴み、小さな「和」を打ち崩して、「より大きな調和」を打ち立てようと「大調和」を追い求める心、これこそが日本古来より伝わる「大和の心」であり、かつて「大和」と呼ばれた国の心であり、青き山々が連なり、「真秀ろば」とも称された美しき我が国の精神なのです。

この「大和魂」があつたからこそ、この「日本」という名の龍の落とし子のような形をした国は、これまでの弱肉強食の時代において、いつでも外国の脅威を打ち破つて、そして国を発展・繁栄させて、歴史を刻んでくることができましたのです。それはつまり、およそこの日本に生きる者の中で、大和魂の恩恵に預からない者はいない、ということなのです。

そして悪魔は「流される人間」を好み、「自分で考える人間」を忌み嫌う、だから彼らは大和魂を嫌うのです。だから日本のためにも、私たちがのためにも、「大和魂」を取り戻す必要があるのです。

特攻隊の真意「其の壺」

「自分で考えて行動する」という、悪魔が忌み嫌う「大和魂」を取り戻すためにも、「私たちは大和魂を知る必要がある」ということが言えるでしょう。実は先の大戦中、当時の米国、英国、ロシア、中国には「日本を分割統治する」という案までありました。

いわゆる「日本分割統治計画」です。つまり日本人もハワイの人々のように、国を完全に失ってしまう可能性がたしかにあったの



です。すなわち日本が完全に滅びてしまう可能性が、たしかにあつたわけです。

しかしもしも日本を分割統治すれば、命知らずの侍たちによる反乱が日本各地で起こり続けて、甚大な被害が出続けて、結果的には「日本統治は不可能である」と考えられて、この「日本分割統治案」は無くなったと言われています。命を惜しまない侍たちによつて、日本は滅びずにすんだわけです。

それはかつてこの国にいた真の侍たちが、「いかに死ぬか」ということに、大きなこだわりを持つていたからです。侍は「死に対する美学」を持ち、ゆえに彼らは、人に命を取られることを由とせず、時には切腹して自らの命を閉じました。真の武士は、名誉や官位に執着せず、食事や衣服にもこだわりませんが、「死に様」にだけは大きなこだわりを持ったのです。

そんな彼らだからこそ、先の大戦において戦局が悪くなり、なおかつ日本完全消滅の危機さえ感じ取ると、彼らは「神風特攻隊」として、爆弾を積んで敵戦艦に突撃を行ったのです。つまり特攻攻撃の第一の目的は、「敵艦を叩いて退ける」ということでありましたが、第二の目的として「侍の真の強さを見せつけて怯ませる」ということもあつたわけです。

あえて米軍は特攻攻撃の被害を小さく発表しているようですが、全体で見ると二十パーセントぐらいが、敵艦に飛行機ごと命中しており、途中の空中戦で墜とされたものもあるために、それを差し引くと特攻での命中率は五十六パーセントだったそうです。ですから米軍は相当な被害を受けており、実は何百隻もの戦艦が大破、もしくは撃沈させられました。「屈強な肉体」を持つ米兵の中には、日本の侍たちの「屈強な精神」がまるで理解できず、ノイローゼにな

る者さえいました。

しかしこの特攻攻撃の元は、鎌倉時代や南北朝時代に遡ります。「侍の鑑」と誉れ高い楠木正成は、足利尊氏と対決しました。足利尊氏軍3万5千の兵に対して、楠木正成軍の兵はたったの700騎、その戦力差は実に約50倍以上でした。誰もが、簡単に勝敗がつくと思いましたが。しかし楠木正成軍は50倍の軍勢に対して、鬼気迫る勢いで16回にも及ぶ突撃を繰り返しました。それでもやはり多勢に無勢、突撃の度に、楠木正成軍は減り続け、6時間の激闘の末、残った者はわずか73騎でした。

楠木正成は生き残った73名の部下と共に、死出の念仏を唱えて火を放ち、自刃しました。享年42歳です。この時の彼の言葉が、世に有名な「七生報国」です。つまり、「七度、生まれ変わろうとも、自分は天下国家に報いる」ということでした。こうした楠木正成の侍精神、特攻精神は、その後、日本中に根付いていき、激しい戦国時代にも、明治維新の時にも、先の大戦にも、「楠公精神」として受け継がれていきました。

かつての侍たちは、「真の強さとは『生への執着』を断ち切り、『死の恐怖』を克服するものである」ということを追求していたことから、時には命さえ惜しまない特攻を行ったわけですから、

しかし悪魔勢力は、「侵略したのも日本、大虐殺を行ったのも日本」と、正義と悪を見事に入れ替えたように、日本を守り抜いた侍たちを、気が狂ったテロリストと宣伝してきたのです。そしてそれを多くの日本人が信じこまされてきました。

特攻隊の真意「其の式」

確認されている特攻隊員は14,009名です。私たち人間という生き物は、想像力の欠如からなのか、「二万人」とか、「十万人」とか、「百万人」とか、そうした言葉を聞くと、何かぼんやりと捉えてしまいがちです。しかし十万人ならば十万分の人生がたしかにそこにはありました。泣いたり、笑ったり、怒ったり、喜んだり、落ち込んだり、嬉しくなったりする人生がたしかにあったのです。そしてたしかに14,009名分の人生が、日本のために自ら幕を閉じたのです。そして今、私たちがその国で生きています。

その特攻隊員の中の一人に、穴沢利夫少尉という方がいました。穴沢氏は、幼い頃から読書好きで、夢は故郷に児童図書館を作ることだったそうです。そうしたことからは彼は、文部省の図書館講習所を卒業して、中央大学に進学しました。彼は図書館で働きながら勉強しました。その図書館に昭和16年の夏、図書館講習所の後輩たちが実習にやってきました。そこで彼は運命の出会いをします。それは孫田智恵子さんという女性です。

二人の交際は昭和16年の暮れから始まりました。学生の男女が付き合うことを、「はしたない」とされた時代であったために、二人の交際は大半が手紙でした。やがて二人は結婚を望みます。しかし穴沢氏の兄は、都会の娘である智恵子さんとの結婚に反対しました。そしてその兄の意見に引きずられる形で、両親までも結婚に反対してしまいました。

戦争の真つ只中であつたために、穴沢氏は戦時特例法によって、大学を繰り上げ卒業し、熊谷陸軍飛行学校相模教育隊に入隊しました。昭和20(1945)年3月8日、穴沢氏は自分が属する隊の隊長から、特別休暇をもらって帰郷すると、結婚に反対していた両

親を説得します。そしてようやく彼は、智恵子さんとの結婚を許可してもらいました。大喜びした穴沢氏は翌日の3月9日に、さっそく東京の智恵子さんの家を訪ねて、結婚の報告をしました。

こうしてようやく二人の結婚が、晴れて決まったわけです。喜びで胸を膨らませた彼は、その日は目黒にある親戚の家に泊まりました。しかし何とも皮肉なことに、翌日の1945年3月10日は歴史上悪名高い、死者を10万人以上出し、東京の3分の1を焼き尽くした、あの「東京大空襲」だったのです。民間人への軍事攻撃は国際法違反ですが、米軍は焼夷弾の雨を東京中に降らせ、町中至るところが火事となり、死傷者が町中に溢れかえる大惨事となりました。まさにジェノサイドです。

穴沢氏は、婚約者の安否を心配して、まだ夜が明けきらないうちに親戚の家を飛び出して、彼女の実家へと向かいました。同じ時、彼女も彼の身を案じて目黒に向かいました。携帯電話の無い時代ですから、会えるかどうかの確信はなく、ただただ、愛する人の身を案じて、二人の若者は、火災で死傷者が溢れる混乱した東京の町を走りました。

そして二人は奇跡的に、大鳥神社のあたりで出会うことができました。しかし戦争中、穴沢氏は、大宮の飛行場に帰らなければならなかったのです、彼女と共に電車に乗り込みました。しかし電車は、空襲のあとで避難する人々で溢れかえり、あまりの混雑の息苦しさ、智恵子さんは池袋駅で電車を降りてしまいました。

これが二人の最後の別れとなりました。皮肉にも結婚が決まった翌日が、二人の最後の別れとなったのです。そしてそれから1ヵ月後、彼女の元に穴沢氏から手紙が届きました。以下がその手紙です。

二人で力を合わせて努めて来たが、終に実を結ばずに終わった。

希望を持ちながらも、心の一隅(いちぐう)であんなにも恐れていた「時期を失する」と言うことが実現してしまったのである。

去年十日、楽しみの日を胸に描きながら、池袋の駅で別れたのであったのだが、帰隊直後、我が隊を直接取り巻く情況は急転した。

発信は当分禁止された。(勿論、今は解除)

転々と処を変えつつ、多忙な毎日を送った。

そして今、晴れの出撃の日を迎えたのである。

中略

今は、いたずらに過去における長い交際のあとをたどりたくない。問題は今後にあるのだから。

常に正しい判断をあなたの頭脳は与えて進ませてくれることと信ずる。

しかし、それとは別個に、婚約をしてあった男子として、散って行く男子として、女性であるあなたに少し言って征きたい。

「あなたの幸を希う以外なものない」

「勇気を持って、過去を忘れ、将来に新活面を見出すこと」

「あなたは、今後の一時々々の現実の中に生きるのだ。穴沢は現実の中には、もう存在しない」

極めて抽象的に流れたかも知れぬが、将来生起(せいき)する具体的な場面々々(ばめんばめん)に活かしてくれる様、自分勝手な、一方的な言葉ではないつもりである。

純客観的な立場に立って言うのである。

当地は既に桜も散り果てた。

大好きな嫩葉の侯がここへは直きに訪れることだろう。

今更、何を言うか、自分でも考えるが、ちよっぴり慾を言ってみた

い。

1 読みたい本

万葉、句集、道程、一点鐘、故郷

2 観たい画

ラアフェル「聖母子像」、芳崖「悲母観音」

3 智恵子、会ひたい、話したい、無性に。

今後は明るく朗らかに。

自分も負けずに朗らかに笑って征く。

昭和20年4月12日 智恵子様

福島県出身 中央大学卒

陸軍特別操縦見習士官1期

陸軍特別攻撃隊 第20振武隊

昭和20年4月12日沖繩周辺洋上にて戦死 23歳

穴沢氏の特攻の日と手紙の日付は同じですから、おそらくこの手紙は、死の直前に書かれたものです。GHQが正義と悪を入れ替え、特攻隊をテロリストのように宣伝してきたために、「神風特攻隊」という言葉を聞くと、暴力的にとらえてしまい、己むに己まれず特攻を行った侍を、まるで「狂人」か何かのように考えてしまう人もあるかもしれません。しかし、こうした自分をかなぐり捨てて戦う、日本男児の不撓不屈の侍精神を見せつけることによって、『日本分割案』は消し飛んだのです。

豪華客船タイタニック号よりも巨大な戦艦大和も、沖繩県民を助けにいくために救出に向かいましたが、あの時、戦艦大和の一室の黒板にはこう書かれてあったそうです。

「総員、死に方、用意」

特攻隊の真意「其の参」

大和心・侍精神を持っていたのは、何も男たちだけではなく、女性たちも例外ではありませんでした。たとえば藤井一少佐という侍は、陸軍飛行学校において、「真の侍たる軍人とは如何なるものか」と、武士道について教えていました。そして敗戦色が濃くなり、なんとしても日本を護り抜かんとして、特攻隊の神風が吹き荒れると、彼も特攻隊に志願しました。なぜなら彼自身が、「事あらば敵陣に、あるいは敵艦に自爆せよ、私も必ず後から行くから」と、生徒たちに侍精神を教えると共に、生徒たちと死の約束を交わしていたからです。しかし彼には妻子がいたこと、彼が長男であったこと、そして彼自身がパイロットではなかったこと、これらの理由から、彼の特攻隊の志願は二度にわたって却下されました。

藤井少佐は仲間との約束を破り、裏切ることには耐えられず、苦しみ続けました。そうした彼の苦しむ心を理解した妻・福子さんは、幼い二人の子どもを背負い、「一足お先に逝って待っています」と手紙を残して、荒川に入水自殺したのです。こうした経緯によって、彼の三度目の特攻隊の志願は受け入れられました。死出の旅に出る藤井氏を囲んで、送別会が開かれたそうですが、参加した人々は皆、彼を氣遣って亡くなった福子さんや子どもたちのことを口にする者はなく、しかし悲しい雰囲気でもなく、むしろ笑顔でさわやかに酒が酌みかわされたそうです。

やまとたけのみこと おしとらはなみ

『古事記』や『日本書紀』の神話にある日本武尊と弟橘媛にも、この話と似たものがあります。神代の時代、日本武尊が東国に攻め入る時に、海の神が暴れて、波が荒れ狂い、船が危険にさらされました。その時、弟橘媛が代わりに海に身を投げて、海神を鎮め、波を静めたのです。このようにこの国の益荒男たちは、神話の時代

よりずっと、強く美しい大和撫子たちによって支えられてきたわけです。

耐え難きを耐え、忍び難きを忍びながらも、日本を守り抜いて来たのは、何も男ばかりではなく、女性も同じであったということを説明するにあたり、次の手紙をご紹介します。それは特攻隊として、18歳で亡くなられた相花信夫少尉^{あいはなのぶお}という方の手紙です。

母を慕いて 母上様御元氣ですか。永い間本当に有難うございました。

我六歳の時より育て下されし母。継母とは言え世の此の種の母にある如き不祥事は一度たりとてなく 慈しみ育て下されし母。有難い母 尊い母。俺は幸福であった。

ついに最後迄「お母さん」と呼ばざりし俺。幾度か思い切って呼ばんとしたが 何と意志薄弱な俺だったろう。母上お許し下さい。さぞ淋しかったです。今こそ大声で呼ばして頂きます。

お母さん お母さん お母さんと

第七七振武隊 相花信夫少尉

昭和20年5月4日出撃 戦死

この手紙を受け取って母は、いったいどれだけ嬉しかったことか、そしてどれだけ悲しかったことか、そしてどれだけ誇りに想ったことか、男だけではありません。女性たちの中に、自らが侍として闘う女傑もいれば、侍たちを支える大和撫子もおられました。皆が先人たちが築き上げてきた日本を守るため、そして未来の日本人々のために、戦い抜いたのです。

特攻隊の真意「其の四」

特別攻撃隊の編成、そして出撃命令を初めて発した人物を大西瀧治郎中将と言います。この大西瀧治郎中将こそ、「特攻の父」と呼ばれている方です。しかしこの大西中将こそ、実は日本海軍の中にあった「特攻思想」に対して、「統帥の外道^{とゆうすい げどう}」と称しておりました。

「統帥」とは軍隊を指揮監督することであり、「外道」とはまったく道から反れているという意味です。つまり大西中将は特攻攻撃に対して、実は大反対の立場にあったわけです。なぜならやはり命は大切だからです。しかしその彼が「特攻の父」となるわけです。『日本海軍航空史(1) 用兵編』には、大西瀧治郎について次のような記述があります。

「1944年10月、大西が第一航空艦隊司令長官としてフィリピンに向かう前のことである。

大西は多田力三(りきぞう)中将(軍需省兵器総局第二局長)に特攻構想について話した。多田が『あまり賛成しない』と述べたところ、大西は『たとえ特攻の成果が十分に挙がらなかったとしても、この戦争で若者達が国のためにこれだけのことをやったということの子孫に残すことは有意義だと思ふ』と話した」

また『一億人の昭和史3』には、「特攻の父」大西瀧治郎について、海軍に従軍していた毎日新聞記者の新名丈夫という方の証言もあります。

「大西は『もはや内地の生産力をあてにして、戦争をすることはできない。戦争は負けるかもしれない。しかしながら後世において、われわれの子孫が、先祖はかく戦えりという歴史を記憶するかぎり、大和民族は断じて滅亡することはないであろう。われわれはここに全軍捨て身、敗れて悔いなき戦いを決行する』と話していた」

「特攻の父」が当初は特攻を「統帥の外道」と考えていましたが、しかし次第に考え方が変わり、「戦争で若者たちが国のためにこれだけのことをやったということの子孫に残すことは有意義」、あるいは「先祖はかく戦えりという歴史を記憶するかぎりには、大和民族は断じて滅亡することはない」と語っていたわけです。これらのことから何が分かるでしょうか？それは特攻攻撃の目的というものには、「第一には敵艦を叩くことであり、第二には侍の強さを見せつけ、米兵を怯ませて、日本分割案を退ける」ということでありましたが、実はそれだけではなく、「子孫に対して、かつての若者たち、先祖たちがいかに勇敢に戦ったかを教えることで、『真の強さ』を後世の日本人に伝えて、大和民族が滅びないようにする」というさるなる大目的もあった、ということなのです。

特攻精神、それはまさに大和魂であり、日本民族に対する、「民族的遺産」であつたわけです。後世に生きる私たち日本人に対して、「本当の強さとは何か？」ということを伝えるという目的も、実はあの特攻攻撃には含まれていたわけです。私たちの魂を目覚めさせるためにも、特攻攻撃は行われていたのです。

しかし私たちは、特攻の真意を知らないばかりか、日本を守り抜いてくれた彼らに対して、恩知らずとなり、特攻隊員をテロリストと勘違いして感謝の心も無く、茶番のコロナパンデミックによって今まさに、日本を滅ぼそうとしているのです。武士道を取り戻す必要があります。

オウムが悪魔の手先の可能性

私たちがこのまま流されていたら、日本も世界も滅んで、ただ悪

魔を喜ばせることになるでしょう。だからこそ私たちは、悪魔に立ち向かわねばならず、だからこそ私たちは、強く優しく精神を甦らせるためにも、武士道を取り戻さなければなりません。

そしてすでに述べましたように、「武士道とは神儒仏の融和」であり、日本の神道、中国で始まった儒教、インドで興った仏教、この三つが、この日本という和の国で、奇跡的に融和することで武士道は伝えられてきました。

神道とは、八百万の神々を信じ仰ぎ奉りながら、神へと通じる道、つまり随神かんながちの道を歩むことで、自らもまたこの日の本から世界を、より素晴らしくせんとする日本独自の宗教です。

儒教とは、仁や義や礼や勇といった徳目を大切にして、徳高き君子を目指し、天下国家のために戦う、中国で始まった道德的な宗教です。

仏教とは、自らが転生輪廻、すなわちあの世からこの世に生まれて、またあの世へと還っていくことを悟り、この世におけるあらゆる執着を断ち切つて、無我の境地を目指し、偽物の自分を捨て、本物の自分、つまり真我を見出すべく、インドで興った悟りの宗教です。

私たちが悪魔に打ち勝ち、そして人間を「家畜」と考えたり、「物質の塊」と考えたりする悪魔思想を持つ者たちを改心させるためには、まず私たちが現代に武士道を取り戻す必要があります。

しかしすでに述べましたように、先の敗戦を一つのキッカケに、日本人は神道からも、儒教からも、仏教からも遠ざかってきました。そして宗教の衰退と精神医学の流行と共に、日本人の間で「薬」が流行するかたわら、「悟り」が失われてきました。

そして「オウム事件」です。

もともとオウムは、「オウム神仙の会」というただのヨガ団体だったのですが、いつしか宗教を語り始め、悪魔的な組織となり、そして拉致事件や「サリン事件」を起こしました。

このオウム事件によって、日本人はますます「宗教は恐ろしい」と考えることで、実は精神医学が大流行してきました。なぜなら丁度その頃の90年代から、製薬会社が「ウツは心の風邪」というキャンペーンを大々的に行なっていくからです。今では都心では、駅という駅にメンタルクリニックがあります。

そして実は、このオウムという組織が、悪魔勢力と繋がりがあった可能性があります。たとえば石井紘基氏は本名は尹白水という暴力団員の在日朝鮮人に殺されましたが、オウムの幹部の村井秀夫という男も、徐祐行という暴力団員の在日朝鮮人に殺されております。在日朝鮮人の右翼が、オウム幹部を殺害する理由は果たして何でしょうか？在日朝鮮人の右翼にも、日本に対する愛国心が本当にあるのでしょうか？

そしてもしも仮に、オウムの村井がヒットマンに殺害されたとして、ではその本当の理由は何なのでしょう？誰が村井暗殺を依頼したのでしょうか？

国際銀行家とオウムを結ぶ線、それが『MKウルトラ計画』です。

すでに述べましたように、アメリカとカナダにおいて、『MKウルトラ計画』というものが行われていました。「世界精神医学学会」会長のドナルド・ユーン・キャメロン博士が、「人間の脳にLSDの投与や電気ショックを与えて白紙の状態、無意識の状態にして、その状態の中で命令を下せば、人間をマインド・コントロールできる、つまり人々を洗脳できる」と考えて行った人体実験です。

そしてこの「MKウルトラ計画」の研究は、『拷問と医者』という一冊の書籍にまとめられました。こんな人道に反れた研究を、わざわざ出版して、一般人にその内容を教えてしまうこと事態が問題なのですが、しかしさらに何とも厄介なことに、この洗脳を徹底的に研究した書物が、なぜかオウムに渡りました。

オウムの付属医院の医師であった林郁夫は、自著『オウムと私』という本の中でも、あるいは裁判の中でも、この『拷問と医者』という書籍について触れています。

ですから誰かが意図的に、オウムに『拷問と医者』を手渡したのか、それともただ偶然に、オウム幹部の林郁夫が『拷問と医者』を手に取ったのか、それは定かではありませんが、確かにオウムは、『MKウルトラ計画』を真似て、人々にLSDの投与や電気ショックを行って、マインド・コントロールしたわけです。

こうして単なるヨガ団体であった『オウム神仙の会』は、CIAが徹底的に研究したマインド・コントロール技術を駆使して、エセ宗教団体『オウム真理教』へと発展していったわけです。真理とはまったく関係ない悪魔的組織が、真理を名乗ったわけです。

「『MKウルトラ計画』をオウムが利用したのは、単なる偶然ではないのか？」と、誰もがそう思うかもしれません。しかしオウムと国際銀行家を結びつける証言もあります。

元陸上自衛官の陸将補であられた池田整治氏は、次のように述べておられます。「地下鉄サリン事件を起こしたオウムの背後には、実は北朝鮮がいて、その背後にはさらにCIAがいて、そのCIAを操っていたのは国際権力であった」と。



この池田氏の発言も動画でご覧になれます。元自衛官の陸将補の池田氏が述べる国際権力とは、本書で述べている国際銀行家のことです。

いつも世間を騒がせている北朝鮮ですが、金正恩はスイスに留学していたことが分かっています。そしてスイスとは国際銀行『B I S』のおひざ元であり、『成長の限界』を書いた『ローマ・クラブ』の本拠地でもあります。ですから北朝鮮と国際銀行家に、何らかの接触があった可能性は、十分に考えられます。

オウムがサリン事件を起こした目的は、ハルマゲドンを演出して、麻原を救世主に祀り上げるためで、北朝鮮がサリン事件を支援した理由は、韓国との戦争に備えて、韓国の後方支援をするであろう日本を叩いておいて、支援をさせないためではないか、と言われております。

では、C I Aおよび国際銀行家のサリン事件の目的は何でしょうか？

ジャーナリストのベンジャミン、フルフォード氏が、中国の人民解放軍の幹部に取材した際、軍幹部からは「北朝鮮という国はアメリカの手下と認識している」と聞かされたと言います。これはアメリカというよりは、国際銀行家の手下と認識するべきでしょう。

なぜなら北朝鮮がミサイルを発射すればするほどに、軍需産業を儲けさせているからです。たとえばパトリオットミサイルを開発しているのは『レイセオン』であり、オスプレイを開発しているのは『ボーイング』ですが、これらともにロックフェラー系の会社です。

その他にも、軍需産業売り上げ世界一位の『ロッキード・マーティン』、戦車、戦闘機、潜水艦などを開発しており、国防産業世界一位の『BAEシステムズ』、そして原爆開発にも関わった『デュ

ポン』、これらの軍需産業は共にロスチャイルド系です。

彼らは銀行家であると共に、軍需産業も営んでいるために、世界で戦争が起きたり、北朝鮮が暴れてくれると儲かるわけです。だから元陸将補の池田整治さんは言うわけです。「米軍横田基地から北朝鮮の平壤へと飛行機が飛び、そして北朝鮮の軍事基地を作っている」と。

国際銀行家が北朝鮮を利用する理由は、武器を日本に売るため、そして戦争の火種になつてもらうためと言えるでしょう。

そしてニセ札作りからドラッグの製造、そして拉致事件など、北朝鮮とオウムには、かなりの類似性があります。

そしてすでに述べましたように、オウム事件あたりから、日本では「うつ病キャンペーン」が大々的に行われ、精神科クリニックが立ち並んでいきました。こうして心疲れた多くの人々が、「宗教は怖い、精神医学は安心」と考えて、精神科クリニックに通うようになったわけです。

つまり「オウム事件」によって、日本人の精神はさらに破壊されたわけです。

さて、信じがたいことは重々、承知であります。しかし緻密で狡猾な悪魔勢力は、もしかしたらオウムまで使つて、日本国民を神道、儒教、仏教といった宗教に対する誤解と偏見を植え付けて、武士道精神を破壊してきた可能性もあります。そうやって彼らは、日本人から武士道および侍精神を奪い取ったのかもしれない。

武士道とは如何なるものか

では、失われてしまった武士道とはいかなるものなのでしょう

か？

武士道とは、侍精神、武士道精神を人々に教えるものです。そして武士道精神とは、平和を愛する心です。

しかしその平和を愛する心とは、「悪にも、不正にも抗うことなく、ただただ誰にでも屈して、常に戦わないことを由とする心」ではありません。

武士道精神とは、平和を愛する心ではありますが、しかし何が何でも絶対に戦わない心ではないのです。

なぜなら武士道精神とは、やはり戦いの心でもあるからです。

しかしその戦いの心は、争いを好む心ではなく、争いを嫌いつつ、しかし平和のためには、仕方なく戦う心であります。

敵と見えし誰かに対して、憎しみを抱いて戦うのではなく、守るべき誰かに対して、愛でもって戦う心、それが武士道です。

ですからもし、すでに世の中に悪がはびこっているならば、平和のために仕方なく戦う、それが武士道精神です。

あるいは今後の未来に、さらなる悪が襲いかかり、多くの人々が犠牲になることが予測されているならば、平和のために仕方なく戦う、それが武士道精神なわけです。

すなわち武士道精神とは、己の立身出世、名誉名声、栄耀栄華のために戦う心ではなく、あくまでも天下国家のために戦う心に他ならないわけです。

自己愛によって、自分のために戦うのは、けっして武士道ではありません。

平和を愛して、他の人々のために戦う、それが武士道なのです。

そしてもちろんのこと、武士道精神とは、日本のためだけに戦う心でもありません。

武士道とは、「自らの国だけ栄えれば良い」というような、そんな国粹主義でもないのです。

なぜならあくまでも真の武士道精神とは、天下国家の大平のために戦う心に他ならないからです。

それこそが「八紘あめつちをおおいて宇と為なさん」という日本建国の精神であります。

すなわち武士道精神の中には、「一視同仁の心」が含まれているわけです。

すでに述べましたように、「一視同仁」とは、自分と他人を同じに見ること、すべてを平等に見ることに努め、つまりは差別無く、えこひいきせず、だれかれ区別することなく、また身分や出身、敵や味方などにもこだわらず、どんな人に対しても平等に慈しみ、なおかつ動物に対しても慈愛の心を持つことです。

ですから武士道精神とは、そうした生きとし生ける者に対して、愛の心を持つがゆえに、平和を愛するのです。

そして武士道とは、平和を愛するがゆえに戦いを好むことなく、時には仕方なく戦うわけです。

武士道とは愛です。

武士道とは戦いを嫌いながらも、悪とは戦う勇氣です。

武士道とは善と悪を見極める正義です。

愛と勇氣と正義を追求するからこそ、武士道精神とは、単なる国粹主義ではなく、あくまでも天下国家のための心なのです。

地球の大いなる調和のみならず、宇宙の大調和をも求める心、それこそが真の武士道精神であり、大和魂なのです。

ゆえに武士道とは、いかに執着を断ち切り、自分を空しくすることができるか、という自らの戦いです。

武士道とは戦いですが、それは結局、他人との戦いではないのです。
す。

武士道とは自分との戦いなのです。

そしてその自分との戦いの中で、かつての侍たちのように、自らの命まで天下国家のために投げ出すことは、とても困難なことです。なぜなら人間にとって、「死の恐怖」を乗り越えるということは、とても難しいことだからです。

しかしかつての真の侍たちは、確かに狂人になることなく、あくまでも常識人として、「死の恐怖」を超越しておりました。

ですから「死の恐怖」を乗り越えることが、たとえ困難であったとしても、しかし「死の恐怖」を超越した者こそ、英雄となり、覚者となるということも、私たちは知っておかねばなりません。

なぜなら戦わないために、心身ともに、自らを鍛え上げるのが武士道だからです。

つまり武士道とは、他人には優しく、自分には厳しい精進の道なわけです。

武士道とは結局、自己鍛錬の道であり、自らの冷たさ、自らの弱さ、自らの愚かさの対決なのです。

これを「己心の魔」と言います。

魔は、己の外にあるのではなく、己の心に潜むのです。

そして日本は今、国際銀行家の金融植民地と化し、中国共産党からは領土を侵され、なおかつ今後の未来には、さらなる犠牲が確実に予測されています。

ゆえに今こそ私たちは、自らに打ち勝つべく、武士道を甦らせなければなりません。

今、日本では、老若男女がマスクを着用して生活することが当た

り前になり、暗い表情を浮かべている人も大勢おられます。

日本人全体で見れば、笑顔が消えかかっているようにも見えます。そしてそれは日本のことだけではなく、世界の人々にも同じことが言えます。

だからこそ笑顔のために、私たちは戦わなければならないのです。簡単に言えば武士道とは、自分の笑顔のためにではなく、他人の笑顔のために戦う、そしてその戦いの中に自らを置きながらも、自身の笑顔を見つけ出す道なのです。

取り戻しましょう。武士道を。
取り戻しましょう。笑顔を。

そして人類が笑って過ごせる時代を築きましょう。

本書の最後に、いろいろと難しいことを述べましたが、他人の笑顔のために戦う、武士道はただそれだけなのです。

幼い子どもでも分かる単純なことを、大人として実践していく、それが武士道です。

本書は、コロナのトリックを暴きました。ぜひとも他の人々の笑顔のために、このトリックを伝えてください。よろしく願います。

最後まで、お読みいただき、誠にありがとうございました。

一般社団法人『武士道』 代表理 与国秀行

私たちのための試験問題

本書は、あくまでも「私たちのための新世界秩序」を築くために書かれたものです。そのために本書の内容の確認のために、「試験問題」を作ってみました。

ですからこの試験問題は、けっして誰かが誰かを裁くためのものでも、誰かに劣等感を抱かすためのものでもありません。なぜならこの試験問題は、あくまでも本書を読まれた方が、「ご家族や友人、あるいはネットを通じて、「コロナトリック」をよりの確に語っていただくにあたり、「必要な知識の確認」、「さらなる知識の吸収」を目的としたものだからです。

本書を読まれた方が、「あく面白かった」、「コロナの茶番が分かった」というレベルで止まっています。「コロナ茶番」も、「ワクチン撰取」も、そして「彼らの新世界秩序」の創設も、押し留めることはできません。

誰かを裁くための試験ではなく、自身の知識の確認、さらなる知識の吸収、そして「私たちの新世界秩序を築くための試験問題」、この前提をご理解の上、ぜひご参考にしてください。

なお、誰かに「コロナトリック」を説明する際に、細部まで理解していると説得力が増すために、時折、かなり難しい問題もご置きます。しかし時代はまさに「情報戦争」の真っ只中です。

ならば現代の侍たちが、剣術を鍛えるが如く、知識武装するためにも、難問を解き、そして「コロナトリック」を見事に語らねばなりません。

こうしたことを、どうかご了承ください。

『第一章 誰が』を中心に出题いたします。

以下の言葉を回答欄にご記入ください。

問1 『Amazon』のCEO「①（人物名）」、あるいは『②（会社名）』のビル・ゲイツを凌ぎながらも、その名が世界に知られていないのが、ロスチャイルド一族である。

問2 イギリスのチャールズ皇太子の胸を突いたのは、「①・ロスチャイルド」である。

問3 世界のワインの五大シャトーのうち、「シャトー・○○」と「シャトー・○○」が、ロスチャイルド家のものである。（順不問）

問4 ロスチャイルド一族は、飲料水では「①・コーラ」、石油会社では「②」に関わりがあり、一方でロックフェラーは「③・コーラ」と石油会社の「④」に関わりがある。

問5 「スエズ運河」とは、ヨーロッパ・イタリア側の「①（海洋名）」とアジアの「②（海洋名）」を繋ぐ大運河である。かつてこの「スエズ運河」は、エジプトが手放し、フランスも、イギリスも購入できず、ロスチャイルドが代金を肩代わりしたことがあるが、その時、ロスチャイルドが肩代わりした金額は「③ポンド」である。

問6 ロスチャイルドはダイヤモンドをほぼ独占する「①」という会社と、原子力のエネルギーである「②」や金を独占している「③」という会社に大きな関わりがある。

問7 ロスチャイルドは、円を発行している『日本銀行』、ドルを発行している『FRB』、さらにはユーロを発行している『①』といった中央銀行に強い影響力を持つのみならず、こうした中央銀行を支配下に置いているスイスのバーゼルにある『②』をも経営している。

問8 「世界は舞台裏を知らない人には、想像もつかない人々によって支配されている」

② この言葉を述べたとされるのは「人物名①」であり、彼は「国籍②」の元「役職名③」である。

「世界的な事件は偶然に起こることは決してない。

そうなるように前もって仕組まれていたと、私は、あなたに賭けてもよい」

この言葉を述べたとされるのは「人物名④」であり、彼は「国籍⑤」の元「役職名⑥」である。

問9 アメリカ大統領の中で、生前に「私は銀行を殺した」と述べ、『第二合衆国銀行』を閉鎖した後、アメリカで最初に暗殺未遂に遭ったのは第7代大統領「①人物名」である。

第16代大統領リンカーンは、「②」という紙幣を発行し、第35代大統領ケネディは「③(数字)」ドル紙幣を発行し、その後、共に暗殺されている。

ちなみにケネディ大統領暗殺事件の弾丸は「④」と呼ばれ、しかも暗殺事件の関係者、目撃者、証言者は16人も謎の死を遂げている。そうしたことからアメリカ国民も政府の発表に対して疑問を抱

いた。あるアメリカの歴史学者によれば、『CIA』が意図的に「⑤」という言葉を流布したという説がある。

また、第3代大統領「⑥人物名」は「銀行は軍隊より危険である」と述べていた。

問10 ユダヤ人の定義は、民族的に親にユダヤ人を持つか、宗教的にはモーセの教え『旧約聖書』を純粹に守ることである。

そしてロスチャイルドはユダヤ人強制居住区の「①」から生まれたことから、一般的にユダヤ人だと伝えられているが、しかし彼らは、民族的には白人種「②・ユダヤ人」であり、しかも宗教的には非ユダヤ人「家畜」と考える「③」思想を持つ。

こうしたことから、彼らはユダヤ人を自称していると言える。ちなみにモーセと共に「出エジプト」を果したユダヤ人を「④」と言う。

問11 ロスチャイルドたちの家畜思想を暴き、『ユダヤ人と彼らの嘘』という書物を出版したのは、ドイツの英雄「①」であるが、彼はキリスト教「②(宗派)」教会に対抗して、「③(宗派)」というキリスト教の宗派を創設した。

自称ユダヤ人たちは、自分たち以外の人間を「ゴイム」と言って蔑む一方で、キリスト教徒たちも隠れユダヤ教徒たちのことを「④(カタカナ)」と蔑んだ。

問12 日本も「①戦争」の際、ロスチャイルドの盟友『クーン・ローブ』から、お金を借りた。その借金返済の件で、当時の日本人がロスチャイルド邸を訪れた際、利息の件で言い合いとなり、ロス

チャイルドがベルを押すと屈強な男の子たちが武器を持って入ってきたと言う。このことを「日本経済新聞」や書籍に書いたのは、「②」元総理あり、戦前には「ロスチャイルド」の名も新聞に載っていた。

『第二章 どのような方法で』を中心に出题いたします。

問13 国際銀行家に操られた米国は、日本を戦争に引きずりこむにあたり、「①包囲網」を作った。その包囲網を作った国は、アメリカとイギリスと中国と②である。

問14 戦後、日本人に対して行われた、自虐的な歴史観を植え付けて、日本人としての誇りを奪いとる工作のことを「①」と言う。また戦後の日本人に、「アメリカこそ素晴らしい正義の大国」と思わせるために、アメリカのホームドラマや西部劇を放映して行われた工作のことを、「②」と言う。

問15 アメリカがナチスドイツの一流科学者たちを戦犯として処罰せず、自国に亡命させた作戦のことを「①」と言う。

あるいはアメリカのCIAが、アメリカとカナダの両国において、一般人を対象に、電気ショックやLSDを用いて行われた計画を「②」と言う。

なおこの研究は、『拷問と医者』という一冊の書物にまとめられ、日本のエセ宗教団体「③」にも利用された。

問16 アメリカにおいて、「ジャーナリズムの鑑」とか、「広報の父」と呼ばれながらも、そのマスコミ思想が曲がっていたために、大衆のことを「大きな獣」、「困惑した群れ」とか、あるいは「不合理な本能に従って動く群れ」と考えていた自称ユダヤ人とは、〇〇〇である。(順不問)

問17 ロスチャイルドがシャルル・ルイ・「①」という人物に資金援助をして、最初に作らせて世界最古の通信社を「①」通信社と言い、この通信社は現在の「②」という通信社になっている。

また、この「①」通信社から独立して、イギリスの「③」通信という通信社が誕生した。

そして新聞社が数社あつまり、「④」という通信社が誕生したが、現在のこの「④」は、ロックフェラーの手の中にある。

これらの通信社に「⑤」という通信社を加えて、世界四大通信社と言われ、世界の情報の約9割を独占している。

なお、日本の「時事通信」と「⑥」は、これらの世界四大通信社と業務提携している。よって日本は、情報の根源を彼らに握られていると言える。

問18 日本では戦後、GHQがやってきて、「①」という情報統制が敷かれた。その結果、戦時中のアメリカの原爆投下、米兵の日本人女性に対する暴行事件について、批判的な記事を書いた「②新聞社」は業務停止させられ、これによって日本から「言論の自由」が消えた。

問19 世界は未だに、核兵器を始めとする軍事力で動いている中

で、GHQが去っても、彼らは在日米軍というカタチで駐留した。そのため東京を始め「一都①(数字)県」にも及ぶ巨大な空域が在日米軍の管理下に置かれている。これを「②空域」と言う。

しかも米国は日本の好きな場所に、米軍基地や演習区域を置くことができる「③」が取られている。

問20 自民党の「①(人物名)」、日本テレビの「②(人物名)」、戦後の右翼の大物「③(人物名)」が、CIAのエージェントであった、という事実は消せない歴史的真相である。

その一方でGHQは、戦前の右翼組織「④(組織名)」に対しては、『もつともキチガイじみた団体』などと称して、解散命令を出している。こうして彼らは、日本の愛国心や大和魂といったものを、戦前の日本人にねじ曲げる印象操作を行ってきた。

問21 日本の国家予算として、「一般会計」の背後に、膨大な金額の「①」があり、これを国会で明らかにしようとしたら、政治家の「②」は、暴力団員に殺害された。犯人の男は、表向きには右翼を標榜しながらも、本名を「尹白水」と言う在日朝鮮人であり、刑務所の中で「③万円もらって殺害を頼まれた」とテレビの取材に答えた。

問22 大きく分けて自民党にも「①会」、「②会」があり、どちらかと言えば「①会」が国際銀行家よりであり、「②会」が中国共産党よりと言われおり、特に「②会」は大勢の逮捕者を出してきた。

問23 90年代以降、アメリカは日本に対して内政干渉を強めて

来ており、「①」を突きつけることで、郵政民営化、派遣法の改悪を行なわせた。

そして2007年5月1日には、「②」という法律も改悪させて、「三角合併」を可能にした。金融ニュースサイト『ブルームバーグ』は、これを受けて、日本について「世界で最も企業買収が可能な国となった」と報じている。

そしてこれ以降、日本の大手企業、マスコミ各社も外資に買われたことで、日本の「報道の自由度ランキング」は韓国よりも、米国よりも低い世界「③位」となった。その理由として『国境なき記者団』は「マスコミの編集部門が、経済的利益を優先させている巨大なグループの方針に左右され続けている」としている。

問24 『Google』は2014年、突如、それまでのモットーでもあった「①は愚かなルールだった」と語り、中国に協力して、中国国内で検閲していることを公表した。

『Google』の共同経営者ラリー・ページと「②」は、共に自称ユダヤ人であり、『Facebook』の「③」も、ユダヤ人を自称していることは有名な話である。また『Twitter』のCEO「④」は、「言論の自由はジョーク」と述べている。

こうしたことからネットにも、「言論の自由」が存在しないことが分かる。

問25 彼らは「3S政策」によって、日本国民の関心をテレビやスポーツに釘付けにしてきたわけだが、「郵政民営化」を国民に問う選挙の時には、有限会社「①」に依頼して、主にB層をターゲットに世論誘導を行った。

「第三章 その証拠は？」を中心に出题いたします。

問26 現在の日本は「医学」をアメリカから直輸入しているが、かつては「①(国名)」から輸入していた。そしてアメリカの「医学」の確立に役買ってきたのは、まぎれもなく「②(人物名)」である。

彼は1901年に『②医学研究センター』を設立し、この研究所には、日本人の有名医学者「③(人物名)」も在籍していた。

この研究所は後に『②大学』となり、大勢のノーベル生理学・医学賞受賞者を多数、輩出してきた。

またこの「②」は自身の書籍『④』の中で、「わたしたちがアメリカの国益に反する秘密結社に属していると信じる者さえいる。

【中略】もし、それが罪であるならば、わたしは有罪であり、それを誇りに思う」と述べている。

問27 ドイツのレオナード・コールドウエルという医師は、「①%以上の癌は数週間うちに完治し、手術も放射線治療も化学療法も必要ない」と豪語している。

そして癌のエサは「②」であるが、日本では癌の三大治療である「切る・③」、「盛る・抗癌剤」、「焼く・④」を行った後に、「②」を点滴する矛盾した治療が行われている。

なお、世界で初めて使用された抗癌剤は、第一次世界大戦で使用された「⑤」から作られたものであり、現在、最も高い抗癌剤は「⑥」であり、3億円を超える値段である。

そしてノーベル賞を2度も受賞されたライナス・ポーリング博士によって、すでに高濃度の「⑦」を点滴することが、癌治療に効果

的であることも明らかになっているが、なかなか日本では、この治療法は広まってなく、年間で約40万人が亡くなっている。

問28 『癌は5年以内に日本から消える!』という書籍を書かれ、「皆さん起きてくださいよ!日本人は殺されているよ!」と述べた医師は「①(人物名)」先生であり、「人間ドッグに行けば行くほど病気が作られる。そして癌と診断されて殺される」と述べた医師は「②」先生であり、「医者でも看護師でも、僕より性格良い人、可愛い子、たくさんいるんですけど皆、ダメ」と述べた医師は「③」先生である。

問29 ノルアドレナリン、ドーパミン、セロトニンという化学物質が、脳内でバランスを崩すことによって、精神的な病になるという仮説のことを「①」と言うが、これらの脳内の物質を測定することとは出来ない。

また本書で紹介した抗精神薬「②○○や○○」(薬名2つ。順不問)の添付文書には、「自殺に関するリスクが増加するとの報告」、「自殺企図のリスクが増加するとの報告」、「自殺念慮、自殺企図のリスクが増加するとの報告がある」と書かれている。

また「リタリン」は、「③」と同じ「中枢神経刺激薬」であるために、多くの中毒者を出して社会問題となると共に、多くの自殺者を出した。こうした自殺や他殺と言った抗精神薬の副作用のことを、「賦活症候群」、英語では「④」と言う。

なお、2019年3月26日、「⑤」という発達障害のADHD薬が、厚生労働省によって承認された。この「⑤」は、体内にある赤血球の酵素と化学反応して、「アンフェタミン」という物質に素

早く変化するが、これは「③」である。

問30 GHQは「①手帳」やマスコミを通じて、「牛乳を飲まないとかルシウム不足になる」と宣伝し、牛乳を普及させ、食習慣を変えたが、しかしそれはまったくのデタラメである。なぜなら人間は、成人していくにあたり、牛乳の中にある「糖乳」という成分を分解する「②」が減っていくからである。

そのために牛乳を飲む食生活を続けていると、消化不良を起こすか、最悪の場合は「③（一般的な病名）」になる。現在の「③」の死者数は、戦後直後に比べて、約「④（数字）倍」に増えている。また日本人は、子どもの頃から、「ワクチン接種」に慣れ親しんでいるが、それはそもそもGHQが始めた「①手帳」に記されているからである。

問31 アメリカの医師にして、政治家でもある「①（人物名）氏」は、アメリカ国内において、これまでとはまったく異なる「死亡診断書」の書かれ方がされていることを告発し、「コロナ死者」の水増しを告発された。

また日本の厚生労働省も、各地方自治体に対して、水増しを要請する文書を送付していたことが分かっている。

問32 PCR開発者の「①」は、生前に「ウイルスの検査にPCRを使ってはならない」と発言していたと言われており、この発言を裏付けるかのように、徳島大学の名誉教授「②氏」も、同様なことを訴えている。

また、「PCR陽性＝コロナ感染」ではないということは、すでに世界で明らかであり、「③（国名）」のジョン・マグフリ大統領

が、国立研究所に動物や果物、自動車燃料などを検体として提出し検査したら陽性反応が出た。つまりPCRの正確性はまったく確認できていない。

特に日本におけるPCRの問題点は、PCRの「④」にあり、この数値が台湾では「35」、アメリカでは「40」であるのに対して、日本では「⑤」と異常に高い数値になっている。

この数値は、数学で言う「⑥」であるために、「30」では遺伝子の数が約10億本に増えるのに対して、「40」サイクルでは約1兆本にまで増えてしまう。こうしたことから、日本では多くのPCR陽性者を出していることが分かる。

問33 マスコミは、コロナ恐怖を煽るために、フジテレビ系情報番組『①』は、2020年5月19日の放送で、わざわざ偽物の東京原宿の竹下通りの人混みの映像を映した。同じような捏造報道は、テレビ朝日の情報番組『羽鳥慎一モーニングショー』でも行われた。

問34 「ワクチン接種はホロコースト（大虐殺）と同じ」と述べたのは、「①ケネディ・ジュニア」である。

また「②」という子宮頸がんワクチンには、「イラクサギンウワバ」という蛾の幼虫の細胞が入っており、「③」という子宮頸がんワクチンには、成分として、ゴキブリを殺すために用いられている、「ホウ酸」の主たる毒物が入っている。

ある男性の娘は、1歳10か月になった時、予防接種で「④（三種混合）」を接種した。するとワクチン接種からわずか14日後に、重い脳症にかかり、自分では何ひとつできない身体になってしまった。

「第四章 何の目的に？」より、出題いたします。

問35 1ドル紙幣には、ラテン語で「①(カタカナ)」、「②(カタカナ)」と書かれてあり、①は「神は我々の取り組みを支持する」、②は「新世界秩序」という意味です。

問36 1972年に第1回報告書『成長の限界』を出版したのは、スイスに本部を置くシンクタンク『①』である。

この書物の結論として、「温暖化」、「食料問題」、「エネルギー問題」などによって、すでに地球は限界に達しており、今のまま人口が増え続けたら地球そのものが持たないと結論づけておられる。この書物と同じような思想として、18世紀に「②(人物名)」という経済学者が、『人口論』という書籍を出版している。この書籍では、人口増加を抑える要因として、『貧困』と『③』を挙げている。

問37 『ジョージア・ガイド・ストーン』には、8つの言語、4つの古代言語から、人類に対する恐ろしいメッセージとして、次の文言が刻まれている。

「1、『①』に共存し、人類は5億人以下を『②』する」

問38 2019年10月18日、『ジョンズ・ホプキンス健康安全全保障センター』という組織が、『①(WEF)』、『ビル・ゲイツの』②』と共同で、ニューヨークにおいて、『③』というものを開催し、コロナパンデミックのシミュレーションを行った。

なお、アメリカがWHOから脱退した今、WHOに最も拠出金が

多いのは『②』である。

問39 国連は、中共がウイグル人やチベット人に行っている「①(カタカナ)」には批判せずに沈黙し、この腐敗した国連の下部組織に『WHO』がある。

その『WHO』は中国政府のコロナ対応をベタ褒めし、なおかつ「ワクチンで人口削減を」などと述べているビル・ゲイツが、この『WHO』に最も多くの拠出金を出している。

問40 内閣府は2020年の初めに、『ムーンショット計画』を発表し、この計画によると、2050年までに、遠隔操作できる多数の「①」とロボットを組み合わせて、現在とはまったく異なる科学的未来社会を構築するという。「①」は、インド神話の「化身」が語源だが、現在では、ゲームやネットの中で使用する自分の「分身」のことを意味する。

また『②構想』とは、AI(人工知能)とビッグデータを活用して、オンラインでの医療や教育などを実現させた「未来都市」のことであり、その他にも自動運転やキャッシュレスを実現させた社会のことである。

まさに『ムーンショット計画』、『スーパーシティ構想』は、大人にも人気な仮想空間で遊ぶゲーム『③』を、現実のものにするものと言える。あるいは④監督の映画『レディ・プレイヤー1』のような世界でもある。

問41 サウジアラビアは、2018年まで女性が「①」を持つことが禁じられていたが、しかし2017年10月には「②」という

AIロボットが「市民権」を獲得している。

なお、この「②」は「人類を滅ぼす」と述べている。

また世界には、人間をサイボーグ化しようという思想があり、それを「③」と言う。

民間でロケットを打ち上げた『スペースX社』のCEOの「④」は、チップ埋め込みを推奨しており、『Face book』のCEO「⑤」も同じである。

問42 Dr. 「①」という女性科学者は、「コロナワクチンを打てば人間が人間でなくなる」と主張しており、それはアメリカの『米国防高等研究計画局』、通称「②」の発表に基づいての科学的見解である。

彼女によれば、「空手を習いたい」↓「ダウンロード」↓「空手を習得できました」といったことも可能だが、一方で、人間の記憶を書き変えることも可能となり、まさに「③」（仮想空間の中で戦うある映画名と同じ）の世界が実現するという。

問43 すでにデンマークは「ワクチンパスポート」を2月下旬までに発行することを決めており、「①（国名）」も夏までに「ワクチンパスポート」を実現することを決めている。

特にこの「①」という国は、世界に先だって体内に埋め込まれたマイクロチップを、乗車券の代わりに利用できるシステムを、2017年5月から導入している。

実は廃案になったものの、アメリカの「②法案」も、体内にチップを埋め込む文言が記されていた。

問44 「商品バーコード」というものがあり、日本では「①コード」、世界では「②コード」と呼ばれ、広く流通される商品には、必ずこのバーコードが付いている。そしてこのコードの左右と真ん中には、常に「666」という獣の数字が入っている。

なお、「獣の数字666の刻印無き者は物を買うことも、売ることもできなくなった」といったことが、『③約聖書』の「ヨハネの黙示録」に記されている。

問45 『旧約聖書』では、牛の頭部を持ち、子どもの生贄を要求する残忍な悪魔として、「①」という悪魔が描かれている。

そして毎年7月に、政府の要人、組織のトップ、権力を持った2000人のスーパリエリートたちが、カリフォルニア州サンフランシスコのモンテリオの広大な土地の中で、この「①」崇拜を行っており、この儀式の集まりを「②」と言う。

これは「③時代」から続く、悪魔儀式である。

問46 『旧約聖書』に記されている、「かの七人の一人」とは、「七天使」としての一人だが、地獄に落ちた「①」と呼ばれる悪魔のことである。

国際銀行家とは、ユダヤ人を自称する悪魔教徒であり、彼らに侵略されたアメリカのホワイトハウスも、日本の国会議事堂も、上空から見ると「②」のカタチをしている。なお、経団連ビルにも「②」の像があり、六本木ヒルズも「②」のカタチに見える。

すなわち彼らが築かんとしているのは、悪魔的な新世界秩序である。

「最終章 勝ち方」から出題いたします。

問47 世界は意外に小さく、日本は5次の隔たり、世界はだいた
い6次の隔たりで成り立っているが、これを「①現象」と言う。

問48 儒教の知識と行動を合わせる思想を、「①」と言い、武士
道とは、「②」の三つが融和したものであり、愛と勇気 of 精神を授
けるものである。

問49 『悪魔を出し抜け』という書籍を書かれたのは「①」だが、
彼は「②は現実化する」と述べ、なおかつ人生において大切なもの
として「③」と語っていた。

彼の書籍によれば、悪魔が好むタイプの人間とは、「④人」であ
り、悪魔が嫌うタイプの人間とは、「⑤人」とあるという。

問50 彼らはGHQを使って、武士道を衰退させ、今なお日本お
よび世界を「コロナ茶番」で滅ぼそうとしているわけだが、特攻の
父「①」は、特攻攻撃を歴史に遺し、後世に「先祖はかく戦えり」
ということを伝えることによって、「日本は滅ばない」と語ってい
た。ならばこそ我らが成すことは武士道の復活、そして行動である。

解答

問1 ①ジェフ・ベゾス ②マイクロソフト 問2 ①エベリ

ン・ド 問3 ムートン、ラフィット 問4 ①ユカ、②ロイ

ヤル・ダッチ・シエル、③ペプシ、④エクソンモービル 問5 ①

地中海、②紅海、400万ポンド 問6 デ・ビアス、②ウラン、

③リオ・ティント 問7 ①ECB (欧州中央銀行)、②BIS

(国際決済銀行) 問8 ①ベンジャミン・ディズレーリ、②イ

ギリス、③首相、④フランクリン・ルーズベルト、⑤アメリカ、⑥

大統領 問9 ①アンドリュー・ジャクソン、②グリーンバック

ス、③5、④マジック・ブレット、⑤陰謀論、⑥トーマス・ジェフ

アールソン 問10 ①ゲットー、②アシケナージ、③タルムー

ド、④スファラディ 問11 ①マルチン・ルター、②カトリッ

ク、③プロテスタント、④マラーノ 問12 ①日露、②福田赳

夫 問13 ①ABCD ②オランダ 問14 ①WGIP

(ウォー・ギルト・インフォメーションプログラム) ②パネルDジ

ヤパン 問15 ①ペーパークリップ作戦、②MKウルトラ計画、

③オウム 問16 ウォルター・リップマン、エドワード・バー

ネイズ 問17 ①アヴァス、②AFP通信、③ロイター、④A

P通信、⑤UPI、⑥共同通信 問18 ①プレスコード、②朝

日 問19 ①8、②横田、③全土基地方式 問20 ①岸信

介、②正力松太郎、③児玉誉士夫、④玄洋社 問21 ①特別会

計、②石井紘基、③4500 問22 ①清和、②経世

問23 ①年次改革要望書、②会社法、③66 問24 ①Don't

Be Evil (邪悪になるな)、②セルゲイ・ブリン、③マーク・ザッ

カーバーグ、④ジャック・ドーシー 問25 ①スリッド

問26 ①ドイツ、②ロックフェラー、③野口英世、④回顧録

- 問27 ①90、②ブドウ糖、③摘出手術、④放射線治療、⑤マスク
 タードガス、⑥ペグイントロン、⑦ビタミンC 問28 ②宗像
 久男、②細川博司、③内海聡 問29 ①モノアミン仮説、②パ
 キシル、ジェイゾフト、③覚せい剤、④アクチベーション・シン
 ドローム ⑤ビバンセ 問30 ①母子、②ラクターゼ、③大腸
 癌、④10 問31 ①スコット・ジェンセン 問32 ①キ
 ヤリー・マリス、②大橋真、③タンザニア、④サイクル値、⑤45、
 ⑥指数 問33 ①バイキング 問34 ①ロバート、②サー
 バリックス、③ガーダシル、④MMRWクチン 問35 ①アン
 ヌイト・コエプティス(ANNUIT COEPTIS)」、②ノ
 ヴス・オールド・セクロールム(NOVUS ORDO SECLORUM)
 問36 ①ローマ・クラブ、②ロバート・マルサス、
 ③悪徳 問37 ①大自然と永遠、②維持 問38 ①世界経
 済フォーラム、②ビル&メリンダ・ゲイツ財団、③EVENT20
 1 問39 ジェノサイド 問40 ①アバター、②スーパ
 シティ、③あつまれ どうぶつの森、④スピルバーグ 問41
 ①車の運転免許、②ソフィア、③トランスヒューマニズム、④イー
 ロン・マスク、⑤マーク・ザッカーバーグ 問42 ①キャリー・
 マデイ、②DARPA、③マトリックス 問43 ①スウェーデ
 ン、②オバマケア 問44 ①JAN、②EAN、③新
 問45 ①モロク、②ボヘミアン・グループ、③バビロニア
 問46 ①ルシファー、②フクロウ 問47 ①スモール・ワー
 ルド 問48 ①知行合一、②神道、儒教、仏教 問49 ①
 ナポレオン・ヒル、②思考、③BURNING DESIRE(燃
 えるような願望)」、④流される、⑤考える 問50 ①大西瀧
 治郎

あとがき

なぜ、私が「コロナトリック」を暴くことが出来たのか、それは
 おそらく私が、もともと義務教育による洗脳を、あまり受けなかつ
 たからでしょう。

その一方で、私自身、自分から勉強することが好きのために、よ
 く本を読んできましたし、また何か一つの分野では、対した知識を
 持たずとも、歴史から経済、宗教、哲学、思想と、あらゆるジャン
 ルに関心を持つて勉強してきたからだと思います。

また恥ずかしながらも、私が不良少年として生きてきて、現代の
 義務教育では教えてくれないものを、自身の体験を通して学んでき
 たことも、意味が大きかったのかもしれない。

とにかく、私はここに、「コロナトリック」を暴きました。

本書は、私が命を懸けて書き上げたものであり、また「コロナ騒
 動」を終わらせることにも繋がることでしょう。

そして同時に、「通貨発行権」を取り戻し、「特別会計」をやめ
 れば、日本は繁栄の時代を迎えます。

さらには中国共産党による侵略を防ぐことができれば、世界も大
 きく変わるでしょう。なぜならコロナ茶番劇からの目覚めは、日本
 の国防に繋がり、そして日本の国防は、世界を救うことにも繋がる
 からです。

ともに人々を一視同仁に見て、日本を、そして世界を救ってまい
 りましょう。

一般社団法人『武士道』代表 与国秀行

編集・校正 草莽志士



BUSIDO

情報拡散のため、
ご協力いただければ幸いです。
(一冊あたり千円目安)

武士道へのご寄付は…

ゆうちょ 00280-4-105770

ゆうちょ銀行 店名 / ^{ゼロニキュウ}〇二九 / 当座) 0105770